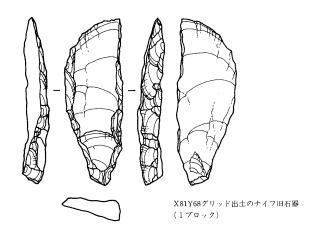
## 横俵遺跡群III

1 9 9 1

前橋市埋蔵文化財発掘調查団

# 横俵遺跡群III



前橋市埋蔵文化財発掘調査団

## 巻首図版 1



1. 赤城山と横俵遺跡群



2. 熊の穴 II 遺跡出土の旧石器

## 巻首図版 2



1. 熊の穴Ⅱ遺跡全景



2. JD-1号土坑出土の縄文式土器

## はじめに

横俵遺跡群が所在する群馬県前橋市は、関東平野の北西端に位置し、北に名 月赤城山を望み、坂東太郎と呼ばれる利根川が市街地の中心部を貫流する水と 緑に恵まれた自然豊かな群馬県の県都であります。

このような豊かな自然に囲まれた本市の歴史は大変古く、人々が生活した跡と思われる遺跡は、今から1万5千年以上前の旧石器時代にまでさかのぼります。現在まで確認されている旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡の多くは、市の北東部に広がる赤城火山斜面に分布しています。この地域は低台地と小河川に開析された谷地が複雑に入り組んでおり、湧水も多く市域の中でも特に古代遺跡が濃密に埋蔵されている地区となっています。このようなことから古墳時代の遺跡もまた数多く分布しており、昭和10年に県下一斉に行われた古墳の分布調査によると、荒砥地区だけでも365基ほど確認されており、それに付随する集落の跡も毎年確認され調査されています。平成2年度荒砥工業団地造成に伴う横俵遺跡群の発掘調査では、古墳時代後期の築造と思われる群集した円墳9基と1万点をこえる縄文時代の土器・石器の包含層、さらに旧石器時代の石器加工跡と思われる包含層が確認されました。特に古墳の調査の中には、古墳総覧に記載されていないものも発見されており、本地域の歴史を説き明かしている上での重要な資料となるもので、貴重な発見となりました。

発掘調査後、遺跡は造成工事のため消滅してしまいますが、発掘調査により 得られた貴重な出土品や遺跡の記録写真などの諸資料は今後広く市民の方々に 利活用していただけるよう整備していく所存であります。

最後になりましたが、本発掘調査を実施するにあたり協力いただきました前 橋工業団地造成組合をはじめとする関係諸機関の方々、酷暑の中作業に従事し ていただきました多くの皆様方に感謝を申し上げるとともに、本報告書が地域 の歴史を説き明かしていくうえで少しでも参考になれば幸甚に存じます。

平成3年3月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 遠藤 液 也

## 例 言

- 1. 本報告書は、前橋工業団地造成組合(管理者 清水一郎)が造成する荒砥工業団地に係る 養 養 遺跡辞熊の汽缸遺跡発掘調査報告書である。
- 2. 遺跡は、群馬県前橋市西大室町16番地ほかに所在する。
- 3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 遠藤次也が施工者 前橋工業団地造成組合 管理者 清水一郎と委託契約を締結し実施した。

調査担当者および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者 都所敬尚・狩野吉弘(前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係)

試掘・発掘調査期間 平成2年5月16日~平成2年11月30日

整理•報告書作成期間 平成2年12日1日~平成3年3月20日

- 4. 本書の原稿執筆・編集は都所・狩野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部シゲ子・小沢和代・桐谷秀子・近藤三代子・下飯有利子・鈴木民江・田口桂子・多田啓子・茂木順の協力があった。
- 5. 石器石材の鑑定は飯島静男氏 (群馬地質研究会員)、地形・地質の鑑定は(有)古環境研究所に お世話になった。
- 6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

## 凡

- 1. 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2. 挿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図(宇都宮)と1/2.5万地形図(大胡)を使用した。
- 3. 本遺跡の略称は2 E24である。
- 4. 各遺構の略称は次の通りである。

J …縄文時代の住居址、JT…縄文時代の竪穴状遺構、JD…縄文時代の土坑、S…集石M…古墳、H…土師器使用の住居址、D…土坑、K…炭窯址、JO…落ち込み(風倒木痕)

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構 住居址・土坑・集石… 1/60、古墳… 1/40・1/120 旧石器時代調査区全体図… 1/120、全体図… 1/500

遺物 土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/4、1/6

6. スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構平面図 焼土…点

遺物実測図 繊維含有土器の断面…点、石器使用痕…線、石器摩滅痕…淡点 須恵器断面…黒塗

## 目 次

12	3 %	ひ	17
は	じ	め	に

I	調査に至	る 経 緯	
II	遺跡の位置	と環境	
	1	遺跡の立	地3
	2	歷史的環	境····································
III	調査の	経 過	
	1	調査方	<del>盒 </del>
	2	調査経	過······· 8
IV	層	序	9
V	旧石器時代	の遺物	10
VI	縄文時代の遺	構と遺物	
	1	住 居	址12
	. 2	竪穴状遺	構13
	3	土	坑13
	4	集	石15
	5	包含層の遺	物15
VII	古墳~平安時	代の遺構と遺	動物
	1	古	墳18
	2	住 居	址20
	3	土	坑20
	4	炭窯	业20
VIII	成 果 と 問	引題点	21
付	編		
	横俵遺跡群テフラ	ラ組成分析 <	(有)古環境研究所>23

図	版
---	---

口絵	1	赤城山と横俵遺跡群	口絵	3	熊の穴Ⅱ遺跡全景
口絵	2	熊の穴II遺跡出土の旧石器	口絵	4	JD-1号土坑出土の縄文式土器
PL.	1	横俵遺跡群全景	PL.	11	旧石器
	2	熊の穴Ⅱ遺跡全景		12	縄文式土器
	3	旧石器出土状態		13	縄文式土器
	4	縄文時代の住居址		14	縄文式土器
	5	縄文時代の遺構		15	縄文時代の石器
	6	縄文時代の土坑		16	縄文時代の石器
	7	縄文時代の土坑		17	縄文時代の石器
	8	M-1・2・4号墳		18	縄文時代の石器
	9	M-6・7・8・10号墳		19	縄文時代の石器
	10	平安時代の遺構		20	古墳~平安時代の遺物
					· ·

• •		<u> </u>			
Fig.	1	横俵遺跡群の位置······vi	Fig.	15	J-2号住居址・JT-2号
	2	横俵遺跡群調査経過図1			竪穴状遺構46
	3	横俵遺跡群位置図2		16	縄文時代の竪穴状遺構・集石47
	4	横俵遺跡群周辺遺跡図5		17	縄文時代の土坑(1)48
	5	グリッド設定図7		18	縄文時代の土坑(2)49
	6	発掘調査経過図8		19	縄文時代の土坑(3)50
	7	熊の穴Ⅱ遺跡標準土層図9		20	M-1号墳墳丘図·····51
	8	旧石器器種別水平分布図37		21	M-2号墳墳丘図·····52
	9	旧石器器種別垂直分布図38		22	M-4号墳墳丘図·····53
	10	旧石器石材別水平分布図39		23	M-5 • 6 • 8 号墳墳丘図⋯⋯⋯54
	11	旧石器石材別垂直分布図40		24	M-7号墳墳丘図·····55 • 56
	12	熊の穴Ⅱ遺跡縄文時代遺構		25	M-10号墳墳丘図·····57
		全体図41·42		26	M-1号墳石室平面図·····58
	13	熊の穴Ⅱ遺跡古墳〜平安時代		27	M-1号墳石室床面図······59 • 60
		遺構全体図43 • 44		28	M-3号墳石室平面•床面図61
	14	J-1号住居址······45		29	M-8号墳石室平面·床面図61

31 M-2 号墳石室床面図	器85
33 M-4号墳石室床面図 65 56 縄文式土器(8)・・VI群土器 34 M-6号墳石室平面図 66 57 縄文式土器(9)・・VII・VIII・VIII群土器 35 M-6号墳石室床面図 67 58 縄文時代の石器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	器86
34 M-6号墳石室平面図 66 57 縄文式土器(9)・・VII・VIII幹土器 35 M-6号墳石室床面図 67 58 縄文時代の石器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	87
35 M - 6 号墳石室床面図 67 58 縄文時代の石器(1) 36 M - 7 号墳石室平面図 68 59 縄文時代の石器(2) 37 M - 7 号墳石室平面図 69 60 縄文時代の石器(3) 38 M - 10号墳石室平面図 70 61 縄文時代の石器(4) 71 62 縄文時代の石器(5) 40 Z - 1 号配石墓展開図 72 65 縄文時代の石器(6) 72 41 平安時代の住居址・土坑 73 64 縄文時代の石器(6) 74 65 縄文時代の石器(7) 75 66 縄文時代の石器(8) 75 66 縄文時代の石器(8) 75 66 縄文時代の石器(9) 75 66 縄文時代の石器(10) 77 68 縄文時代の石器(10) 77 68 縄文時代の石器(10) 78 69 縄文時代の石器(10) 78 69 縄文時代の石器(10) 79 70 縄文時代の石器(10) 70 縄文時代の石器(10) 70 縄文時代の石器(10) 70 縄文時代の石器(10) 70 縄文時代の石器(10) 70 縄文時代の合器(10) 70 縄文時代包含層の遺物分布(10) 70 縄文計工業(10) 70 縄文時代包含層の遺物分布(10) 70 縄文計工業(10) 70 縄文計工業観察表 70 縄文計工器観察表 70 縄文計工器観察表 70 組文計工器観察表 70 縄文計工器観察表 70 組文計工器観察表 70 組文計工程 70 組文 70 組文計工程 70 組文 70 組 70 組	88
36 M - 7 号墳石室平面図	器89
37 M - 7 号墳石室床面図	90
38 M-10号墳石室平面図・・・・70 61 縄文時代の石器(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	91
39 M-10号墳石室床面図・・・・・ 71 62 縄文時代の石器(5)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	92
40 Z-1号配石墓展開図 72 65 縄文時代の石器(6) 41 平安時代の住居址・土坑 73 64 縄文時代の石器(7) 64 縄文時代の石器(7) 65 縄文時代の石器(8) 74 65 縄文時代の石器(8) 75 66 縄文時代の石器(9) 75 66 縄文時代の石器(9) 75 66 縄文時代の石器(10) 76 67 縄文時代の石器(11) 77 68 縄文時代の石器(11) 78 69 縄文時代の石器(11) 78 69 縄文時代の石器(12) 79 70 縄文時代の石器(13) 78 69 縄文時代の石器(13) 78 69 縄文時代の石器(13) 79 70 縄文時代の石器(13) 79 70 縄文式土器(14) 79 70 縄文時代の石器(13) 72 古墳~平安時代の遺物(1) 72 古墳~平安時代の遺物(1) 72 古墳~平安時代の遺物(2) 73 縄文式土器(1) 81 72 古墳~平安時代の遺物(2) 74 縄文時代包含層の遺物分布(1) 49 縄文式土器(3) 83 74 縄文時代包含層の遺物分布(2) 48 2 11 日石器石材一覧 84 2 11 日石器石材一覧 10 11 7 12 11 11 7 2 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 1	93
41 平安時代の住居址・土坑・・・ 73 64 縄文時代の石器(7)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	94
42 K-1号炭窯址・・・・・ 74 65 縄文時代の石器(8)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	95
43 K-2号炭窯址・・・・・ 75 66 縄文時代の石器(9)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	96
44 旧石器時代の遺物(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	97
45 旧石器時代の遺物(2)・・・・・・ 77 68 縄文時代の石器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	98
46 旧石器時代の遺物(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	99
47 旧石器時代の遺物(4)・・・・・79 70 縄文時代の石器(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	100
48 旧石器時代の遺物(5)・・・・80 71 古墳〜平安時代の遺物(1)・・・・ 49 縄文式土器(1)・・・・・81 72 古墳〜平安時代の遺物(2)・・・・ 50 縄文式土器(3)・・・・82 73 縄文時代包含層の遺物分布(2) 51 縄文式土器(3)・・・・84 3 74 縄文時代包含層の遺物分布(2) 52 縄文式土器(4)・・・・84  表  「百  Tab. 1 旧石器石材一覧・・・・・10 Tab. 6 旧石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	101
49 縄文式土器(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	102
50 縄文式土器(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	103
51 縄文式土器(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·····104
表	(1) ·····105
表	(2) ·····106
頁       Tab.     1 旧石器石材一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
頁       Tab.     1 旧石器石材一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Tab.       1 旧石器石材一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2 旧石器ブロック別石材一覧・・・・・・・11       7 縄文式土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
3 包含層出土の縄文式土器一覧15       8 縄文時代の石器観察表4         4 縄文時代の石器一覧16       9 古墳〜平安時代の遺物観察表	26
4 縄文時代の石器一覧16 9 古墳〜平安時代の遺物観察表	·····27~30
	·····31~35
5 縄文時代の石器石材一覧16	₹表⋯⋯36

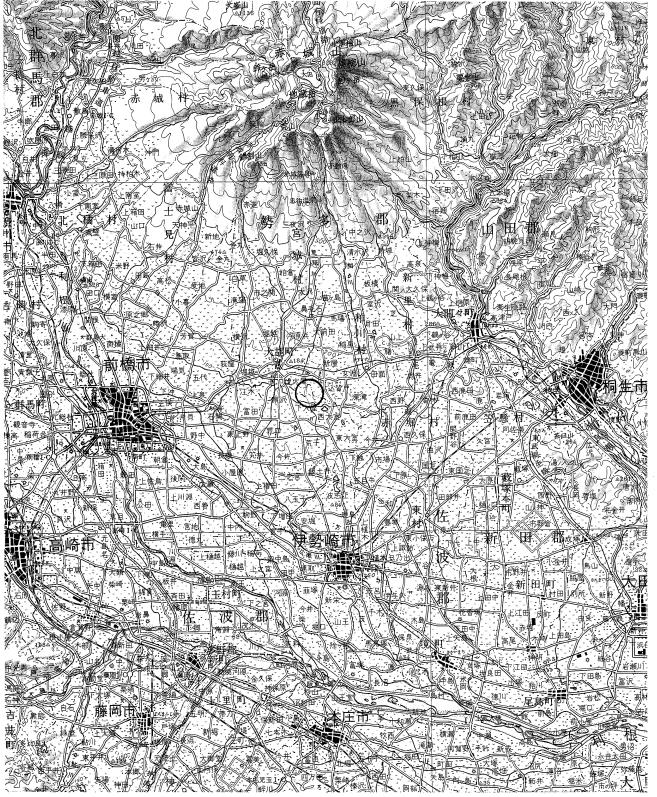


Fig. 1 横俵遺跡群の位置(○印)

## Ⅰ 調査に至る経緯

横俵遺跡群の発掘調査は前橋工業団地造成組合(管理者 清水一郎)から依頼された荒砥工業 団地予定地の55haを対象に昭和63年度から実施されているものである。

昭和63年度は試掘調査、平成元年度は直営・民間委託合わせて3パーティが、開発優先順位の高い場所から本調査を実施した(成果については横俵遺跡群I・IIを参照)。

3年次にあたる平成 2年度の調査は、平成 2年 5月16日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。調査範囲は、昨年度民間委託によって試掘調査が実施済みで遺構が確認されていた熊の穴の丘陵部分(プラスランド内緑地およびヘリポート予定地部分:約10,000㎡)であり、調査団が直営で本調査を行った。現地での発掘調査は平成 2年 5月16日から11月30日まで行い、整理作業は平成 2年12月 1日から平成 3年 3月20日までであった。なお、本遺跡の名称は旧地籍の小字名を採用し、昨年度実施された熊の穴遺跡に隣接しているため熊の祭 $_{11}$ 遺跡とした。

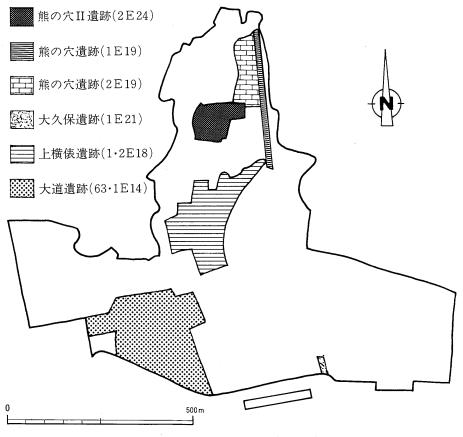


Fig. 2 横俵遺跡群調査経過図

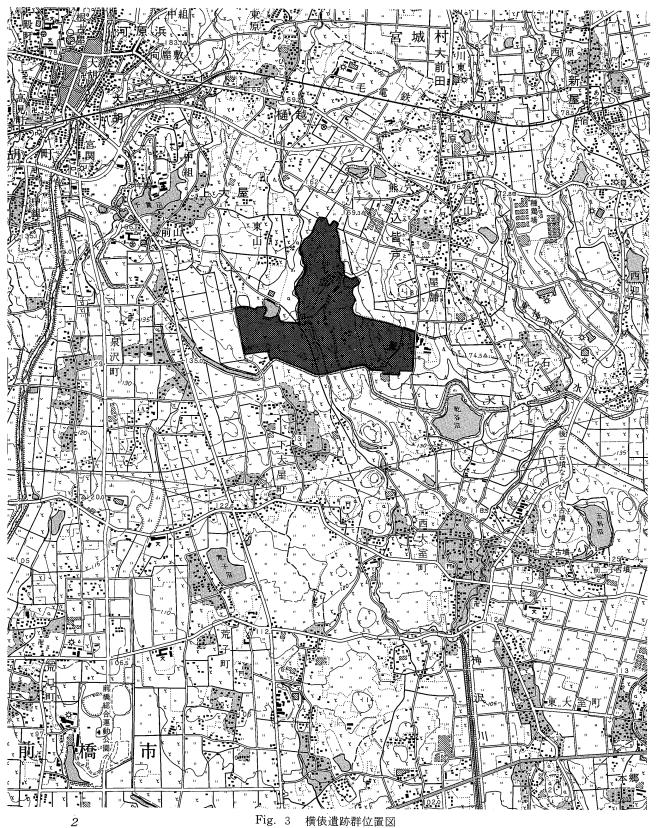


Fig. 3 横俵遺跡群位置図

## II 遺跡の位置と環境

## 1 遺跡の立地

今年度の調査地熊の穴II遺跡を含む横俵遺跡群は前橋市西大室町字熊の穴・上横俵・中横俵・大久保、下大屋町字上諏訪山・大道に所在している。前橋市の市街地からは東へ約9kmの位置にあり、東西約1.2km、南北約1km、面積約55haという広大な範囲に及んでいる。遺跡群の周辺には、西方約500mに主要地方道伊勢崎・大胡線が南北に、北方約500mには主要地方道前橋・大間々・桐生線が東西に走り、間近に大胡警察署を望むことができる。また、上毛電鉄樋越駅・北原駅へは約1kmの近距離にある。すなわち、北は大胡町、東は粕川村に接する、前橋市の北東端とも言える場所に立地している。

本遺跡は、こうした横俵遺跡群のなかでも最も標高の高い丘陵(最頂部165m)に位置する。 遺跡地の最頂部に立ってみると、起伏に富んだ周囲の地形を手に取るように眺望することができ る。西側は急峻な崖で、谷底を流量の少ない神沢川が南流している。北側から東側にかけては遺 跡地を迂回するように細い谷底平野が南北に形成され、この谷底平野をはさんだ粕川村側にはな だらかな丘陵が南北に横たわっている。このような丘陵地形は赤城山南麓地帯に源をもつ荒砥 川、神沢川、粕川等の流域で多く見られるものであり、これらの河川が南流することによって営 まれたものがほとんどであるが、本遺跡地の独立丘陵はこれらとは異なり、主に赤城山の形成過 程に由来するものである。

本遺跡地の所在する地域一帯は、今から、約20~30万年前におこった赤城山の山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれ(梨木泥流)によって形成された斜面を基盤としており、遺跡地の小山のような地形は、その際に山体を構成していた地層が比較的まとまった形で運ばれてきたもので、周囲より高く突出している。この突出部は、とくに「流れ山」と呼ばれる、本遺跡地の基盤層と考えられるものである。このことは遺跡地の頂上部付近に露出している安山岩の巨石からも推察できるが、頂上部と最低地付近の2カ所で実施した地層観察用の深堀により、実際に確認することができた。最低地ではAs-B・As-C等を含む黒土層の下に、As-YP・As-SP・As-BP・AT・暗色帯・Hr-HP等の関東ローム層が約3mも厚く堆積していたが、頂上部では黒土層から暗色帯までわずか1m足らずでその下は岩盤に覆われている。頂上部のローム層の堆積が最低地に比べ極端に少ないのは、風や流水等によって低地方面に流されたためであろう。

なお、本遺跡地は標高 $155\sim165$ m、平均斜度約6°を測る北西から南東へ向かう丘陵の斜面に立地している。また、戦後の昭和23年に新たな開墾が行われた土地であり、現況では桑畑や野菜畑を主とした畑として利用されていた。今回の調査で確認された9基の古墳はいずれもその開墾時に削平、破壊されたものと考えられ、残存状態はあまり良好ではなかった。しかし、昭和の開墾から旧石器の検出まで、人々の残した痕跡を確認することができたとも考えられよう。

#### II 遺跡の位置と環境

## 2 歴史的環境

横俵遺跡群がある赤城山南麓に位置する荒砥地区は、古墳の多い群馬県下でも、最も密な分布がみられる地域の一つである。さらに、周辺地域にいたっては遺跡の包蔵地も数多く確認されている。近年、土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡の数も非常に多く、今現在も増え続けている。

今回の調査では旧石器が検出されたが、本遺跡群周辺における旧石器の出土例は数少ない。ただ、最近では柳久保遺跡群頭無遺跡(33 e)から細石刃やナイフ形石器等を伴う3つの文化層が検出されているほか、三屋遺跡(13)、西原遺跡(65)等では尖頭器を中心とした石器が出土している。縄文時代では、草創期から後期まで幅広く検出されている。なかでも、上縄引遺跡(59)、北山遺跡(60)、天神風呂遺跡(6)で検出された早期~中期の集落を筆頭に、谷津遺跡(10)、稲荷山遺跡(64)、荒砥上諏訪遺跡(49)等があげられる。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、荒口前原遺跡(26)で中期から後期初頭の住居址が、北山遺跡(60)、下縄引遺跡(58)、久保皆戸遺跡(53)、西原遺跡(65)で後期の住居址が検出されている。さらに、七ツ石遺跡(61)では、弥生時代終末期から古墳時代初頭への過渡期とみられる住居址が10数軒調査されているが、全般に大規模な集落は未だ検出されていない。

古墳時代なると、荒砥地区には国指定史跡となっている西大室の3二子古墳(54・55・56)をはじめ、数多くの古墳が築造されている。本遺跡群内にも後期群集墳の上横俵古墳群(1 d)が存在するほか、今回の調査地である熊の穴II遺跡からも同時期の古墳9基を確認した。また、東方に隣接する七ツ石古墳群(62)では、巨石巨室を持つ古墳が2基検出され、7世紀中葉のものと考えられている。また、西方約1.7kmには6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ山ノ上・茂木両古墳(8)が、さらに南方には、阿久山古墳群(45)、伊勢山古墳群(46)、中島古墳群(47)等が連続的に位置している。一方、集落は急激な増加がみられる。前期のものは内堀遺跡群(57)、荒砥宮田遺跡(24)、梅木遺跡(51)、荒砥諏訪西遺跡(22)、荒砥東原遺跡(44)、大室小学校校庭遺跡(48)等で、中期は集落址のほかに荒砥荒子遺跡(41)、丸山遺跡(15)で豪族居館址が発見されている。続く後期では北山遺跡(60)、天神風呂遺跡(6)、渋沢遺跡(68)、前田遺跡(69)等で集落址が検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落が出現する。天神風呂遺跡(6)、谷津遺跡(10)、丸山遺跡(15)、北山遺跡(60)、大室小学校校庭遺跡(48)、大久保遺跡(34)、堤東遺跡(38)、荒子小学校校庭遺跡(36)、西迎遺跡(67)等がそれらにあたる。また、柳久保水田址(33 f)、荒砥諏訪西遺跡(22)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥前田遺跡(25)等のような、荒砥川及び宮川流域に位置する遺跡においては、As-B軽石によって埋没した水田址が集落址とともに発見されている。これら以外の特殊遺構としては、上大屋・樋越地区遺跡群(7)からは須恵器窯址、炭窯址、製鉄址遺構を含む八が峰生産址遺構が、また、荒子小学校校庭遺跡(36)からは須恵器窯址が検出されており、本地域の発展の様子を窺うことができる。

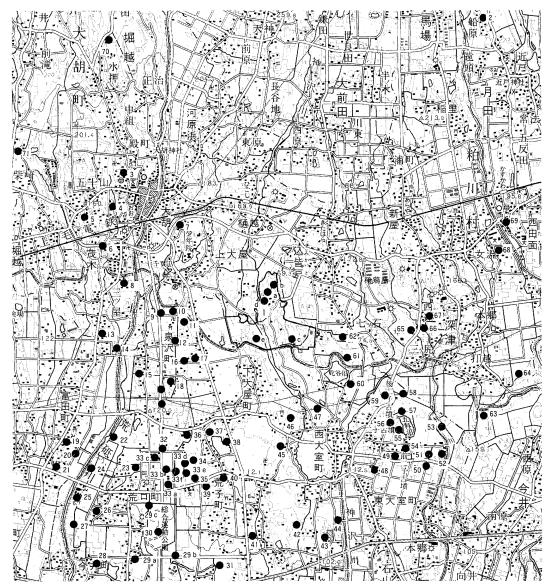


Fig. 4 横俵遺跡群周辺遺跡図

1. 横侯遺跡群(a. 熊の穴II遺跡 b. 熊の穴遺跡 c. 大久保遺跡 d. 上横侯遺跡 e. 大道遺跡 ①. 上横佞古墳 群) 2. 月田古墳群 3. 殿町遺跡 4. 天神A・B・C地点遺跡 5. 堀越古墳 6. 天神風呂遺跡 7. 八ケ峰生産 址遺構 8. 山ノ上、茂木古墳 9. 山崎遺跡 10. 谷津遺跡 11. 寺東遺跡 12. 寺前遺跡 13. 三屋遺跡 14. 荒砥355 号墳 15. 丸山遺跡 16. 東前田北遺跡 17. 東原西遺跡 18. 新山遺跡 19. 東原古墳群 20. 東原遺跡 21. 宮下遺跡 22. 荒砥諏訪西遺跡 23. 荒砥諏訪遺跡 24. 荒砥宮田遺跡 25. 荒砥前田遺跡 26. 荒口前原遺跡 27. 荒砥北原遺跡 28. 荒砥北三木堂遺跡 29. 荒砥大日塚遺跡 30. 鶴谷遺跡群 31. 荒砥上之坊遺跡 32. 柳久保遺跡 33. 柳久保遺跡群 (a. 下鶴谷遺跡 b. 柳久保遺跡 c. 諏訪遺跡 d. 中鶴谷遺跡 e. 頭無遺跡 f. 柳久保水田址) 34. 大久保遺跡 35. 頭無遺跡 36. 荒子小学校校庭遺跡 37. 川篭皆戸遺跡 38. 堤東遺跡 39. 荒砥下押切遺跡 40. 荒砥中屋敷遺跡 41. 荒砥荒子遺跡 42. 立野古墳群 43. 丸山古墳群 44. 荒砥東原遺跡 45. 阿久山古墳群 46. 伊勢山古墳群 47. 中島古墳群 48. 大室小学校校庭遺跡 49. 荒砥上諏訪遺跡 50. 荒砥五反田遺跡 51. 梅木遺跡 52. 荒砥上川久遺跡 53. 久保皆戸遺跡 54. 前二子古墳 55. 中二子古墳 56. 後二子古墳 57. 内堀遺跡群 58. 下縄引遺跡 59. 上縄引遺跡 60. 北山遺跡 61. 七ツ石遺跡 62. 七ツ石古墳群 63. 茶臼山古墳 64. 稲荷山遺跡 65. 西原遺跡 66. 三ケ尻遺跡 67. 西迎遺跡 68. 渋沢遺跡 69. 前田遺跡 70. 甲諏訪遺跡 71. 柴崎古墳群

## Ⅲ調査の経過

## 1 調査方針

昭和63年度から始まった横俵遺跡群の発掘調査は、今年度で3年次を迎えた。調査範囲があまりにも広大なため、昨年度からは調査団および民間委託により平行して調査が実施されてきた。今回の調査団直営による調査区の範囲は、荒砥工業団地造成予定地約55haのうち市道556号線と本遺跡群内を南北に縦断する神沢川に挟まれた丘陵地の斜面約10,000㎡である。また、昨年度直営で調査を行った市道556号線から検出され、今年度は民間委託により拡張調査が行われている熊の穴遺跡の西側に隣接する部分であるため、調査は基本的には昨年度の調査方針に準じて行った。すなわち、調査区の呼称方法については、本遺跡群全体をとらえたグリッドを設定し、4mピッチで西から東へX1、X2、X3…と、北から南へY1、Y2、Y3…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。X75、Y75の公共座標は第IX系+44.7、-58.7kmである。

本遺跡地は南北に走る幅約7mの農道によって分断されている。そこで、遺跡内の地区の呼称については、今年度の調査の主体を占める道路の西側をA区、東側をB区、道路上をC区と便宜上呼ぶことにした。C区の調査は今年度中は困難であったため、検討の結果、来年度以降に実施することとした。

今年度の調査区は本調査に入る以前の段階から、委託業者の手によりトレンチによる試掘調査、表土剝ぎ、および公共座標に基づく20m方眼の植杭がほぼ完了していたので、調査開始後ただちに古墳~平安時代のプラン確認を実施しながら、必要に応じて4m方眼の杭を植杭した。水準については荒砥工業団地内の基準点を利用し、遺跡内にB.M.杭を20m間隔、海抜高0.5m単位で設定し使用した。また、拡張部分の表土剝ぎ、A区南半分およびB区の縄文時代面の試掘調査は重機(バックフォー0.7㎡)を用い、時間の節約に努めた。

縄文時代遺物包含層の調査は、20mピッチで土層観察用のセクション・ベルトを残し、4mグリッド単位で移植ゴテ、ジョレン等を使い、人力で硬質(ハード)ローム上面まで掘り下げた。さらに、グリッド毎の収納遺物数を1/500の図面に記し、遺物包含層の範囲を把握しながら、そのつどその後の調査行程を検討しながら調査を行った。旧石器時代の調査も人力で2mグリッド単位でAT層の下まで掘り下げ、出土地点、出土遺物数および地形等を考慮しながら調査範囲の確定を行った。

図面作成は、平板・簡易遣り方測量を用い、原則的に1/20の縮尺で、必要に応じて1/10・1/40の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をとりながら収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、旧石器をはじめとする重要遺物等は、分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で1/200の現況図を作成し、その後の調査に活用した。

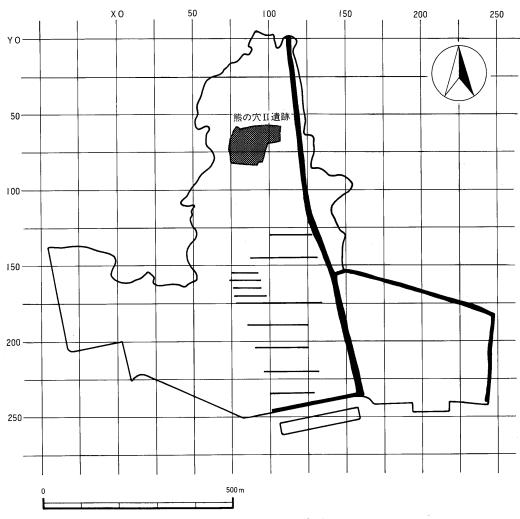


Fig. 5 グリッド設定図

## 試掘調査

### 1. 旧石器時代面

縄文時代遺物包含層の調査の中で旧石器が出土した地点周辺をねらって、2mグリッドを設定し掘り下げ、調査範囲を検討しながら本調査に移行していった。

### 2. 縄文時代面

遺物包含層となっていたA区北半分以外の地点については、幅2mのトレンチを設定して試掘調査を実施した。そのうちA区南半分では方眼杭を利用し、基本的に16m間隔にトレンチを設定した。

3. 深掘りは丘陵の頂上部と最低部の2カ所に設定し、地形・地層観察に努めた。

#### Ⅲ調査の経過

#### 調查経過 2

第3年次に当たる今年度の発掘調査は、平成2年5月16日から11月30日までの約7カ月間にわ たり実施された。調査区2カ所、面積は10.000mである。4月の段階で打ち合わせを済ませ、委 託契約締結日である5月16日から本格的な調査に入った。ただし、当調査地区は昨年度中に今年 度の調査をみこした試掘調査の一環として、試掘トレンチおよび表土剝ぎは完了しており、すで に7~8基ほどの古墳の存在も確認済みであった。調査地区の中ほどをほぼ南北に縦断する道路 を境に西をA区、東をB区としグリッド設定後ただちに古墳〜平安時代の遺構確認を実施した。 5月は主に古墳の調査とB区で検出されたH-1号住居址の精査に費やされた。この期間でB区

の進捗状況は80%に達した。6月は古墳の精査と、As-B降下以 前の2つの炭窯の掘り下げにあたった。このころから作業中に出 る大量の残土の処置を前工団と検討し、A区南側に用地を設け作 業の合理化をはかった。また、A区南側の拡張部分から新たに検 出されたM-10号墳を含め、合計9基の古墳の精査に一応の区切 りをつけ、7月からはA区の北半分の東斜面で縄文包含層の掘り 下げを開始した。土器や石器等大量の出土遺物に範囲の拡大を重 ね、この作業は結局10月上旬まで続くことになった。夏場猛暑の 中、手掘りによる作業は困難を極めたが、出土遺物の中に旧石器 時代のナイフ形石器 1 点が発見され、秋以降の旧石器発掘の端緒 となった。9月からは、縄文包含層の調査範囲を南斜面にも拡大 し、縄文時代の住居址の発見に全力をあげた。その結果、10月に は炉址をもつ住居址2軒をはじめ土坑27基、集石3基を発見する ことができ、縄文時代面の調査に一応の決着を見た。

それ以後調査の主体は古墳の掘り方の調査(古墳の解体調査) と旧石器の発掘に移った。旧石器の試掘ではA区丘陵頂上部から やや南東に下がった場所で、巨大な岩石が露出している地点を中 心に手掘りでAT層の下まで掘り下げた。その結果、AT層の付 近から、ナイフ形石器や石核等を含む旧石器を多数発見すること ができた。

また、旧石器の発掘と同時進行していた古墳の掘り方の調査 も、巨石の除去に細心の注意を払いながら作業を進め、11月21日 には9基すべてを終了、29日には一部機材の撤収を行った。その 🔛 試掘調査 🔙 発掘調査 後、旧石器の出土範囲を確定するための試掘を11月30日に終了、 ここにすべての現地調査が完了した。

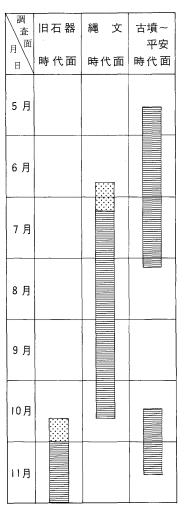


Fig. 6 発掘調査経過図

## IV 層 序

第II章(遺跡の立地)でも記したように本遺跡は、赤城火山の山体崩壊時に形成された「流れ山」の上に赤城・浅間・榛名等の諸火山によって噴出された火山灰が風化し、形成されたローム層に覆われている。その際、これらの火山灰が低地部を中心に吹きだまるかたちで堆積していったため、一般にローム層は、頂上部に薄く、低地部に厚く堆積している。このことから、遺跡の層序は、各地点により堆積状況に違いはあったものの、基本的にはFig. 6の通りである。

- I 層 黒褐色粗砂層。粘性をわずかに有し、軟らかいが締まる。As-Cを20~30%含む。
- II 層 黄褐色粗砂層。粘性を有し、軟らかいが締まる。ローム土が50%以上含まれる。
- III 層 黄褐色軟質 (ソフト) ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まっている。均一な層であり、縄文時代遺物包含層となっている。また、古墳時代の遺構がこの層で確認できる。
- IIIa層 黄褐色軟質(ソフト)ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まる。この層からも縄文時

代の遺物が出土するが、数は極端に減少する。 また、縄文時代の一部の遺構もこの層から確認 できる。

- IV 層 黄褐色硬質 (ハード) ローム層。上部にAs-YP がブロック状に入る。粘性・締まりともに有り。 縄文時代遺構確認面。
- V 層 黄褐色硬質(ハード)ローム層。As-SPを霜降り状に含む。粘性・締まりともに有り。
- VI 層 黄褐色硬質(ハード)ローム層。As-BPが入り、 下部に純層をブロックで含む。
- VII 層 黄褐色硬質 (ハード) ローム層。As-BPをわず かに含む。
- ₩ 層 明黄褐色微砂層。粘性を有し、締まりは弱い。 広域テフラATが入る。今回の旧石器はこの直 下で検出された。
- IX 層 暗褐色ローム層。暗色帯。粘性・締まり強い。
- X 層 明黄褐色硬質(ハード)ローム層。粘性・締まりともに強い。
- XI 層 明黄褐色硬質 (ハード) ローム層。粘性・締まりともに強い。
- XII 層 明黄褐色軽石層。Hr-HP。
- XIII 層 褐色粘土層。粘性・締まりともに非常に強い。

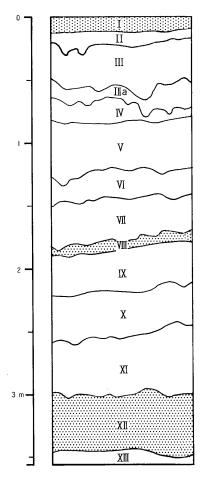


Fig. 7 熊の穴II遺跡標準土層図

## V 旧石器時代の遺物 (Fig. 8~11・44~48、PL. 3・11)

本遺跡の旧石器は、丘陵の頂上部付近に露出していた安山岩の巨石周辺から検出された。旧石器発見のきっかけとなったものは、縄文包含層の調査時にX79Y73グリッドから出土した珪質頁岩製のナイフ形石器である。その後、石器群が存在すると思われた地点に2mグリッドを設定し、石器の包含の予想される暗色帯上面まで試掘調査を行った結果、数点の石器がAT層付近から出土した。さらに、 $X79\sim X83$ 、 $Y65\sim Y71$ グリッドに調査範囲を拡張した結果、合計128点の石器が検出された。

今回の旧石器調査区の層序は原則的に  $I \sim V$  層と考えた。 I 層はAs-Y P が散在する層である。 II 層はAs-B P が入る褐色ローム層、III 層はA T 層との漸移層とし、IV 層がA T が認められる層である。 さらに暗色帯を V 層とした。ただ、出土範囲が丘陵の頂上部からやや下がった、言わば頂上の縁辺付近から斜面にかかる地点であったため、Y 67 ラインと Y 70 ラインとの同じ層のレベル差は極端な変化があった。つまり、斜面上であるため石器の出土層位を厳密に把握することは困難を要したのである。そのため、垂直分布図では出土層位を正確に表現できず、多数検出された剝片、砕片などの文化層の形態については今後検討しなければならない問題であるが、今回は調査時の石器の出土状態をふまえ、ほぼ 1 つの文化層に入るものであると考えた。

器種別では、ナイフ形石器10点(縄文包含層の調査で検出された4点を含む)、石錐1点、楔形石器1点、削器1点、石核5点、使用痕のある剝片1点、剝片101点、砕片8点に分類される。石器組成をみると剝片と砕片の2種類だけで全体の86%を占めるが、ナイフ形石器も全体の8%にあたり、他遺跡の割合と

比較するとかなり割合が高いと いう特徴がみられる。

次に、石材をみると128点の石器のうち約60%にあたる76点がチャート、次いで黒色安山岩19点、黒色頁岩16点、珪質頁岩13点の順で、この4つの石材が97%を占める。これら石材の分布や石器の出土分布、さらに当時には露出していたと思われる安山岩巨礫の分布等をふまえ、今回の出土遺物を3つのブロックに分類した。

Tab. 1 旧石器石材一覧

石材器種	黒曜石	チャート	珪質頁岩	黒質頁岩	頁岩	黒色安山岩	変質玄武岩	黒色片岩	合計
ナイフ形石器	0	4	1	2	0	3	0	0	10
石 錐	0	1	0	0	0	0	0	0	1
楔 形 石 器	0	1	0	0	0	0	0	0	1
削器	0	0	0	1	0	0	0	0	1
石核	0	5	0	0	0	0	0	0	5
使用痕のある剝片	0	1	0	0	0	0	0	0	1
剝片	1	60	11	12	1	14	1	1	101
砕 片	0	4	1	1	0	2	0	0	8
合 計	1	76	13	16	1	19	1	1	128

#### 1ブロック

 $X80\sim82$ 、 $Y68\sim70$ グリッド内に位置する。丘陵の頂上部から南東へ向かう急な斜面にかかる途中の傾斜変換線上付近にあたり、分布形態は長径約8 m、短径約5 mの楕円形を呈する。遺物は長径5 mほどの安山岩の巨石の南側にあたるX81、 $Y68\cdot69$ グリッドを中心に分布するが、周辺部に至っては比較的散漫な分布を示す。出土層位はAT層もしくはAT層の下を中心に出土がみられた。石器はナイフ形石器5点、チャート製の石核2点のほか計40点検出された。石材別ではチャート15点、珪質頁岩11点、黒色頁岩6点、黒色安山岩6点ほかの順である。このブロックの特徴としては、チャートとほぼ同じ割合で珪質頁岩がみられるということである。また、今回唯一検出された黒曜石もこのブロックから出土している。また、接合資料は剝片の2点(88+95・97+99)がみられた。

#### 2ブロック

 $X79 \cdot 80$ 、 $Y67 \sim 69$ グリッド内、1 ブロックの北西に位置する。丘陵の頂上部から南へやや下がった南斜面上にあたり、直径約8 mの円形の分布形態を呈する。遺物は緻密な分布状況を示しており、総点数は59点である。内訳はナイフ形石器1点、石錐1点、楔形石器1点、石核3点、剝片49点、砕片4点からなる。石材別にみるとチャートが90%以上を占める。チャートはさらにきめの細かいきれいなもの、粗いきたないもの、しまの入るものの3種類に分類することができ、これをもとに接合を行った結果、接合資料は石核に剝片が接合するもの1点(42+43+51+53)、剝片3点( $2+6 \cdot 5+44 \cdot 22+54+58$ )がみられた。このうち5+44については安山岩の礫群を飛び越えた形で接合関係が認められた。

#### 3ブロック

X81・82、Y67・68グリッド内、 1ブロックの北東、2ブロックとは 安山岩の巨石をはさんだ東側に位置 する。石器総点数14点の小ブロック。分布形態は長径約5m、短径約 3mの楕円形を呈し、中央部に安山 岩の礫が存在する。削器1点のほか には剝片10点、砕片3点と多くを占 めている。石材別にみても黒色頁 岩、黒色安山岩がともに6点と主体 を占め、チャートは2点に過ぎない。接合資料は黒色安山岩の剝片1 点(108+109+110)がみられ、AT 層下から出土しているものである。

Tab. 2 旧石器ブロック別石材一覧

ブロ ック	石材 器種	ナイフ 形石器	石錐	楔形 石器	削器	石核	使用痕の ある剝片	剝片	砕片	合計
	黒 曜 石							1		1
1	チャート	2				2	1	10		15
ブ	珪質頁岩							10	1	11
ㅁ	黒色頁岩	2						4		6
ッ	黒色安山岩	1						5		6
ク	変質玄武岩							1		1
	小 計	5	0	0	0	2	1	31	1	40
2	チャート	1	1	1		3		45	4	55
ブ	黒色頁岩							2		2
ㅁ	黒色安山岩							1		1
ッ	黒色片岩							1		1
ク	小 計	1	1	1	0	3	0	49	4	59
3	チャート							2		2
ブロ	黒色頁岩				1			4	1	6
ッ	黒色安山岩							4	2	6
ク	小 計	0	0	0	1	0	0	10	3	14
-,11	チャート	1						3		4
ブー	珪質頁岩	1						1		2
ロッ	黒色頁岩							2		2
ク	頁 岩							1		1
外	黒色安山岩	2						4		6
$L^{\gamma_1}$	小 計	4	0	0	0	0	0	11	0	15
	合 計	10	1	1	1	5	1	101	8.	128

## VI 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡における縄文時代の特徴としては、遺物包含層から出土した遺物の量から考えると遺構が予想外に少なかったことである。A区と呼んだ丘陵の斜面上からは遺物が多数出土したにもかかわらず、遺構は竪穴住居址2軒、竪穴状遺構1基、集石3基、土坑27基にとどまった。住居址、竪穴状遺構ともに前期後半諸磯a・b式の土器を伴うことから、その時期の所産と考えられる。また、土坑については遺物が検出されなかったものもいくつかあったが、所産時期はおそらく住居址等と平行するものであろう。

丘陵の斜面上に存在していた包含層からは、縄文式土器8,740点、石器6,035点という膨大な量の遺物が検出された。土器は草創期燃糸文系から後期後半加曽利B式まで断続的に検出された。そのうち主体をなすものは前期後半の竹管文系であり、遺構の所産時期と一致するものである。また、 $\mathbf{J} \mathbf{T} - \mathbf{1}$  号竪穴状遺構は調査中に住居址に名称変更したため、欠番扱いとなる。

## 1 住居址

J-1号住居址 (Fig. 14、PL.4)

位 置 X76・77、Y72・73グリッド

形 状 長軸4.06m、短軸3.89mの隅丸方形を呈する。残存壁高は29cmを測り、壁は垂直に近い角度でハードローム層に掘り込まれている。南東に重複するJO-1により約1/4が欠損する。

**面 積** 15.43m° **方 位** N-11°-W **床 面** ハードローム層中につくられる。南 に向かって下っておりレベル差は約10cm。

炉 址  $P_2$ の内側に確認できた。径 $76 \times 72$  cm、深さ17cmと円形の平面形に皿状の断面形を呈する。

柱 穴 4個検出された。P<sub>1</sub>:径21cm、深さ 40cm、P<sub>2</sub>:径24cm、深さ32cm、P<sub>3</sub>:径18cm、 深さ8.5cm、P<sub>4</sub>:径26cm、深さ34cm。

**遺 物** 復原できた土器:深鉢(6)。石器: 石鏃(1)、石匙(2・3)、削器(4)、礫器 (5)、三角錐形石器(6)、計6点出土。 J-2号住居址 (Fig. 15、PL.4・5)

**位** 置 X77~79、Y73・74グリッド

形 状 長軸4.28m、短軸3.90mの隅丸方形を呈する。残存壁高は28cmを測り、壁は垂直に近い角度でハードローム層に掘り込まれている。壁の北西端はJO-1と重複し欠損している。

炉 址 住居内の北西寄りから検出された。 径88×67cm、深さ10cmと楕円形の平面形に皿 状の断面形を呈する。

**遺 物** 復原できた土器:深鉢口縁部(13)。 石器:石鏃(7)、石匙(8)、削器(9・10)、 磨製石斧(11・12)、凹石(13・14)、敲石 (15・16)、蜂の巣石(17・18)の計12点が出土 した。

## 2 竪穴状遺構

JT-2号竪穴状遺構(Fig. 15·16、PL.5)

位 置 X87・88、Y65・66グリッド

形 状 長軸4.3m、短軸3.1m、壁高約30cm の床面が平坦な不整形遺構の中に長軸2.3 m、短軸1.6m、深さ0.25mの楕円形を呈する 落ち込みを有する。住居址と土坑の重複とも

3 土 坑

JD-1号土坑 (Fig. 17、PL.6)

位 置 X92、Y70グリッド

**形 状** 長径64cm、短径59cmの円形を呈し、 深さ22cmを測る。

**遺 物** 連続爪形文を有する浅鉢(31)が出 土した。石器:打製石斧(22)が1点出土。

JD-2号土坑(Fig. 17)

位 置 X93、Y72グリッド

形 状 長径86cm、短径76cmの楕円形を呈し、深さ47cmを測る。

JD-3号土坑 (Fig. 17)

位 置 X91・92、Y72・73グリッド

形 状 長径106cm、短径86cmの楕円形を呈し、深さ86cmを測る。平坦な底面。坑底穴はないもののいわゆる陥し穴とも考えられる。

JD-4号土坑 (Fig. 17)

位置 X93・94、Y68グリッド

**形 状** 長径76cm、短径72cmの円形を呈し、 深さ39cmを測る。

JD-5号土坑 (Fig. 17、PL.6)

位 置 X92、Y65・66グリッド

形 状 長径210cm、短径124cmの楕円形を呈し、深さ131cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。3つの坑底穴を

考えられるが、断定できなかった。

**面 積** 11.15m² **方 位** N-18°-W **遺 物** 復原できた土器:鉢(20)、深鉢(21)。 石器:打製石斧(19・20)、磨石(21)、計3点出土。

もち、いわゆる陥し穴と考えられる。

JD-6号土坑 (Fig. 17)

位 置 X84、Y68グリッド

形 状 長径122cm、短径110cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。平坦な底面。

JD-7号土坑 (Fig. 17、PL.6)

位 置 X84、Y67グリッド

形 状 長径128cm、短径112cmの円形を呈し、 深さ79cmを測る。壁はオーバーハングしている。 底面は平坦。

**遺 物** 復原できた土器:深鉢(33)。石器: 削器(23・24・25)、打製石斧(26)、多面体磨石(27)、計5点出土した。

JD-8号土坑 (Fig. 17、PL.6)

位 置 X84、Y66・67グリッド

形 状 長径109cm、短径89cmの楕円形を呈し、深さ58cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。 底面は平坦であった。

遺物 石器:削器(28)が1点出土した。

JD-9号土坑 (Fig. 17)

**位 置 X84、Y66**グリッド

**形 状** 長径85cm、短径81cm、深さ51cmの円 形を呈する。壁はオーバーハングし、底に出 張り状の横穴をもつ。

## VI 縄文時代の遺構と遺物

JD-10号土坑 (Fig. 18、PL.7)

位 置 X85、Y68グリッド

形 状 長径123cm、短径112cmの円形を呈し、 深さは83cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。

遺物 復原できた土器:深鉢口縁部(38)。

石器:打製石斧(29)、凹石(30)、敲石(31)。

JD-11号土坑 (Fig. 18)

位 置 X86、Y69グリッド

形 状 長軸189cm、短軸92cmの隅丸長方形を 呈し、深さ86cm。底面は凹凸が多い。

**遺 物** 石器:石鏃(32)、楔形石器(33)、削器(34)、打製石斧(35)、凹石(36) が出土。

JD-12号土坑 (Fig. 18)

位 置 X87、Y69グリッド

形 状 長径153cm、短径99cmの楕円形を呈し、深さ51cmを測る。壁は摺鉢状。

JD-13号土坑 (Fig. 18)

位 置 X85・86、Y66・67グリッド

**形 状** 長径171cm、短径151cmの楕円形で、 深さは58cmを測る。

JD-14号土坑 (Fig. 18)

位 置 X89、Y68グリッド

形 状 長径171cm、短径106cmの楕円形を呈 し、深さ48cm。底面は全体的に凹凸が多い。

JD-15号土坑 (Fig. 18)

位 置 X90、Y67グリッド

**形 状** 長径176cm、短径82cmの隅丸長方形を 呈し、深さ43cmを測る。

J D-16号土坑 (Fig. 18)

位 置 X88・89、Y70グリッド

形 状 長軸127cm、短軸85cmの不整形を呈 し、深さ44cmを測る。底面は凹凸が多い。

JD-17号土坑(Fig. 19)

位 置 X95、Y71グリッド

**形 状** 長径72cm、短径58cmの楕円形を呈し、 深さ74cmを測る。

JD-18号土坑(Fig. 19)

位 置 X81・82、Y70グリッド

形 状 長径149cm、短径97cmの楕円形を呈し、深さ43cmを測る。底面は平坦。

**遺 物** 石器:石鏃(37)

JD-19号土坑(Fig. 19)

位 置 X81・82、Y74グリッド

**形 状** 長径149cm、短径129cmの楕円形を呈し、深さは52cmを測る。底面は平坦。

JD-20号土坑 (Fig. 19)

位 置 X79、Y68グリッド

形 状 長径101cm、短径90cmの円形を呈し、 深さ56cmを測る。底面は平坦であり、壁は垂 直に立ち上がる。

JD-21号土坑(Fig. 19)

位 置 X89・90、Y72グリッド

**形 状** 長径192cm、短径142cmの楕円形を呈する。底面は凹凸が多い。深さは51cmを測る。

JD-22号土坑 (Fig. 19)

位 置 X84、Y70グリッド

形 状 長径91cm、短径79cm、深さ59cmの楕 円形を呈する。底面は平坦。

JD-23号土坑(Fig. 19)

位 置 X77、Y69・70グリッド

形 状 長径135cm、短径121cmの楕円形を呈し、深さ56cmを測る。底面は平坦。

JD-24号土坑 (Fig. 19、PL.7)

位 置 X76・77、Y74・75グリッド

形 状 長径136cm、短径126cmの円形を呈し、 深さ105cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。底 面は平坦。

遺物 復原できた土器:深鉢(41・42・46)、 石器:石鏃(38·39)、石錐(40)、石匙(41)、 削器(42·43·44·45)、打製石斧(46)。

JD-25号土坑 (Fig. 19)

位 置 X77、Y74・75グリッド

形 状 長径107cm、短径98cmの円形を呈す 形 状 長径57cm、短径46cmの楕円形を呈し、 る。深さは33cmを測る。

#### 石 4 集

S-1号集石(Fig. 16、PL.7)

位 置 X83、Y68グリッド

形 状 粗粒安山岩の円礫を主体に構成され る。磔の総数50個。径は $5\sim20$ cm程の大きさ で赤化しており、上下 2層に配列されている。 掘り方 長径82×短径80cmの円形の浅い土坑 がソフトローム中に認められた。礫のまとま りと一致する。

S-2号集石(Fig. 16)

位 置 X80、Y69グリッド

## 5 包含層の遺物

#### 土 器 (Fig. 53~57、PL. 13~15)

縄文時代遺物包含層の調査は、表土剝ぎの 段階から遺物が検出されていた丘陵頂上部の 巨石周辺から東・南斜面中腹にかけて実施し た。調査グリッドは本遺跡の北半分にあたる X75~X95、Y64~Y75であり、調査区のほ ぼ全域から多くの土器が検出された。時期的 にみると草創期撚糸文土器から後期の加曽利 B式土器まで断続的にみられた。そこで、時 期的に大きく I 群からVIII群までの8つに分類 した。【群土器としたものは草創期撚糸文系 土器群であるが、そのうち細かな撚糸文、粗 JD-26号土坑 (Fig. 19)

**位 置** X81、Y67グリッド

形 状 長径80cm、短径60cm、深さ42cmの楕 円形を呈する。

JD-27号土坑 (Fig. 19)

位 置 X81、Y67グリッド

深さ25cmを測る。

形 状 粗粒安山岩の円礫 5 個から構成され ている。礫の径は7cm程であった。

**掘り方** 長径90×短径81cmの楕円形の土坑が ソフトローム中に認められた。

S-3号集石 (Fig. 16)

位 置 X86、Y68グリッド

形 状 粗粒安山岩の円礫を主体に礫9個か ら構成されている。礫の径は5cm大のものと 10cm大のものが多い。

掘り方 認められなかった。

Tab. 3 包含層出土の縄文式土器一覧

	分	類	点 数	割合
I群	草創期	撚糸文系	465	5.3
II群	早期前半	無文系	32	0.4
III群	早期前半	沈線文系	24	0.3
IV群	早期後半	条痕文系	2,026	23.1
V群	前期前半	繊維縄文系	155	1.8
VI群	前期後半	竹管文系	2,763	31.6
VII群	縄文中	期土器群	52	0.6
VIII群	縄文後	期土器群	127	1.5
	不	明	3,096	35.4
	合	計	8,740	100%

#### VI 縄文時代の遺構と遺物

Tab. 4 縄文時代の石器一覧

器種区分	J - 1	J – 2	J T - 2	集石・ 土坑	包含層	合 計
石 槍	0	0	0	0	2	2
有舌尖頭器	0	0	0	0	3	3
石 鏃	1	1	0	4	109	115
石鏃未製品	0	0	0	0	7	7
石 錐	0	0	0	1	4	5
楔形石器	0	0	0	1	15	16
石 匙	2	1	0	1	15	19
削 器	1	2	0	9	179	191
打製石斧	0	0	2	5	119	126
磨製石斧	0	2	0	0	1	3
多面体磨石	0	0	0	1	8	9
磨 石	0	0	1	0	58	59
凹石	0	2	0	2	44	48
敲 石	0	2	0	1	13	16
礫 器	1	0	0	0	8	9
三角錐形石器	1	0	0	0	38	39
スタンプ形石器	0	0	0	0	13	13
蜂の巣石	0	2	0	0	12	14
石 皿	0	0	0	0	2	2
石 核	0	0	0	0	27	27
剝片 · 砕片	35	91	13	128	5,358	5,625
合 計	41	103	16	153	6,035	6,348

大な撚糸文、撚糸条痕文の3つに分類するこ とができた。II群土器としたものは早期前半 の無文系土器群である。中には結晶片岩を含 むものもみられたが、全体としては出土点数 は少ない。III群土器は早期前半の沈線文系土 器群の田戸上層式土器である。沈線文あるい は貝殻沈線文が認められたが出土点数は少な い。IV群土器は早期後半の条痕文系土器群を 扱った。条痕、縄文条痕、無文の3つに分け られ、出土点数もVI群土器に次いで多かっ た。V群土器は黒浜式土器をはじめとする前 期前半繊維縄文系土器群である。粗雑で厚い ものと、整美された薄いものの2つに大別で きる。VI群土器としたものは竹管文系土器群 である前期後半諸磯a・b、十三菩提、浮 島、興津式土器である。本遺跡の主体を占 め、その中でも諸磯a・b式の連続爪形文、

Tab. 5 縄文時代石器石材一覧

石材群	5	1 非	羊石柞	ł		角	§ 2	群	石 柞	オ			ž	<b>第</b> 3	群	石 柞	đ		第4群	第5君	拓材	その他	
	A	В	С	D	E	F	G	Н	I	J	K	L	M	N	0	P	Q	R	S	Т	U	V	合
石 材	黒	チ	珪	珪	黒	頁	点	黒	灰	変	細	閃	石	ひ	輝	ホ	変	変	黒	粗	砂	そ	1 1
\	曜	7.	質	珪質凝灰岩	色		紋	色安山岩	色安山岩	変質安山	細粒安山岩	64	石英閃緑岩	,	6=1	フル	変質玄武	玄	色	粗粒安山岩		_	
\	PE .	1	頁	灰灰	頁		頁	山山	山山	女儿	山山	緑	[X]   縁	ん	緑	エンル	一式	武	片	女山		の	
種類	石	١	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	岩	ス	岩	岩	岩	岩	岩	他	計
石 槍								1											1				2
有舌尖頭器		1	2																				3
石 鏃	8	53	3	1	7		43																115
石鏃未製品		3	1			1		2															7
石 錐		2			2						1												5
楔形石器		7	1		2			6															16
石 匙	1	5	1		4			8															19
削器	2	17	3		134	11		16			1				1	2				1	3		191
打製石斧			2		99	3	2	4	3		4					3	2			2	2		126
磨製石斧					1													2					3
多面体磨石										1		1	2	1						3	1		9
磨石							1			1			10	3			2			42			59
凹石												1								47			48
敲 石					1	1							2	1	1		1			8		(1)1	16
礫 器			1		8																		9
三角錐形石器					38																1		39
スタンプ形石器					3					2				1						5		(2)2	13
蜂 の 巣 石																				14			14
石 皿													1								1		2
石 核					15			9													2	(3)1	27
剝片・砕片	8	527	15		4,138	73	1	764	2		17				2	34	10	1		14	15	(4)4	5,625
合 計	19	615	29	1	4,452	89	4	853	5	4	23	2	15	6	4	39	15	3	1	136	25		6,348

<sup>\*\*</sup>その他については、(1)細粒凝灰岩、(2)石英斑岩 1点・溶結凝灰岩 1点、(3)文象斑岩、(4)変珪岩 1点・赤色珪質岩 1点・雲母石英片岩 1点・凝灰岩質砂岩 1点。

平行沈線文、浮線文、縄文が極めて多かった。縄文時代のうちで当地が一番繁栄した時期といえ よう。続くVII群土器は五領ケ台、加曽利E2・3式といった縄文中期土器群である。最後にVIII群 は後期の堀之内、加曽利B式土器からなる縄文後期土器群である。

土器の分布をみるとI群は丘陵の頂上部からやや下がった比較的緩やかな斜面上に集中をみせ る。II・III群と点数は少なく斜面上に散在するのみであるが、IV群になると爆発的な増加をみる。 I 群と同様な分布をみせるが、その数は膨大になり、範囲も遺跡地の北半分を占める。 V 群では 数は少なくなるものの、遺跡地の西側に移行している様子が推察できる。そして、再びVI群で一 気に増加する。遺跡地のほぼ全域から土器が出土しているが、やはり北半分に集中をみせる。VII・ Ⅷ群は遺跡地の東側へ移行し、特にⅧ群では南東部にあたる斜面のふもとでの集中がみられる。 なお、不明としたものは小片あるいは時期判別不可能な無文のものであり、今後の課題となった。 石 器 (Fig. 61~70、P L. 17~19)

縄文時代の石器は合計6,348点検出された。器種別でみると石鏃、削器、打製石斧が目立つ。石 鏃はほとんどが無茎式のものであるが、数点検出された後期のものとされる有茎式のものは遺跡 地の南側で出土しており、縄文後期土器群と同様の分布をみせる点に注目できる。また、打製石 斧は短冊形から分銅形まで幅広く検出されている。さらに、石槍、有舌尖頭器といった草創期の

ものとされる石器も数点ではあるが検出されている。なかでも石槍の1点は関東山地北部産出の ものと思われる黒色片岩製であり、当時、交易があったことを裏付ける事例であろう。

次に、使用石材であるが、産地との距離、大きさ、硬さや緻密さ、粘り等から便宜的に第1群 から第5群石材に分類した。第1群石材としたものは黒曜石、チャート等の緻密な加工に適する 石材である。それらの産地は限定され、当然遠隔地から搬入されたものである。貴重な石材であ り、小形の石器に利用されている。本遺跡ではチャートに比べると黒曜石、珪質頁岩の数が少な いという特徴を示している。第2群石材は黒色頁岩、黒色安山岩を代表とする県内産の一般的石 材である。産地が近く、比較的容易に手に入れることができることから、削器、打製石斧、三角 錐形石器といった中形の石器に多く利用されている。石鏃にも利用されているが、それらは第1 群のものよりはるかに粗末で、軟弱なものである。また、検出された石核の大部分がこの石材で あることは、原石のまま搬入し、当地で石器を加工、調整したという証拠となろう。産地が近く なくてはならない事例のひとつである。第3群石材としたものは、石英閃緑岩やひん岩等の石材 である。再加工には不向きで円礫のまま利用されるものであるため、目的に合った素材を河床か ら採取し使用したと考えられる。第4群としたものは黒色片岩である。製品としては1点のみで あったが、加工されていない状態のものが緑色片岩を含め数10点出土している。産地が限定され るため、物流研究に有利な資料である。第5群は赤城山麓では至るところにみられる粗粒安山岩、 砂岩である。巨大な原材料が簡単に入手できるため蜂の巣石や磨石、凹石等に利用されている。

それぞれの石器の遺物分布には偏在性があまりみられなかったが、どれも丘陵の頂上部からや や下がった比較的緩やかな斜面に集中をみせている。

## VII 古墳~平安時代の遺構と遺物

本遺跡は古墳時代終末期の群集墳の存在が以前から認められており、今回の調査では9基の古墳が確認された。古墳は丘陵の南側の斜面にどれも主体部をほぼ南に開けて構築されていた。ただ、昭和23年に行われた開墾のためか、9基の古墳はいずれも盛土を削平されており、主体部についても破壊されていたものが多かった。どの主体部も、安山岩の河原石あるいは山石を自然石の状態で使用し構築されており、その使用石材及び古墳の様相からみると、所産時期は7世紀後半代のものと考えられる。

B区から検出されたH-1号住居址は、D-1号土坑によって竃を含む大部分が破壊されていたが、その出土遺物から平安時代の住居址と推定される。また、2基検出された炭窯址は半地下式のもので覆土の中にAs-Bの純層が認められた。このことから所産時期は、赤城山南麓の近隣他町村で検出されているものと同様に、9世紀後半から10世紀初めまでに築かれたものであろう。

## 1 古 墳

M-1号墳「綜覧荒砥村第97号墳:西大室町熊の穴27番地](Fig. 20・26・27、PL.8)

位 置 X87~91、Y73~77グリッド 標 高 158.6m

**墳 丘** 高さ0.92m。墳丘長東西12.18m、南北(11.8m)。総長東西14.81m、南北(13.66m)。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.64mを、深さは0.50mを測る。

主体部 形態は掘り方を有する両袖型横穴式石室で、安山岩の自然石による乱石積。主軸方位は S-34°-E。主軸長は3.28m。玄室は長さ1.68m、幅1.16m、羨道長1.60m、羨道幅0.84m。

遺物 墳丘から須恵器長頚壺(1)1点、前庭部から土師器杯(2)1点が検出された。

M-2号墳 [綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地] (Fig. 21・30・31、PL.8)

位 置 X81~85、Y75~78グリッド 標 高 159.6m

**墳 丘** 高さ1.04m。墳丘長東西11.14m、南北(10.20m)。総長東西14.40m、南北(14.44m)。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.68mを、深さは0.50mを測る。

主体部 主軸方位はS-5°-W。主軸長2.92m、玄室長1.56m、玄室幅0.96m、羨道長1.36m、羨道幅0.60mで、形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

**遺物** 周堀から土師器杯(3・4)2点が検出された。

M-3号墳 [綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地] (Fig. 28)

位 置 X78・79、Y75・76グリッド 標 高 160.3m

**墳 丘** 墳丘および周堀は認められなかった。

前 **庭** 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に1.88mを、深さは0.30mを測る。

**主体部** 主軸方位は $S-4^\circ-W$ 。カクランのため大部分が欠損している。

形態 横穴式(両袖型)割石乱石積。

M-4号墳 [綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地] (Fig. 22・32・33、PL.8)

位 置 X75~78、Y78~81グリッド 標 高 158.1m

**墳 丘** 高さ0.85m。墳丘長東西10.60m、南北(11.52m)。総長東西13.64m、南北(15.28m)。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に2.92mを、深さは1.35mを測る。

主体部 主軸方位はS-7°-E。主軸長3.36m、玄室長1.94m、玄室幅1.04m、羨道長1.42m、羨道幅0.64mを測る。形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

M-5号墳 [綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地] (Fig. 23)

位 置 X79~80、Y78~79グリッド 標 高 159.2m

大部分が破壊されており、周堀の一部と主体部にわずかに石を残すのみである。

M-6号墳 [綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地] (Fig. 23・34・35、PL.9)

位 置 X87~89、Y78~80グリッド 標 高 158.1m

墳 丘 高さ0.80m。墳丘長東西(6.80m)、南北(8.56m)。総長東西(7.67m)、南北(9.61m)。

前 **庭** 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.40mを、深さは0.60mを測る。

**主体部** 主軸方位はS-1°-E。主軸長2.80m、玄室長1.48m、玄室幅0.80m、羨道長1.32m、 羨道幅0.52m。形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

M-7号墳「綜覧荒砥村99号墳:西大室町熊の穴16番地」(Fig. 24・36・37、PL.9)

位 置 X82~87、Y78~83グリッド 標 高 158.0m

**墳 丘** 高さ1.45m。墳丘長東西14.40m、南北(14.48m)。総長東西18.43m、南北(19.92m)。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に5.52mを、深さは1.22mを測る。

**主体部** 主軸方位はS-3°-E。主軸長3.96m、玄室長2.20m、玄室幅0.8m、羨道長1.76m、羨 道幅0.48mを測る。形態は横穴式両袖型割石乱石積。

遺物 周堀中のカクラン内から須恵器甕(5)が1点出土した。

M-8号墳「綜覧記載漏れ:西大室町熊の穴16番地](Fig. 23・29、PL.9)

位 置 X81・82、Y82~84グリッド 標 高 157.2m

**墳 丘** 墳丘は削平され認められず、周堀は北側のみわずかに残る。

前 **庭** 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に1.60mを、深さは0.30mを測る。

**主体部** 羨道部分の石は羨門と思われる 1 石のほかは検出されなかった。主軸方位は $S-10^{\circ}-E$ 。主軸長 (1.72m)、玄室長(0.88m)、玄室幅0.72m、羨道長(0.84m)、羨道幅(0.32m) を測る。形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

遺物 石室内から鉄刀(6)が1点出土した。本遺跡出土の唯一の副葬品である。

M-9 号墳 現況では地形の高まり及び石の存在が認められたが、調査の結果古墳ではないことが判明した。そのため本遺跡ではM-9 号墳は欠番扱いとなる。

M-10号墳 [綜覧荒砥村98号墳:西大室町熊の穴17番地] (Fig. 25・38・39、PL.9)

位 置 X88~92、Y81~85グリッド 標 高 155.5m

#### VII 古墳~平安時代の遺構と遺物

墳 丘 高さ1.43m。墳丘長東西10.86m、南北(11.28m)、総長東西15.21m、南北16.48m。

前 庭 規模は羨門部から主体部主軸方向南側に4.68mを、深さは1.72mを測る。

主体部 主軸方位は $S-16^{\circ}-E$ 。主軸長3.92m、玄室長2.08m、玄室幅1.04m、羨道長1.84m、羨道幅0.68mを測る。形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

遺物 前庭部及び周堀から土師器杯(7・8・9)3点が出土した。

## 2 住 居 址

H-1号住居址 (Fig. 41、PL. 10)

**位 置 X98・99、Y73**グリッド。

**重 複** D-1号土坑と重複関係をもち、本 遺構が古い。

形 状 長軸3.30m、短軸2.69mの隅丸長方形。壁高は57cmを測る。

面 積 12.28m² 方 位 N-3°-E

## 3 土 坑

D-1号土坑 (Fig. 41、PL. 10)

**位 置** X98・99、Y73グリッド。H-1号 住居址を破壊する形で重複する。

形 状 長径5.24m、短径2.63mの楕円形を 呈する。壁高は56cmを測る。

D-2号土坑 (Fig. 41)

位置 X93・94、Y75グリッド。

### 4 炭窯址

K-1号炭窯(Fig.42、PL. 10)

位 置 X85・86、Y69~71グリッド。

形 状 平面形は入口部から奥にむかって緩やかに膨らみ、最奥部が太くなる棍棒状を呈す。焼成部の北壁には径40cmの煙道を備えている。全長は7.56mで底面最大幅2.12mを焼成部最奥部で、最小幅0.65mをほぼ中央の焚き口部で測る。主軸方位はN-62°-Wを示す。遺物 炭化物が焼成部の底面から大量出土。

床 面 ソフトローム層まで掘り込んで作られた平坦な床。

電 住居址の東側で焼土が検出されたが、D-1号土坑により破壊されていた。

**遺 物** 土師器杯(11・12) 2、須恵器高台付 杯(13)の体部下半1、須恵器杯(14)の底部1。

形 状 長径90cm、短径88cmの円形。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高35cm。底面は平坦。

D-3号土坑 (Fig. 41)

位置 X86、Y73・74グリッド。

形 状 長径53cm、短径47cmの円形を呈する。 壁の断面は摺鉢状で、平坦な底面をもつ。壁 高は19cmを測る。

K-2号炭窯 (Fig. 43、PL. 10)

位 置 X83・84、Y71~73グリッド。K-1号窯の南西約6m先に位置している。

形 状 形態はK-1号窯と類似するが煙道は検出されなかった。遺構の全長は6.40m、底面最大幅2.08mを焼成部最奥部で、最小幅0.61mを遺構ほぼ中央部の焚き口部で測る。主軸方位はN-42°-Wを示す。

遺物 炭化物が底部から大量に出土した。

# WII 成果と問題点

熊の穴II遺跡は丘陵の東〜南斜面に立地しており、古代における遺構・遺物の存在が当初から 予想されていた。調査の結果をみると、調査区のほぼ北半分にあたる地点からは縄文時代の遺 構・遺物が集中しており、南半分では古墳群が存在しているという点に注目できる。今回の調査 では丘陵頂上部付近から出土した旧石器時代の遺物128点をはじめ、縄文時代では住居址2軒、 竪穴状遺構1基、集石3基、土坑27基のほか、草創期から後期に至る遺物包含層が検出された。 さらに古墳〜平安時代では古墳9基、住居址1軒、土坑3基、炭窯址2基が検出されている。以 下、時代を追って調査の成果をまとめてみたい。

### 旧石器時代

今回の旧石器の出土範囲は「流れ山」と呼ばれる丘陵状の地形の頂上付近である。そのため、ローム層の堆積状況は薄く、風水による侵食も受けやすい地点でもある。そのため、鍵となるATの残存状態は悪く、斜面という問題からも遺物の出土層位を正確に把握することは困難であった。また、調査範囲には「流れ山」を構成している安山岩の巨石が露出していた。石器はその周りを取り巻くように出土しており、当時の人々の生活に何らかの影響を及ぼしていたと思われる。

今回の調査では合計128点の石器が出土した。石器組成をみると剝片と砕片の2種類だけで全体の86%を占める。主要石器の割合は残り14%に過ぎないが、ナイフ形石器は10点と、石器総点数の8%に当たる。これは、県内の他遺跡と比較してもかなり高い割合である。ただ、この事だけから遺跡の機能を想定するのはやや早急であり、接合関係等の分析を通じて理解して行かなければならないだろう。石材では主体となるものはチャートである。産出地が遺跡から遠く離れていることから、当時の人々の遠距離、あるいは広範囲の移動やものの交流などを想定することができる。今回の石器はほぼ同年代のものとして考えた。特にナイフ形石器についてはAT層直下という年代を求めたが、出土層位のほかに、形態の点からも今後比較・検討を行う必要がある。

他遺跡の例をみても、今回の出土地点のような丘陵の頂上から斜面にかかる途中の比較的狭い 範囲からの出土例は少なく、旧石器の研究に新たな事例を加えることができた。ただ、調査区に おける地形的な問題等から正確な出土層位が確認できなかったことは、今後の問題として検討し て行かなければならないだろう。

#### 縄文時代

縄文時代における本遺跡の特徴としては、住居址等の遺構が少ないにもかかわらず、土器・石器等の遺物が大量に出土したということである。土器は草創期撚糸文系土器から後期加曽利B式土器まで断続的に検出された。このうち遺跡の主体となる土器形式は、竹管文系土器群とした前期後半諸磯 a・b 式土器である。住居址、竪穴状遺構等の遺構からもこの時期の土器が出土しており、それらの所産時期に当てることができよう。昨年度調査が行われた熊の穴遺跡からも同時期の住居址4軒が確認されており、当時におけるこの地の繁栄を想像することができる。また、

### VⅢ 成果と問題点

確認することはできなかったが、遺物集中区においては平地式住居の存在も十分予想できるであろう。さらに、赤城山南麓の近隣地区における縄文前期の資料をみると、いずれも前期の遺跡は 丘陵状の地形に立地している。本遺跡についても符号する事例となった。

検出された土器を時代ごとに分類すると2回のピークが認められた。1回目は早期後半条痕文系土器群、2回目は本遺跡の主体となる前期後半竹管文系土器群である。いずれも頂上部からやや下がった地点を中心として分布しており、少量ではあるが検出された中後期の土器群が丘陵の縁辺部に下がって集中をみせるのとは対照的である。

石器石材をみると黒色頁岩と黒色安山岩で全体の84%を占める。礫面を残した同製の石核もみられることから、比較的容易に入手でき、その産地も遺跡から近距離にあるであろう。また、黒曜石に比べチャートの量がはるかに多い。このことは、当時の交易のルートを解明するうえでの一つの事例といえるだろう。次に、器種をみると石鏃が多く検出された。石鏃はほとんどが無茎式のものであったが、数点出土した有茎式のものはVII・VIII群土器との共伴関係が認められた。

遺物包含層は本遺跡の北半分において検出されたことから、包含層はさらに北側にも延びるものと考えられる。今後の資料の追加を待って、縄文時代における熊の穴の全貌を究明していかなければならない。

# 古墳~平安時代

9基確認された古墳は6基までが上毛古墳総覧に記載漏れのものであった。本遺跡群内の上横 俵遺跡からも古墳群が確認されているが、それらより新しいものである。規模・形状等をみると 粕川村月田古墳群に類似し、所産時期も埴輪消滅後の7世紀後半代の古墳が主体となるであろう。

住居址はH-1号住居址のみ検出されたが、熊の穴遺跡からも同時期の住居址が存在することから、さらに南側にあたる台地の縁辺部に集落が延びている可能性がある。

炭窯址は覆土の最上部から1108年(天仁元年)に降下したAs-B(浅間山起源)の純層が認められた。ゆえに平安時代の所産と思われ、赤城山南麓の近隣町村で豊富に検出されている。木炭の用途は鉄を溶かし、引き延ばす際の火力として用いられていたものであろう。熊の穴付近でも活発な鉄生産が行われた事実の裏付けと考えられる。

昭和63年度から実施されている本遺跡群の調査も残すところわずかになった。今までの調査結果もあわせ、古代におけるこの横俵の地の全貌が解明される日もそう遠いものではないだろう。

#### 参考文献

群馬県 1988 『群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』 群馬県史編さん室

群馬県教育委員会・財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 『後田遺跡(旧石器編)』

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 『下触牛伏遺跡』

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『荒砥二之堰遺跡』

東京都建設局・小金井市遺跡調査会 1989 『野川中洲北遺跡』

粕川村教育委員会 1982 『月田古墳群』 昭和55年・56年度発掘調査の概要』

粕川村教育委員会 1985 『西原古墳群<sub>K5</sub>』

大胡町教育委員会 1986 『上大屋・樋越地区遺跡群』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群V』

# 付編 横俵遺跡群テフラ組成分析

古環境研究所

## I. はじめに

赤城火山南麓には、いわゆるローム層と呼ばれる火山灰土が厚く堆積している。この火山灰土には、多くの降下テフラ層が挟まれている。これらの大部分については、すでに噴出年代が明らかにされており、年代の指標として利用できるものも多い。横俵遺跡群熊の穴II遺跡の発掘調査では、ローム層中より2層準にわたって石器が検出された。そこで、ローム層について調査を行うことにより、示準テフラとの層位関係から遺物包含層の堆積年代を求めることにした。

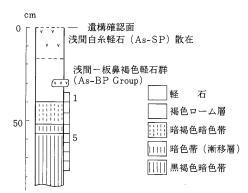
### II. テフラ層序

熊の穴II遺跡周辺は、丘陵状の地形が広がっている。この丘陵状の地形は、中期更新世に発生した赤城火山の山体崩壊に由来する梨木岩屑なだれ堆積物(守屋、1968、早田、1990)から構成されている。遺跡はこの地域のうち、小丘状の高まりの頂部に位置している。熊の穴II遺跡でも、火山灰土の基底に岩屑なだれ堆積物を構成する岩塊が認められる。遺跡の位置する高まり

は、流れ山と呼ばれる地形に相当する。流れ山とは、岩屑なだれの堆積地形として特徴的なものである。岩屑なだれでは、火山体を構成していた地層が滑りながら移動する。このため地層は崩壊時に破砕された形態を保ったまま移動し、十分にこなされない。そして、地層ブロックは破砕された砕屑物からなる平坦面上に突出することになる。こうして形成された突出部が、流れ山と呼ばれているのである。

火山灰土は大きく、下部の暗色帯と上部の黄褐色のローム層に区分される。ローム層には、肉眼の観察により3層準にテフラが認められた(図1、2)。最下位のテフラは、厚さ4cmの橙色降下軽石層である。軽石の最大径は、4mmである。軽石のほかに黒色の粗粒火山灰が含まれている。このテがフラは、層相から浅間ー板鼻褐色軽石群(As-BPGroup、新井、1962、町田ほか、1984)のうちの一つに対比される。このAs-BPGroupは、約2.1万年前から約1.6万年前の間に浅間火山より噴出し100

たテフラ群である。



熊の穴Ⅱ遺跡 X82、Y68グリッドのテフラ層序 数字は、試料番号を示す。

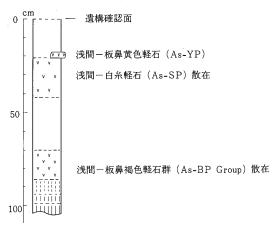


図 2 熊の穴 II 遺跡 X 79、 Y 73 グリッドのテフラ層序

中位のテフラは、ローム層中に散在する白色の軽石粒である。軽石の最大径は、 $2 \, \mathrm{mm}$ 程度である。岩相および層位から、この軽石は約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間-白糸軽石(As-SP、町田ほか、1984)に由来するものと考えられる。上位のテフラはローム層最上部に層位のある黄色の降下軽石層である。層厚は $3 \, \mathrm{cm}$ で、含まれる軽石の最大径は $6 \, \mathrm{mm}$ である。本テフラは、層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間-板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田ほか、1984)に対比される。

## III. テフラ組成分析による示標テフラ層の検出

群馬県域では、As-BP Groupの下位の暗色帯の上部には、約2.1-2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976)の降灰層準のあることが知られている(たとえば、早田、1990)。また上記のテフラ以外にも、多くの示標テフラの存在も知られている。そこで熊の穴II 遺跡の火山灰土のうち、とくに暗色帯を対象としてテフラ組成分析を行い、示標テフラを検出することにした。分析には、X82、Y68グリッド北壁から採取した試料を用いた。分析の手順は、次の通りである。

# 1) 試料30gを秤量。

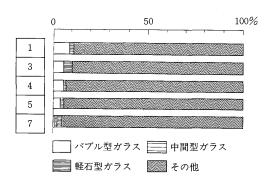


図3 熊の穴Ⅱ遺跡の火山ガラス形態組成

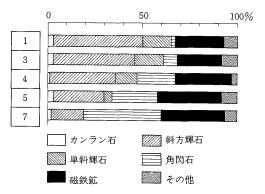


図4 熊の穴Ⅱ遺跡の重鉱物組成

- 2) 超音波洗浄により、泥分を除去。
- 3)約80°Cで乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下により、火山ガラス比および重鉱物組成を求める。

表 1 熊の穴Ⅱ遺跡の火山ガラス形態組成

試料	 バブル型	中間型	軽石型	その他	合計
1	22		4	224	250
3	14		11	225	250
4	14	2		234	250
5	10		4	236	250
7	3	3	6	238	250

表 2 熊の穴II遺跡の火山ガラス形態組成

数字は、試料番号を社す。

1							
	7	119	37	5	65	17	250
3	8	106	28	17	62	19	250
4	2	87	28	50	75	8	250
5	7	68	10	60	84	21	250
7	6	35	7	101	83	18	250

数字は、試料番号を示す。 ol:カンラン石、 opx:斜方輝石、 cpx:単価輝石、 ho:角閃石、 mt:磁鉄鉱。 実際の検鏡は、最初に火山ガラス比について全粒子を対象に250粒を対象とした。そして重鉱物が250粒になるまで同定を続けた。

火山ガラス比をダイヤグラムにして図3に、その内訳を表1に示す。いずれの試料においても、 火山ガラスの割合は小さい。また、火山ガラスの占める割合は上方ほど大きい。色調は、いずれ も透明である。火山ガラスの形態をみると、平板状のいわゆるバブル型ガラスに富む。透明でバ ブル型の火山ガラスが多いことから、火山ガラスは、ATに由来するものと思われる。しかしい ずれの試料でも、火山ガラスの占める割合は小さく、ATの降灰層準を決定するまでには至らな かった。おそらく、AT降灰後に何らかの浸食作用を受けたことにより、降灰層準が不明瞭になっ たものと考えられる。

重鉱物組成をダイヤグラムにして図4に、その内訳を表2に示す。分析を行った試料では、上位の試料で斜方輝石および単斜輝石、下方の試料で角閃石が多く含まれている。間の変化は急激でなく、漸移的である。以上このことから、重鉱物組成に特徴のある示標テフラの降灰層準は認められなかった。

# IV. 考察-石器の出土層位について

石器は上位と下位の 2 層準から出土している。上述の示標テフラ層との層位関係から、これら包含層のうち下位の包含層はAs-BP・(約1.6-2.1万年前) より下位にあるものと考えられる。 A Tとの層位関係については不明である。また上位の包含層は、As-BP Group付近からAs-YP(約1.3-1.4万年前)の下位の層準に相当すると考えられる。

## V. まとめ

熊の穴II遺跡地質断面を観察し、また分析を行った結果、AT、As-BP Groupの一つ、As-SP、As-YPの4層のテフラの降灰層準を確認した。2層準の石器の包含層のうち、下位の包含層はAs-BP Groupより下位に、また、上位の包含層はAs-GP Group付近からAs-YPの下位の層準に相当すると考えられる。

### 文 献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10、P. 1-79. 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義-。科学、46、P. 339-347. 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログー。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、P. 865-928. 守屋以智雄 (1968) 赤城火山の地形と地質。前橋営林局、45 P.

早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土。群馬県史通史編1、P. 35-129.

Tab. 6 旧石器観察表

番号	器 種	ブロック名	長	幅	厚	重き	石 材	備考
27	ナイフ形石器	2	(1.7)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	チャート	基部と右側縁一部のみの欠損品。右側縁に調整。縦長剝片。
61	ナイフ形石器	1	5.6	1.2	1.1	7.1	チャート	基部左側縁、先端部の一部に調整。それ以外は素材剝片 のまま。縦長剝片。
64	ナイフ形石器	1	3.1	1.7	0.8	3.5	チャート	両側縁の基部を中心に著しい剝離。
75	ナイフ形石器	1	5.3	1.7	0.7	6.6	黒色頁岩	ほぼ両側縁に調整。石器素材の打面部と石器基部は一致 する。縦長剝片。
76	ナイフ形石器	1	5.3	1.7	0.7	5.7	黒色頁岩	左側縁先端部、右側基部に調整加工。縦長剝片。
82	ナイフ形石器	1	4.4	1.5	0.7	3.9	黒色安山岩	両側縁に加工調整。石器素材と打面部と石器基部は一致 する。縦長剝片。
122	ナイフ形石器	外	3.0	1.3	0.7	1.6	チャート	ほぼ両側縁、特に右側縁に著しい調整。左側器部内湾。 縦長剝片。
123	ナイフ形石器	外	4.5	1.7	0.9	4.4	珪質頁岩	両側縁を両側から調整、特に右側縁に非常に細かい剝離 を確認。縦長剝片。
124	ナイフ形石器	外	3.8	1.9	0.7	4.6	黑色安山岩	小ぶりの縦長剝片を素材、両側縁全体に調整加工。左側 の基部内湾。
125	ナイフ形石器	外	(5.9)	2.1	0.9	(9.1)	黒色安山岩	刃部欠損品。器体の大まかな <u>整</u> 形のため部分的に細かい 調整が施されている。
20	石 錐	2	2.1	2.6	0.8	3.0	チャート	細かい剝離によって機能部を作り出している。基部側に 微細な調整が入る。
47	楔 形 石 器	2	3.8	1.7	1.2	7.1	チャート	調整加工は主として礫面側を中心に両側縁、両端から調 整加工。
73	削 器	3	4.6	4.3	1.7	41.5	黑色頁岩	両側縁に調整加工。成形が粗いためスクレーパーエッジ は鋸歯状を呈する。
36	石 核	2	4.3	4.3	5.1	67.2	チャート	石器正面では縦長剝片を、石器側面では横長剝片を目的 としている。
42	石 核	2	5.0	5.4	3.5	52.3	チャート	縦長で寸づまりの剝片。打面は上下両端に設定。+43剝 片+51剝片+53剝片。
50	石 核	2	2.5	2.7	3.6	30.0	チャート	自然面と礫面を残す。打面調整、打面転位を頻繁に行っ ている。
79	石 核	1	3.4	2.8	2.9	27.8	チャート	小形の縦長剝片を目的とするもの。円錐形を呈する。打 面調整がみられる。
92	石 核	1	4.3	2.8	1.5	38.9	チャート	横長、幅広の剝片を目的としている。上端部に調整。
77	使用痕のある剝片	1	4.1	0.9	2.2	6.7	チャート	右側縁、上端部に調整。縦長剝片。
2	剝 片	2	3.3	4.9	1.7	24.5	チャート	寸づまりの縦長剝片。+6剝片。
5	剝 片	2	3.0	4.1	3.2	17.0	チャート	寸づまりの縦長剝片。+44剝片。
22	剝片	2	4.5	2.8	3.6	23.6	チャート	縦長剝片。上部に打面調整。+54剝片+58剝片。
60	剝 片	1	1.9	2.2	1.0	3.2	黒 曜 石	縦長剝片の上下切断のため欠損。
66	剝 片	3	3.3	4.2	0.6	8.9	黒色頁岩	形態としては削器であるが、エッジ部分の調整はほとん どみられない。
85	剣 片	1	5.9	1.5	0.8	11.6	黒色頁岩	下端部に節理面もしくは礫面をもつ縦長剝片。
88	剝片	1	2.7	2.5	0.8	3.2	珪質頁岩	寸づまり縦長剝片。+95砕片。
94	剝 片	1	2.4	1.9	0.7	2.6	珪質頁岩	寸づまりの縦長剝片。打面調整されていない。
97	剝片	1	5.1	1.9	1.0	6.0	チャート	縦長剝片。右側縁が内湾。+99剝片。
106	剝 片	外	4.4	7.3	1.1	30.7	黒色頁岩	幅広、寸づまりの縦長剝片。
108	剝 片	3	5.6	7.9	2.0	76.7	黒色安山岩	礫面を残す。寸づまりの縦長剝片。+109剝片+110剝片。
112	剣 片	3	12.8	3.6	1.7	81.8	黒色頁岩	ナイフ形石器ともとれるが基部調整の粗さから「調整痕 のある剝片」とした。
126	剝片	外	5.1	1.8	0.6	7.0	黒色頁岩	縦長剝片。

註)表の記載で、大きさについての単位はcm、gであり、現存値は ( ) で示した。

Tab. 7 縄文式土器観察表

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
1	J - 1	①中粒②良好③明赤褐④胴部	浮線文•縄文LR。	諸磯b
2	J - 1	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④胴部	縄文RL•平行沈線。	諸磯b
3	J - 1	①繊維②不良③明赤褐④胴部	   内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
4	J - 1	①粗粒(白色鉱物)②良好③明黄褐④胴部	縄文L。	諸磯
5	J - 1	①繊維②良好③橙④胴部	   内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
6	J - 1	①中粒(黒雲母)②良好③橙④4/5	   半載竹管による平行沈線・半載竹管による押引気味の刺突。口径22.4cm。	浮島
7	J – 1	①繊維②良好③橙④□縁部	   内外面とも貝殻条痕・口唇部刻み・隆帯と刺突。	条痕文系
8	J – 1	①粗粒(結晶片岩)②良好③明赤褐④胴部	縄文RL。	前期
9	J - 1	①繊維②良好③橙④胴部	   内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
10	J - 2	①中粒(白色鉱物・黒雲母)②良好③橙④胴部		諸磯
11	J - 2	①粗粒(白色鉱物)②良好③にぶい黄橙④胴部	   半載竹管による幅狭平行沈線・地文に縄文L。	諸磯b
12	J-2	<ul><li>①中粒②良好③褐④口縁部</li></ul>	   半截竹管による平行沈線。	諸磯b
13	J - 2	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部のみ	浮線文。縄文RL。推定径25.2cm。	諸磯b
14	J - 2	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部	無文部。	条痕文系
15	J - 2	<ul><li>①中粒②極良③明赤褐④口縁部</li></ul>	   半截竹管による平行沈線。	諸磯b
16	J - 2	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④胴部	  縄文RL•浮線。	諸磯b
17	J - 2	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	半載竹管による平行沈線。	諸磯b
18	J - 2	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	縄文上。	前期
19	J - 2	①繊維②良好③明赤褐④胴部	一	条痕文系
20	J T – 2	①中粒(石英)②良好③にぶい赤褐④1/5	浮線文。縄文RL。復原高15.6cm。	諸磯b
21	J T - 2	①中粒②良好③赤④1/4	浮線文。縄文RL。復原高23.6cm。	諸磯b
22	J T - 2	①細粒②良好③橙④胴部	縄文RL。	諸磯
23	J T - 2	①中粒②極良③にぶい赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。縄文RL・□唇刻み。	諸磯a
24	J T - 2	①中粒(石英)②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線。縄文RL。	諸磯a
25	J T - 2	①細粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④胴部	縄文LR。	諸磯
26	J T - 2	①粗粒(白色鉱物)②不良③にぶい黄褐④胴部	幅広な連続爪形文。	諸磯b
27	J T - 2	①粗粒(白色鉱物)②良好③極暗赤褐④胴部	   浮線文。縄文RL。	諸磯b
28	J D-7	①粗粒②良好③赤褐④胴部	 	撚糸文系
29	J D - 7	□細粒②良好③橙④胴部	浮線文。	諸磯 b
30	J D-23	   ①中粒②良好③橙④胴部	縄文RL。	諸磯
31	J D-1	   ①細粒(白色鉱物)②極良③にぶい赤褐④2/3	   半載竹管による連続爪形文で幾何学文を構成する。口径33.2cm、復原高14.0cm。	諸磯a
32	J D – 5	   ①中粒②良好③にぶい褐④口縁	   半載竹管による平行沈線。	諸磯b
33	J D - 7	①中粒(白色鉱物)②良好③浅黄橙④2/3	   浮線文。縄文RL。浮線間に円形連続刺突。現存高19.2cm。	諸磯b
34	J D – 8	①細粒②良好③橙④胴部	縄文RL。	諸磯
35	J D-24	①細粒②良好③明黄褐④胴部	   半截竹管による平行沈線・変形爪形文・貝殻腹縁による鋸歯文。	浮島
36	J D-8	①繊維②極良③橙④口縁部	  連続爪形文・円形文。円形刺突。0段多条縄文LR。	黒浜
37	J D – 8	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部	0 段多条縄文LR。	黒浜
38	J D-10	①細粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	浮線文。縄文RL。	諸磯b
39	J D-22	①繊維②良好③明赤褐④胴部	連続爪形文・縄文LR。	黒浜
40	J D-23	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線。	諸磯b
41	J D-24	①中粒(石英)②良好③にぶい黄橙④口縁部	   浮線文。縄文RL。	諸磯 b
42	J D-24	①中粒②良好③にぶい黄褐④1/6	   半載竹管による平行沈線。円形刺突。縄文LR。現存高22.0cm。	諸磯
43	J D-24	①細粒②良好③橙④□縁	半載竹管による平行沈線。縄文し。	諸磯 b
44	J D-24	①中粒(白色鉱物)②良好③明褐④胴部	   半截竹管による平行沈線・円管文。縄文L。	諸磯a
45	J D-24	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	浮線文·縄文RL。	諸磯b
46	J D-24	①中粒(石英•長石)②良好③明黄褐④1/4	変形爪形文。半截竹管による平行沈線。貝殼腹縁による鋸歯文構成。	浮島
47	J D-26	①中粒(石英・黒雲母)②良好③にぶい黄橙④口縁部	無文。指による斜めの押圧。	無文系
48	S - 2	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	浮線文。	諸磯 b
49	S - 2	①中粒(石英)②良好③にぶい黄橙④口縁部	縄文RL。	諸磯
- 1	S - 2	①細粒(黒雲母)②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線・縄文RL。	諸磯b

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
51	X84Y65	①細粒(黒雲母)②不良③明黄褐④口縁部	燃糸文L。	撚糸文系
52	X85Y65	①中粒②良好③にぶい赤褐④口縁部	撚糸文R。	撚糸文系
53	X85Y64	①細粒②良好③浅黄④口縁部	撚糸文L。	撚糸文系
54	X85Y66	①粗粒(黒雲母)②良好③橙④胴部	撚糸条痕文。	撚糸文系
55	X85Y65	①粗粒(黒雲母)②良好③橙④胴部	撚糸文L。	撚糸文系
56	X83Y64他	①細粒②良好③橙④胴部	撚糸文L。	撚糸文系
57	X89Y66	①中粒(石英•黒雲母)②良好③橙④胴部	撚糸文L。	撚糸文系
58	X84Y67	①中粒(黒雲母)②良好③橙④底部	燃糸文L。	燃糸文系
59	X84Y68	①中粒(石英)②極良③にぶい黄褐④底部	撚糸文L。	燃糸文系
60	X76Y71	①粗粒(石英・長石)②良好③にぶい黄褐④胴部	口縁部に無文帯。粗大な撚糸文R。	撚糸文系
61	X79Y73	①粗粒(石英)②良好③明褐④胴部	粗大な撚糸文R。	撚糸文系
62	X81Y71	①中粒(黒雲母•長石)②良好③赤④口縁部	粗大な撚糸文R。	撚糸文系
63	X88Y70他	①粗粒(石英・長石)②良好③にぶい褐④胴部	粗大な撚糸文R。	撚糸文系
64	X91Y66他	①粗粒(石英・長石)②良好③にぶい橙④口縁部	口縁部無文帯・沈線・粗大な撚糸文R。	撚糸文系
65	X93Y71	①粗粒(石英・長石)②極良③にぶい黄橙④胴部	粗大な撚糸文R。	撚糸文系
66	X77Y72他	①中粒(石英)②良好③灰黄④口縁部及び底部	口縁部に1条の横位沈線。粗大な撚糸文Rが羽状構成で入る。	撚糸文系
67	X77Y70	①粗粒(長石)②良好③にぶい黄橙④口縁部	無文。	無文系
68	X86Y72	①細粒②良好③オリーブ黄④口縁部	無文。	無文系
69	X93Y73	①粗粒(結晶片岩)②良好③にぶい赤褐④口縁部	無文。	無文系
70	X85Y69	①中粒②良好③明赤褐④口縁部	無文。	無文系
71	X84Y67	①粗粒(砂粒)②良好③橙④口縁部	無文。	無文系
72	X84Y64	①細粒②良好③浅黄橙④□縁部	無文。	無文系
73	X85Y65	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	無文。	不明
74	X77Y69	①細粒②良好③明黄褐④胴部	やや不規則な横位沈線。	田戸上層
75	X76Y71	①細粒(黒雲母)②良好③浅黄橙④口縁部	口唇部角頭状•沈線。	田戸上層
76	X84Y65	①細粒②良好③にぶい褐④口縁部	口唇部角頭状・半截竹管による平行沈線・斜位の沈線。	田戸上層
77	X85Y65	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	絡条体圧痕。	子母口
78	X78Y71	①細粒②良好③にぶい黄橙④口縁部	幅広な沈線。貝殻腹縁文。	田戸上層
79	X90Y67	①細粒②良好③橙④胴部	横位沈線と縦位沈線。	田戸上層
80	X78Y73	①細粒②良好③にぶい赤褐④口縁部	横位沈線。	田戸上層
81	X84Y65	①中粒②良好③橙④胴部	沈線•貝殼腹縁。	田戸上層
82	X93Y78	①中粒②不良③黄橙④胴部	半載竹管による平行沈線。	田戸上層
83	X84Y73	①中粒(白色鉱物)②不良③浅黄橙④胴部	沈線。	田戸上層
84	X76Y70	①繊維②良好③にぶい褐④口縁部	隆帯上に刻み・口唇部に刻み。	条痕文系
85	X85Y65	①繊維②良好③橙④口縁部	絡条体圧痕•隆带。	条痕文系
86	X82Y73	①繊維②良好③にぶい黄褐④口縁部	竹管による斜め刺突・円管文・口唇刻み。	条痕文系
87	X80Y76	①繊維②良好③明黄褐④口縁部	絡条体圧痕・口唇外縁部に絡条体による押捺。	条痕文系
88	X85Y65	①繊維②良好③橙④胴部	隆帯上に絡条体圧痕。	条痕文系
89	X82Y73	①繊維②良好③明赤褐④口縁部	竹管による斜め刺突・円管文・口唇刻み。	条痕文系
90	X85Y65他	①繊維②良好③にぶい橙④口縁部	外面貝殻条痕文。隆帯上に刻み、口唇刻み。	条痕文系
91	X86Y66	①繊維②不良③橙④口縁部	隆帯に絡条体による押捺。縄文RL。	条痕文系
92	X86Y65	①繊維②良好③橙④口縁部	口唇と隆帯に幅広な刻み。鋸歯構成の幅のある絡条体圧痕。	条痕文系
93	X80Y73	①繊維②良好③明赤褐④胴部	内外面とも貝殼条痕。外面地文に縄文LR。	条痕文系
94	X84Y73	①繊維②良好③明赤褐④□縁部	内外面とも貝殻条痕。外面に連続刺突。	条痕文系
95	X86Y65	①繊維②不良③橙④口縁部	0 段多条縄文LR。口唇と隆帯上に絡条体の押捺。絡条体圧痕文。	条痕文系
96	X83Y70	①繊維②良好③明黄褐④胴部	絡条体圧痕。	条痕文系
97	X86Y73	①繊維②良好③橙④胴部	内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
98	X86Y62他	①繊維②良好③橙④胴部	内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
99	X85Y65他	①繊維②良好③明赤褐④胴部~底部	内外面とも貝殻条痕。	条痕文系
100	X79Y88	①繊維②良好③にぶい赤褐④口縁部	縄文RL。	黒浜

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
101	X78Y88	①繊維②良好③明赤褐④口縁部	0 段多条縄文 L R•円管文。	黒浜
102	X78Y85	①繊維②良好③明赤褐④口緑部	縄文RL·円管文。	黒浜
103	X83Y88	①繊維②良好③明黄褐④胴部	半截竹管による平行沈線・コンパス文・楕円形区画文。	黒浜
104	X83Y88	①繊維②良好③にぶい黄褐④口縁部	半截竹管による平行沈線・コンパス文。	黒浜
105	X82Y84	①繊維②良好③橙④胴部	縄文LR。	黒浜
106	X83Y68	①繊維②良好③明黄褐④胴部	縄文上。	黒浜
107	X84Y68	①繊維②不良③橙④胴部	0 段多条縄文RLの異方向施文による羽状構成。	黒浜
108	X78Y88	①繊維②良好③明黄褐④胴部~底部	縄文L。	黒浜
109	X76Y74	①細粒②良好③明黄褐④底部	縄文RL。	諸磯
110	X79Y78	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	半載竹管による平行沈線。地文に縄文L・円管文。	諸磯a
111	X79Y71	①中粒(長石)②極良③にぶい赤褐④胴部	円管文·平行沈線·縄文RL。	諸磯a
112	X83Y69	①中粒(長石)②良好③赤褐④胴部	縄文RL•円形刺突。	諸磯a
113	X83Y69	①中粒(長石)②良好③明赤褐④口縁部	縄文RL•円形刺突。	諸磯a
114	X90Y78	①中粒(黑簍母)②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡し、木葉文を構成。縄文RL。	諸磯a
115	X89Y72	①細粒②良好③橙④口縁部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡。	諸磯a
116	X90Y64	①細粒②良好③橙④口縁	半載竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡。	諸磯a
117	X77Y76	①中粒②良好③浅黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡し、木葉文を構成。	諸磯a
118	X86 Y 76	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線。円管文。縄文L。	諸磯
119	X90Y72	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡。地文に縄文RL。	諸磯 b
120	X87Y78	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充塡し、木葉文を構成。	諸磯a
121	X89Y65	①細粒②極良③浅黄④胴部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文RL。	諸磯 b
122	X89Y65	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④胴部	半載竹管による平行沈線・連続爪形文。地文に縄文RL。	諸磯 b
123	X77Y70	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線。	諸磯 b
124	X91Y70	①粗粒(黒雲母)②極良③褐④胴部	半截竹管による平行沈線・鋸歯文。	諸磯 b
125	X90Y74	①粗粒②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線。	諸磯b
126	X91Y74	①中粒(白色鉱物)②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線。	諸磯b
127	X87Y80	①細粒②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文し。	諸磯 b
128	X85 Y 65	①中粒(白色鉱物)②良好③明赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文RL・口唇刻み。	諸磯 b
129	X84Y64	①中粒(白色鉱物)②良好③黄橙④口縁部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文RL。	諸磯 b
130	X84Y66	①細粒(白色鉱物)②良好③明赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線・鋸歯文。	諸磯 b
131	X76Y75	①粗粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④胴部	半載竹管による平行沈線。	諸磯 b
132	X82Y66	①粗粒(石英•白色鉱物)②良好③赤褐④□縁部	半截竹管による平行沈線。	諸磯 b
133	X85Y65他	①細粒(黒雲母)②良好③明赤褐④1/3	半載竹管による平行沈線と胴下半部を縄文RL。口径40.0cm、復原高30.8cm。	諸磯b
134	X85Y68	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい黄橙④口縁部	浮線文。頂部に突起。	諸磯 b
135	X85Y65	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい橙④口縁部	浮線文。円形刺突。縄文RL。	諸磯 b
136	X85Y68	①細粒②良好③橙④口縁部	浮線文。円形刺突。縄文ĹR。,	諸磯b
137	X81Y73	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	浮線文。	諸磯b
138	X80Y72	①細粒②良好③にぶい黄橙④口縁部	浮線文。縄文RL。	諸磯b
139	X86Y67	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④口縁部	浮線文。縄文RL。	諸磯b
140	X80 Y 76	①中粒(石英)②良好③にぶい赤褐④胴部	浮線文。縄文LR。	諸磯b
141	X90Y66他	①中粒(白色鉱物)②極良③にぶい黄褐④口縁部	浮線文。縄文LR。	諸磯b
142	X95Y65	①中粒(石英)②良好③にぶい黄橙④胴部	浮線文。縄文LR。	諸磯b
143	X79Y71	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	浮線文。縄文LR。	諸磯 b
144	X86Y78	①中粒(石英)②良好③にぶい橙④胴部	浮線文。縄文RL。	諸磯 b
145	X90Y70	①細粒(石英)②良好③浅黄橙④胴部	浮線文。縄文RL。	諸磯 b
146	X78Y72	①中粒(石英)②良好③黄橙④底部	浮線文。縄文RL。	諸磯 b
147	X84 Y 65	①粗粒②良好③にぶい橙④口縁部	浮線文。縄文RL。	諸磯 b
148	X77Y72他	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい橙④1/3	浮線文。縄文RL。現存高13.2cm。	諸磯b
149	X78Y69	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部	縄文RL。補修孔。	諸磯
150	X83Y68	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	縄文RL。	諸磯

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
151	X 72 Y 75	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい橙④胴部	縄文RL。	諸磯
152	X89Y65	①細粒②良好③橙④胴部	縄文RL。	諸磯
153	X77Y74	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	縄文RL。口径14.5cm、復原高10.9cm。	前期
154	X77Y70	①細粒②良好③橙④胴部	変形爪形文。連続爪形文。	浮島
155	X81Y67	①細粒②良好③橙④口縁部	半載竹管による平行沈線。連続爪形文。	浮島
156	X79Y69	①細粒②良好③にぶい黄褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。変形爪形文。連続爪形文。	浮島
157	X84Y70	①細粒②不良③にぶい黄橙④口縁部	半截竹管による平行沈線。口唇部に半截竹管による斜めの刺突。	浮島
158	X90Y71	①中粒②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線。連続爪形文。	浮島
159	X 85 Y 65	①細粒(白色鉱物)②良好③灰黄褐④口縁部	貝殻腹縁に連続刺突。口唇刻み。	興津
160	X85 Y 65	①中粒(石英)②良好③灰黄④□縁部	貝殻腹縁に連続刺突。口唇刻み。	興津
161	X86 Y 68	①細粒(白色鉱物)②不良③にぶい黄橙④口縁部	貝殻腹縁に連続刺突。口唇刻み。	興津
162	X78Y74	①細粒②良好③明黄褐④胴部	斜めの連続刺突。3ヶ単位の連続刺突。	興津
163	X85Y70	①細粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④口縁部	縦位の結節縄文RL。	五領ケ台
164	X86Y71	①細粒(白色鉱物)②良好③明赤褐④胴部	縦位の結節縄文RL。	五領ケ台
165	X85 Y 72	①粗粒(白色鉱物)②良好③にぶい黄橙④口縁部	口縁平行沈線·縦位区画。縄文RL。	加曽利E3
166	X95Y65	①中粒(白色鉱物)②良好③淡黄④胴部	縦位沈線区画。縄文RL。	加曽利E3
167	X80Y76	①粗粒(白色鉱物)②良好③にぶい黄橙④口縁部	口縁平行沈線·縦位区画。縄文RL。	加曽利E3
168	X87Y73	①中粒(白色鉱物)②不良③明赤褐④口縁部	口縁部を隆帯によって区画。縄文RL。	加曽利E3
169	X79Y78	①中粒(白色鉱物)②極良③明赤褐④把手	口縁部を隆帯によって区画。縄文LRL。沈線。内面と突起頂部に円形刺突。	加曽利E3
170	X84 Y87	①粗粒②良好③淡黄④胴部	口縁部区画懸垂文。縄文RL。	加曽利E3
171	X86 Y86	①中粒(白色鉱物)②不良③橙④胴部	縦位区画。縄文LR。	加曽利E3
172	X90Y81	①粗粒(白色鉱物)②良好③にぶい褐④突起	突起。浅い幅広な沈線。縄文LR。磨きと擦痕。	加曽利B1
173	X 92 Y 77	①細粒(白色鉱物)②良好③黄灰④口縁部	磨消縄文。縄文LR。沈線による同心円。注口土器。	堀之内 2
174	X92Y81	①細粒(白色鉱物)②極良③明褐灰④口縁部	磨消縄文。隆帯刻み。縄文LR。内外面に1条の沈線。	堀之内 2
175	X87Y73	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	3~4本単位の沈線。	堀之内 2
176	X88 Y 73	①細粒②極良③にぶい黄橙④口縁部	磨消縄文。口唇部刻み。縄文LR。突起。内面に沈線・隆帯・刺突。	加曽利B1
177	X89Y82他	①細粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④1/6	三角形を基本とする磨消縄文。縄文LR。現存高20.2cm。	堀之内 2
178	X94Y69	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁部	刺突•沈線。	堀之内1
179	X92Y76	①細粒②極良③褐灰④胴部	磨消縄文。縄文LR。刻み。注口土器。	堀之内 2
180	X85 Y 65	①中粒(石英)②良好③橙④胴部	沈線。	堀之内1
181	X86Y66	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	平行沈線に縄文LRを充塡。口径20.3cm、高さ10.7cm。	加曽利B1
182	X95Y65	①粗粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	刺突•沈線。	堀之内1
183	X88 Y 73	①細粒(白色鉱物)②極良③明赤褐④底部	無文部。底に網代痕・1本潜り2本超え。	堀之内 2
184	X90Y65	①細粒(白色鉱物)②極良③橙④底部	無文部。底に網代痕。	堀之内 2

#### 註)表の記載は以下の基準で行った。

- ① 胎土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。
- ② 焼成は極良・良好・不良の3段階。
- ③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。
- ④ 残存は復原個体に限って記載。その他の小片については所属部位を記載した。

Tab. 8 縄文時代石器観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石 材	備考
1	J-1	石 鋭		1.3	0.3	0.8	黒色安山岩	
2	J – 1	石 是		4.8	1.2	18.2	チャート	横形石匙であるが、つまみ状の小突起部分が欠損していると思われる。
3	J-1	石 是	-	6.1	1.1	25.8	黒色安山岩	横形石匙。細かい調整が入る。
4	J-1	削器		12.8	1.0	(98.4)	黒色頁岩	横形削器。上部に自然面を残す。
5	J – 1	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1	6.5	2.4	126.4	黒色頁岩	石斧的に使用された礫器か。
6	J – 1	三角錐形石器		(5.3)	(4.7)	(385.0)	黒色頁岩	上部と背面に自然面を残す。
7	J - 2	石 釿		1.3	0.5	0.9	黒色安山岩	四基無茎式の石鏃である。J - 2 号住居址出土唯一のもの。
8	J – 2	石是		5.0	1.0	15.9	黒色頁岩	表裏面ともほぼ全周にわたって調整が施された横形石匙である。
9	J - 2	削器	1	6.2	1.3	(27.2)	黒色頁岩	側部が一部欠損する。
10	J – 2	削器		5.5	1.2	32.2	黒色頁岩	本遺跡で一番多く出土した黒色頁岩製の削器である。
11	J – 2	磨製石角		5.5	1.6	(40.4)	黒色頁岩	中央部のみ残存。敲打痕で構成され、刃部にわずかに磨きが入る。
12	J - 2	磨製石角		(5.9)	(1.9)	(120.4)	変玄武岩	上部欠損。定角式のものと思われる。
13	J – 2	四 石	.					
	-		1	8.7	5.5	860.0	別線岩	閃緑岩製の凹石である。
14	J - 2	郎 石		7.2	4.0	380.0	粗粒安山岩	磨石と両用される。両面使用。   下部を掲
15	J – 2	敲石		6.6	2.8	(310.0)	粗粒安山岩	下部欠損。
16	J – 2	敲 石		6.6	5.1	(280.0)	粗粒安山岩	下部欠損。上部に敵打痕が認められる。
17	J – 2	蜂巢石	1	25.5	9.6	7,420.0	粗粒安山岩	一両面使用。
18	J - 2	蜂巢石	<del></del>	20.6	12.8	12,800.0	粗粒安山岩	J-2号住居址の床面直上から出土したものである。
19	J T - 2	打製石角		4.5	1.9	53.2	黒色頁岩	基部側に凹部が付されるもの。刃部に使用痕がみられる。
20	J T - 2	打製石角		6.1	2.0	(130.0)	黒色頁岩	中央部のみ残存。
21	J T - 2	磨石	+	(4.3)	(2.7)	(101.2)	粗粒安山岩	約2/3残存する。
22	J D-1	打製石角		5.3	1.3	72.5	黒色頁岩	刃部に使用痕が顕著にみられた。ばち形のものか。
23	J D – 7	削器		3.9	0.8	13.3	黒色質岩	表面はほぼ全周にわたって調整が入る。
24	J D - 7	削器		(4.7)	(1.2)	(32.9)	黒色頁岩	下部が欠損した削器である。 
25	JD-7	削器		6.5	2.3	118.4	黒色安山岩	一部自然面を残すが、表裏面ともていねいな調整が入る。 
26	J D - 7	打製石角	. 1	5.0	1.7	76.2	黒色頁岩	自然面を多く残す打製石斧。
27	J D - 7	多面体磨石		6.6	5.3	720.0	粗粒安山岩	早期から前期の多面体磨石と思われる。
28	J D – 8	削	+	2.6	0.5	4.2	チャート	表裏面ともに細かいていねいな調整が入る。
29	J D-10	打製石角	(5.4)	(4.9)	1.3	(40.5)	黒色頁岩	刃部欠損。 
30	J D-10	凹 を	13.5	10.6	6.7	1,100.0	粗粒安山岩	凹石としてのみ使用。
31	J D-10	敲石	11.1	7.3	5.2	500.0	粗粒安山岩	上部に敲打痕が顕著にみられる。
32	J D-11	石 銳	(1.8)	(1.5)	0.6	(1.5)	黒色安山岩	先端部および基部を欠損する。
33	J D-11	楔 形 石 暑	3.8	2:1	1.3	10.0	黒色安山岩	縦長の楔形石器である。
34	J D-11	削器	(1.8)	(1.3)	0.7	(1.2)	黒色頁岩	鋭くとがった刃部のみ残存。
35	J D-11	打製石角	€ (5.2)	3.8	1.7	(37.6)	黒色頁岩	
36	J D-11			5.3	2.7	101.9	粗粒安山岩	
37	J D-18			(1.2)	0.2	(0.2)	チャート	
38	J D-24	石 釒	(1.6)	(1.5)	0.3	(0.6)	チャート	茎部欠損。
39	J D-24	石 銳	₹ 2.4	2.0	0.4	1.2	チャート	細かい調整がていねいに入る凹基無茎式の石鏃である。
40	J D-24	石 鎗	£ (1.5)	0.9	0.3.	(0.4)	チャート	先端部は欠損するが、基部はていねいな調整が入る。
_41	J D-24	石 是	2.4	3.8	0.6	4.2	チャート	全体にていねいな調整が入る横形石匙である。
42	J D-24	削器	₹ 3.2	(3.2)	1.0	(5.7)	チャート	一部欠損。
43	J D-24	削器	₹ 7.5	5.0	0.9	31.2	黒色頁岩	刃部に使用痕が顕著にみられる。各所に熱による剝離面が認めら   れる。
44	J D-24	削器	(5.1)	3.5	0.8	(14.6)	黒色頁岩	一部欠損。
45	J D-24	削暑	₹ 3.7	(5.2)	0.7	(15.8)	黒色頁岩	一部欠損するが、刃部は全体的にていねいな調整が入る。
46	J D-24	打製石角	₹ 7.2	4.3	1.6	59.2	黒色頁岩	片刃形石斧。一部熱による剝離がみられる。
47	X80Y78	石 t	(4.2)	(2.2)	0.9	(7.4)	黒色安山岩	上部欠損。表裏面とも細かい調整がていねいに入る。
48	X84Y69	石 t	18.1	3.6	1.2	162.0	黒色片岩	多野・秩父方面産と考えられる黒色片岩製の石槍である。
49	X91Y65	有舌尖頭器	4.6)	1.6	0.5	(4.4)	チャート	上部欠損。基本的には左右対称に作られるが、細部は左右が異なる。
50	X91Y68	有舌尖頭器	₹ 5.0	1.2	0.3	1.8	珪質頁岩	細みの有舌尖頭器。槍先として使用されたものと思われる。

番号	出土位置	器 種	長	幅	厚	重さ	石 材	備考
51	X93Y70	有舌尖頭器	3.8	1.4	0.4	1.6	珪質頁岩	3 点出土した有舌尖頭器のうち、唯一の珪質頁岩製のものである。
52	X76Y72	石 鐵	2.6	1.3	0.5	1.2	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
53	X76Y72	石 鐵	1.8	0.9	0.4	0.6	チャート	五角形の平基無茎鏃か。
54	X76Y72	石 鐵	(1.4)	(1.4)	(0.7)	(1.2)	チャート	基部欠損。
55	X76Y72	石 鐵	2.4	1.4	0.6	1.5	黑色安山岩	凹基無茎式の石鏃か。
56	X76Y72	石 錐	3.0	0.9	0.5	1.2	黑色安山岩	尖基鏃か。
57	X76Y73	石 皴	€ 2.1	1.3	0.3	0.9	チャート	凹基無茎鏃。
58	X77Y70	石 錐	3.1	1.3	0.6	1.6	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
59	X77Y70	石 皴	2.0	1.5	0.6	1.5	チャート	平基無茎式の石鏃。
60	X77Y74	石 皴	(1.9)	1.9	0.5	(1.0)	黒色安山岩	先端部が欠損する。平基無茎式。
61	X78Y71	石 銳	(1.7)	1.5	0.5	(0.8)	黒色頁岩	先端部欠損。基部に浅いえぐりの入る平基無茎鏃か。
62	X78Y71	石 錐	1.8	1.4	0.4	0.9	黑色安山岩	基部に浅いえぐりの入る平基無茎鏃。
63	X78Y72	石 鏡	1.9	1.5	0.3	0.8	チャート	凹基無茎鏃。
64	X78Y72	石 鈹	2.5	1.3	0.7	1.2	黒色安山岩	凹基無茎式の石鏃か。
65	X78Y73	石 鈹	1.7	1.2	0.3	0.6	黒色安山岩	凹基無茎式の石鏃。
66	X79Y69	石 鍛	2.3	(1.3)	0.3	(0.6)	チャート	基部の一部が欠損する凹基無茎式の石鏃。
67	X79Y70	石 皴	2.0	1.4	0.4	0.6	黒 曜 石	凹基無茎鏃。基部の一部に磨滅痕が認められる。
68	X80Y69	石 皴	(2.2)	1.8	0.4	(1.2)	チャート	先端部が欠損する。凹基無茎式の石鏃。
69	X80Y69	石 皴	2.0	(1.2)	0.3	(0.5)	チャート	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃か。
70	X80Y73	石 皴	(2.0)	1.7	0.3	(1.0)	チャート	先端部欠損。凹基無茎鏃。
71	X80Y73	石 鉱	₹ 2.0	1.2	0.4	1.0	黒色安山岩	基部に浅いえぐりの入る平基無茎式の石鏃か。
72	X80Y75	石 鋭	1.8	1.2	0.3	0.4	チャート	凹基無茎鏃。
73	X80Y76	石 鋭	₹ 3.0	1.9	0.5	1.6	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
74	X80Y76	石 鉱	2.3	1.3	0.3	1.0	黒色安山岩	凹基無茎鏃。細かい調整が全周にわたって入る。
75	X80Y76	石 鉱	1.5	1.1	0.3	0.5	チャート	節理面が残る、基部に浅いえぐりの入る平基無茎鏃か。
76	X80Y76	石 鋭	2.6	2.0	0.4	1.3	チャート	凹基無茎式の石鏃。
77	X81Y67	石 鉱	(1.7)	1.4	0.6	(1.3)	黒色安山岩	先端部が欠損する。凹基無茎式。
78	X81Y71	石 剣	2.4	1.4	0.5	1.1	<b>黒色安山岩</b>	凹基無茎鏃。
79	X82Y71	石 剣	集 2.7	1.6	0.4	1.5	黒色安山岩	基部に浅いえぐりの入る平基無茎鏃か。
80	X82Y73	石 剣	₹ 2.0	1.2	0.4	0.8	チャート	凹基無茎鏃。基部の一部が欠損するか。
81	X82Y75	石 載	友 2.4	(1.4)	0.5	(1.2)	チャート	凹基無茎式。基部の一部が欠損する。
82	X82Y86	石 鋭	(2.5)	(2.0)	0.3	(1.2)	黒色安山岩	
83	X83Y64	石		1.3	0.3	0:6	珪質頁岩	
84	X83Y64	│石 第		1.4	0.6	(1.0)	黒色安山岩	
85	X83Y72	石		1.4	0.3	0.4	チャート	凹基無茎鏃。一部欠損か。
86	X84Y64	石		1.8	0.8	3:0	黒色安山岩	四基無茎式の石鏃。
87	X84Y65			1.1	0.5	0.7	チャート	平基無茎鏃であるが、基部に浅いえぐりが入る。
88	X84Y65		表 3.3	1.1	0.5	1.7	黒色頁岩	
89	X84Y66			(1.1)	0.3	(0.5)	黒曜石	基部の一部が欠損する。凹基無茎式の石鏃。
90		ļ		1.9	0.5	3.2	チャート	
91				1.1	0.4	0.5	黒色安山岩	
92	X84Y78			(1.3)	0.5	(1.0)	黒曜石	
93	X85Y64			(1.2)	0.4	(0.6)	黒曜石	
94	X85Y65	Į.	集 1.8	1.4	0.3	0.6	チャート	世基無茎式の石鏃。
95	X85Y65		集 2.6	1.4	0.6	1.6	黒色安山岩	
96	X85Y65	ļ	集 2.1	1.3	0.5	0.8	チャート	世基無茎鏃。
97	X85Y65		族 2.1	1.4	0.5	1.0	黒色安山岩	
98	X85Y67		族 1.9	1.2	0.5	0.8	黒色頁岩	
99	X85Y67		族 (1.7)	1.7	0.5	(1.2)	黒色安山岩	
100	X85Y68	│石 第	族 2.7	1.2	0.6	1.5	黒色安山岩	<u> </u>

番号	出土位置	器	種	長	幅	厚	重き	石 材	備考
101	X 85 Y 68	石	鏃	2.5	1.5	0.5	1.2	チャート	基部に浅いえぐりのある平基無茎式の石鏃。
102	X 85 Y 82	石	鏃	2.0	1.4	0.4	0.6	黒 曜 石	凹基無茎鏃。
103	X86Y65	石	鏃	1.6	1.6	0.4	0.6	チャート	えぐりの大きい凹基無茎式の石鏃。
104	X86Y65	石	鏃	1.8	1.4	0.3	0.8	黑色安山岩	凹基無茎鏃。
105	X86Y65	石	鏃	(1.5)	1.3	0.4	(0.9)	黑色安山岩	先端部欠損。凹基無茎式の石鏃。
106	X86Y68	石	鏃	2.3	(1.5)	0.6	(1.4)	黒色安山岩	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃。
107	X86Y72	石	鏃	2.0	(1.8)	0.4	(0.9)	チャート	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃。
108	X86Y73	石	鏃	3.1	1.3	0.5	. 1.4	黑色安山岩	凹基無茎式の石鏃。
109	X87Y65	石	鏃	1.9	(1.3)	0.3	(0.6)	チャート	基部の一部が欠損する。凹基無茎鏃。
110	X87Y67	石	鏃	(1.4)	(1.1)	0.5	(0.6)	黒色安山岩	基部が欠損する。
111	X87Y68	石	鏃	(1.3)	1.5	0.4	(1.2)	チャート	先端部が欠損する凹基無茎式の石鏃。
112	X87Y72	石	鏃	2.4	1.7	0.3	1.0	黒色安山岩	凹基無茎式の石鏃。
113	X87Y72	石	鏃	(1.4)	(1.2)	0.3	(0.5)	チャート	基部欠損。
114	X88 Y 67	石	鏃	2.7	1.5	0.5	1.1	チャート	凸基有茎鏃。
115	X89Y70	石.	鏃	2.9	1.6	0.5	1.9	チャート	凸基有茎鏃。
116	X90Y68	石	鏃	(2.1)	(1.7)	`0.5	(1.7)	黑色安山岩	一部欠損。凹基無茎式の石鏃。
117	X 90 Y 72	石	鏃	(3.6)	(2.6)	0.5	(2.4)	珪質頁岩	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃。
118	X90Y83	石	鏃	(1.8)	(1.3)	0.4	(0.9)	チャート	基部が欠損する。
119	X91Y69	石	鏃:	(1.8)	1.9	0.6	(1.6)	チャート	先端部が欠損する凹基無茎鏃。
120	X91Y70	石	鏃	3.0	1.4	0.4	1.6	黑色頁岩	凸基有茎鏃か。茎部の一部が欠損か。
121	X91Y73	石	鏃	2.2	(1.8)	0.3	(0.9)	珪質凝灰岩	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃。唯一の珪質凝灰岩製の石器。
122	X91Y75	石	鏃	(1.6)	1.3	0.5	(0.7)	黒 曜 石	凹基無茎鏃。先端部および基部の一部が欠損する。
123	X92Y73	石	鏃	3.0	1.7	0.5	1.6	チャート	凹基無茎鏃。
124	X94Y72	石	鏃	2.1	(1.1)	0.2	(0.5)	黒色頁岩	基部の一部が欠損する平基無茎鏃。
125	表 採	石	鏃	(2.5)	(1.5)	0.3	(0.6)	チャート	基部の一部が欠損する凹基無茎鏃。
126	表 採	石	鏃	3.2	1.6	0.5	1.9	黒色頁岩	凸基有茎鏃。
127	X77Y74	石	錐	3.3	2.0	0.7	1.6	黒色頁岩	基部の調整はあまりていねいではない。
128	X79Y69	石	錐	2.9	1.4	0.5	2.6	チャート	基部および先端部に細かい調整がていねいにほどこされている。
129	X86Y68	石	錐	7.8	5.8	1.4	43.4	黑色頁岩	先端部欠損。
130	X80Y76	楔形	万 器	2.9	2.6	0.9	6.6	黒色安山岩	六角形状を呈する楔形石器である。
131	X82Y71	楔形	万石 器	3.9	2.8	1.1	11.2	黒色安山岩	縦長の三角形を呈する楔形石器である。
132	X83Y68	楔形	万 石 器	2.5	1.9	1.0	3.6	チャート	縦長の三角形であるが、使用時に一部欠損しているものか。
133	X85Y65	楔形	万 器	5.0	3.1	1.5	19.3	黒色頁岩	縦長の四角形を呈する楔形石器である。
134	X85Y66	楔形	万石器	4.5	3.2	1.5	19.6	チャート	縦長の四角形を呈する楔形石器である。
135	X85Y66	楔形	万 器	3.3	3.0	0.9	7.4	黒色安山岩	六角形状を呈する楔形石器である。
136	X76Y71	石	匙	2.9	1.5	0.7	1.6	黒 曜 石	縦形石匙である。つまみは簡単にほどこされる。
137	X77Y70	石	匙	. 4.5	5.9	0.9	16.9	珪質頁岩	
138	X78Y73	石	匙	6.9	2.3	1.0	15.6	黒色安山岩	
139			匙	3.9	1.8	0.9	4.9	チャート	縦形石匙。表裏面とも細かい調整がていねいに入る。
140	-		匙	5.5	5.2	0.8	19.8	黒色頁岩	
141			匙	3.8	6.2	1.4	20.8	黒色安山岩	
142			匙	3.4	4.8	0.9	7.4	チャート	
143			匙	6.2	2.4	0.7	10.0	黒色安山岩	
144		1	器	3.5	2.3	1.0	8.7	チャート	縦長の剣片を用いて作出した削器である。
145			器	9.2	5.4	2.6	94.0	黒色頁岩	
146			器	13.6	5.1	3.4	225.0	黒色頁岩	
147		削	器	7.8	4.7	1.7	78.0	黒色頁岩	
148	X83Y85	削	器	3.4	(3.2)	1.0	(8.5)	黒 曜 石	
149	i		器	8.0	5.5	2.4	110.3	黒色頁岩	
150	X85 Y 70	削	器	4.8	6.4	0.7	28.4	黒色頁岩	つまみが簡単につけられており、横形の粗製石匙とも考えられる。

番号	出土位置	器 種	長 帽	1 厚	重さ	石 材	備考
151	X86Y68	削 器	10.0 4	.0 1.7	64.2	黒色頁岩	縦長剝片を使用して作出。表裏面ともにていねいな調整が入る。
152	X88Y83	削器	4.3 2	.1 0.9	5.5	チャート	縦形削器。表裏面ともに細かい調整がていねいに入る。
153	X89Y65	削 器	9.6 6	.3 2.4	160.6	黒色頁岩	縦形。裏面は自然面にわずかに調整が入る。
154	X89Y67	削 器	4.6 4	.9 0.8	17.7	頁 岩	縦形削器。表面は全周にわたってていねいな調整が入る。
155	X89Y84	削 器	7.0 3	.2 1.3	26.6	黒色頁岩	縦形。表面の半分は自然面が残る。
156	X92Y73	削 器	10.8 (5	.0) 1.8	(88.0)	<b>建質頁岩</b>	一部欠損。刃部は細かい調整がていねいに入る。
157	表 採	削 器		.1 1.3	10.3	チャート	   表裏面とも全面に細かい調整がていねいに入る。
158	X76Y73	打製石斧	17.1 8	.5 4.4	705.0	変質玄武岩	両刃。ばち形に近い形態をとる。
159	X78Y68	打製石斧	8.0 4	.9 1.7	61.8	黒色頁岩	   片面に自然面を大きく有する片刃状石斧である。
160	X78Y74	打製石斧		.3 2.1	88.3	黒色頁岩	   表裏面ともに使用痕が認められた。ばち形に近い形態をとる。
161	X82Y72	打製石斧		.2 1.6	54.2	黒色頁岩	   片刃。ばち形に近い形態をとる。
162	X78Y74	打製石斧		.5 1.6	53.2	黒色頁岩	基部側に凹部が付される形態をとる。
163	X79Y73	打製石斧		.6 2.4	133.7	珪質頁岩	   刃部以外は表裏面ともに自然面を大きく残す。礫石斧か。
164	X80 Y 70	打製石斧		.3 3.1	245.0	黒色頁岩	基部側に凹部が付される形態をとる。
165		打製石斧		.1 3.1	245.0	黒色頁岩	表裏面ともに細かい調整がていねいに入る。
166	X80 Y 76	打製石斧		.8) 3.3	(495.0)	黒色頁岩	一部欠損。未製品の分銅形石斧か。
167	X81Y72	打製石斧		.5 2.0	54.5	黒色頁岩	片刃。ほぼ中央部に凹部が付される形態をとる。
168	X82Y67	打製石斧		.6 1.8	106.2	黒色頁岩	刃部に使用時に摩耗したと思われる使用痕が認められた。
169	X78 Y 70	打製石斧		.0 3.6	588.0	灰色安山岩	片刃状の分銅形石斧。
170	X83Y68	打製石斧		.7 1.8	80.8	黒色頁岩	短冊形を呈する。
171	X83Y88	打製石斧		.8 2.6	235.0	黒色頁岩	分銅形石斧。
172		打製石斧		.4 2.1	115.0	黒色頁岩	基部側に凹部が付される形態をとる。
	X84 Y 67	打製石斧		.4 1.4	64.4	黒色頁岩	片刃状の石斧。
173	X84 Y 67			.5 1.0	34.0	黒色頁岩	片刃。ばち形の石斧。
174							
175	X84Y67	打製石斧	ļ	.5 2.1	89.8		片刃。ばち形に近い形態をとる。       片面に大きく礫面を有し、礫面から刃部の作出がなされる。片刃。
176	X84Y68	打製石斧			255.0	黒色頁岩	
177	X84Y69	打製石斧		.9 1.6	62.8	黒色頁岩	
178	X85 Y 67	打製石斧	-	9 3.7	380.0	点紋頁岩	分銅形石斧。裏面には大きく自然面が残る。 一部欠損。ほぼ全面にわたって研磨が行き届いている。X84Y67と接合。
179	X89Y65	磨製石斧		.2) 2.1	(87.1)	変玄武岩	
180	X76Y71	多面体磨石		1.1 4.5	(685.0)	石英閃緑岩	
181	X77 Y 69	多面体磨石		6.6 4.6	960.0	砂岩	
182	X78Y69	多面体磨石		7.2 5.1	(840.0)	粗粒安山岩	一部欠損。稜線に沿って使用痕みられた。
183		多面体磨石		6.4	850.0	粗粒安山岩	
184		磨石		3 3.4	630.0	粗粒安山岩	円形。両面使用されているものである。
185	X78Y74	磨石		5.9 3.3	215.0	ひん岩	
186		磨石		5.1 2.0	123.3	粗粒安山岩	
187	X83Y64	磨石		0.1 3.6		石英閃緑岩	本遺跡の磨石は石英閃緑岩を多用しているが、そのうちの1点である。
188	X83Y67	磨石		7.0 2.7	310.0	変質玄武岩	格円形。両面使用。
189	X85 Y 70			3.6	450.0	粗粒安山岩	
190	X87Y65	磨石		5.1 3.5	240.0	石英閃緑岩	
191		磨石	-	0.7 3.6	560.0	粗粒安山岩	
192				0.5 5.2	620.0	粗粒安山岩	
193				1.2 6.6		粗粒安山岩	
194				3.8 3.3		粗粒安山岩	
195	1		i	5.1 3.6	465.0	粗粒安山岩	
196				5.1 5.0	430.0	粗粒安山岩	
197	l '			7.9 2.3		粗粒安山岩	L
198	X92Y82	凹 石	13.5 10	0.7 5.7	1,040.0	粗粒安山岩	
199	X77Y71	敲石	13.5	7.8 6.1	770.0	粗粒安山岩	
200	X80Y76	敲 石	15.6	5.0 4.0	545.0	変質玄武岩	本遺跡出土の敲石のうち、唯一の変質玄武岩製のものである。

番号	出土位置	器 種	長	幅	厚	重さ	石 材	備考
201	X81Y70	敲 石	11.3	5.7	3.0	300.0	石英閃緑岩	楕円形の河原石を使用。
202	X 82 Y 66	敲 石	14.7	3.3	3.1	280.0	黒色頁岩	本遺跡出土唯一の黒色頁岩製の敲石である。
203	X 78 Y 77	礫 器	15.0	4.2	3.6	305.0	黒色頁岩	削器的なものか。
204	X82Y73	礫 器	4.9	7.9	3.8	205.0	黒色頁岩	石斧的に使用されたものか。
205	X83Y65	礫 器	12.8	9.5	6.0	865.0	黒色頁岩	自然面をおおく残す。石斧的に使用されたものか。
206	X 76 Y 72	三角錐形石器	8.9	6.2	4.9	305.0	砂岩	全面にわたって敲打痕が多く認められた。
207	X77Y76	三角錐形石器	(9.4)	4.5	4.1	(245.0)	黒色頁岩	先端部欠損か。
208	X79Y72	三角錐形石器	7.2	4.7	4.6.	164.6	黒色頁岩	細かい剝離面が構成される。
209	X84Y66	三角錐形石器	10.3	5.4	5.0	350.0	黑色頁岩	側面は平らな礫面である。
210	X84Y67	三角錐形石器	9.0	5.2	3.6	190.0	黒 色 頁 岩	背面に平らな剝離面が構成される。
211	X 84 Y 68	三角錐形石器	9.4	5.4	4.6	184.9	黒色頁岩	おもに側面に敲打痕が認められた。
212	X 85 Y 82	三角錐形石器	9.5	5.5	4.3	278.0	黒色頁岩	全面にわたって細かい調整が行われている。
213	X86Y64	三角錐形石器	9.9	4.5	4.9	125.0	黒色頁岩	側面に平らな礫面が残る。
214	X 75 Y 73	スタンプ形石器	11.2	6.0	4.4	465.0	粗粒安山岩	円礫を分割した状態のものである。
215	X79Y76	スタンプ形石器	8.3	5.1	3.8	215.0	黒色頁岩	断面形は隅丸長方形を呈する。
216	X84Y64	スタンプ形石器	11.7	8.3	4.5	780.0	ひん 岩	円礫を分割したものである。
217	X86Y77	スタンプ形石器	10.5	6.2	6.0	530.0	黒色頁岩	円礫を分割し、右側縁の上端部にくびれを作出するものである。
218	X87Y70	スタンプ形石器	11.3	6.6	6.4	700.0	粗粒安山岩	円礫を分割したもので、断面形は隅丸方形である。
219	X89Y75	スタンプ形石器	9.7	4.9	3.7	260.0	粗粒安山岩	底面は1回の打撃によって作出される。
220	X75Y79	蜂の巣石	22.2	17.9	9.1	3,550.0	粗粒安山岩	表裏面ともに使用痕が認められた。
221	X82Y66	蜂の巣石	26.1	23.4	12.0	7,490.0	粗粒安山岩	赤城山産出の粗粒安山岩を使用したものであろう。
222	X 92 Y 65	蜂の巣石	10.9	9.8	4.5	510.0	粗粒安山岩	比較的小ぶりの蜂の巣石である。
223	X 82 Y 68	石 皿	26.1	16.9	5.7	4,100.0	石英閃緑岩	蜂の巣石と共用された石皿であろうか。
224	X78Y70	石 核	9.7	8.6	5.2	400.5	黒色安山岩	本遺跡周辺で入手可能と思われる黒色安山岩製の石核である。
225	X83Y68	石 核	10.7	11.5	5.6	1,120.0	黒色安山岩	全面にわたって剝離面がみられる石核である。

註)表の記載で、大きさについての単位はcm、gであり、現存値は( )で示した。

Tab. 9 古墳~平安時代遺物観察表

			大きさ	①胎土 ②焼成		
番号	出土位置	器形		③色調 ④残存	成 • 整 形 方 法	備考
1	M-1	須 恵長 頚 壺	(9.1) 27.8	①出調 ①效存 ①密 ②良好 ③灰 ④口~胴	粘土紐巻き上げ後ロクロ成形。頚部外面上半櫛歯状工具によるカキ目調整。下端部横位の撫で。頚~肩部への変換点に粘土紐巻き上げによる接合痕を認む。胴部は成形後下半に横位の篦削りを施す。頚部下半及び肩端部に2段間において1条の列点文。	類部径5.8cm、肩部径18.0cm、台部径11.3 cmを測る。頚部は直線的でわずかに外傾 して立ち上がる。肩部は算盤状に強く屈 曲した後胴部に至る。台部は下端部に丸 みをもち、断面略三角形を呈す。口縁~胴 部の一部に自然釉付着。
2	M-1	土師杯	12.0 4.0	①白色軽石粒含む ②良好 ③橙 ④ほぽ完形	口縁部機位の撫で。体部内面撫で。外面体~ 底部は不定方向に篦削りされる。	底部丸底で、口縁部は短く内湾し、端部細まる。体部内面は成形による凹凸あり。器肉は概して一定。
3	M-2	土師杯	12.0 4.1	①ややあらい ②良好 ③にぶい赤褐 ④ほぼ完形	口縁部機位の撫で。体部内面機位の撫で。外 面体~底部不定方向の篦削り。口縁~体部 への変換点に指頭調整の痕跡を認む。	底部丸底。体部緩く内湾し、口唇部は短く 内屈する。
4	M-2	土師杯	11.7 3.5	①白色軽石粒含む ②ややあまい ③橙 ④ほぼ完形	口縁部横位の撫で。体部内面横位の撫で。外 面体~底部不定方向の篦削り。	偏平な丸底から体部緩く内湾し口縁部短く、内屈する。3のそれより内屈の度合い緩い体部内面成形による凹凸有り。
5	M-7	須 恵 甕	16.9 30.0	①砂粒含み密 ②良好 ③青灰 ④口縁〜胴部の一部欠	粘土紐による巻き上げ成形。口縁部内面及び底部内面に接合痕を認む。頚部外面及び 原部内面に接合痕を認む。頚部外面及び 胴部に平行たたき目、胴部内面に半円形の 当て目調整の痕跡を認む。その後回転によ る横位の撫でにより燃り消される。口縁部 内外面横位の無で。	やや偏平な丸底気味の底部から胴部は内 湾して立ち上がり、中位で最大径を有す。 口縁部は肩部から緩く外反し、口唇部で 短く内傾する。胴部下半〜底部は器肉や や厚い。
6	M-8	鉄 刀	刀部長(27.3)cm。巾は切先付近で2.1cm、中央で2.3cm、茎付近で2.5cmを測る。厚さは切先部で0.5cm、中央〜尻で0.7cmである。刀 身部の残りは良好だが、闇部及び茎先端部分が欠失しており、刀の分類をするうえで一番重要な部分が不明のため、分類を行う ことは不可能である。ただ、刀身長がどうやら30〜40cmの間に来る点を考えると、短刀の類別の多い、均等両閨中細茎類の刀の可 能性が高い。刀装具は長3.1cm、最大径2.0cm、厚さ0.3cmである。柄木をおさえる役を果たす責金具と考えられる。ただし、足金具 としての可能性も捨て切れない。リング上部に足金具特有の吊金が剝離したような状況があるからである。			
7	M-10	土師杯	11.6 3.5	①密 ②良好 ③橙 ④口~体部の一部欠	口縁部機位の撫で。体部内面撫で。外面体~ 底部は不定方向に篦削りされる。底部外面 吸炭する。	底部偏平な丸底。体部緩く内湾し、口縁部 は直立気味に内屈する。
8	M-10	土師杯	13.1 4.0	①砂粒含む ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	口縁部横位の撫で。体部内面撫で。外面体~ 底部は不定方向の篦削り。	体部は緩く内湾し、口縁部は直立気味に 内屈、上端部細まる。体部から口縁部への 変換点は器肉やや厚い。
9	M-10	土師杯	13.2 3.9	<ul><li>①輝石含む ②良好</li><li>③橙 ④ロ~体一部欠</li></ul>	口縁部横位の撫で。体部内面撫で。外面体~ 底部は不定方向に篦削りされる。	やや偏平な丸底から体部は緩く内湾し、 口縁部は、短く内屈する。
10	表 採	石製玉	長 2.1 幅 1.0 厚 0.6	.0 される。側縁及び上下端面は粗い擦痕による面取り整形される。穿孔法は上下両方向からと考えられるが、下側		
11	H-1	土師杯	11.9 4.0	①白色軽石粒含む ②良好 ③明赤褐 ④ほぼ完形	口縁部横位の撫で。一部撫でつけ状をなす。 体部内面撫で。下半~底部にかけて不定方 向に篦削りされる。	底部は偏平な丸底を呈する。体部と口縁 部の変換部はわずかに稜をなし、口縁部 は外反気味に開く。
12	H-1	土師杯	12.0 4.3	①密 ②良好 ③赤褐 ④口縁~体部1/3弱欠	口縁部横位の撫で。一部撫でつけ状に凹む。 外面体部下半~底部は不定方向に篦削りさ れる。	底部は偏平な丸底を呈し、体部は緩く内 湾体部と口縁部の変換部は11のそれほど 明瞭ではないが稜をなす。口縁部は短く 外反。
13	H = 1°	須 恵 高台付杯	高台径 6.6 現高 4.2	①砂粒含む ②ややあまい ③灰 ④体部上半欠	ロクロ成形。底部右回転糸切り後高台貼付。 高台接合部横位の撫で。	体部は下半で外反し、だれた短い断面台 形状の高台が貼付される。器肉は概して 薄い。
14	H-1	須恵杯	底径 (6.8) 現高 2.9	①砂粒含む ②ややあまい ③灰白 ④1/3	体部ロクロ成形。底部回転糸切り。	体部は下半で直線的に立ち上がる。底部 は若干上げ底気味。器肉は概して薄い。

# 註)表の記載は以下の基準で行った。

- ① 色調は土器外面を観察し、色名は新版土色帖(小山・竹原1976)によった。
- ② 大きさについての単位はcmであり、現存値は( )で示した。

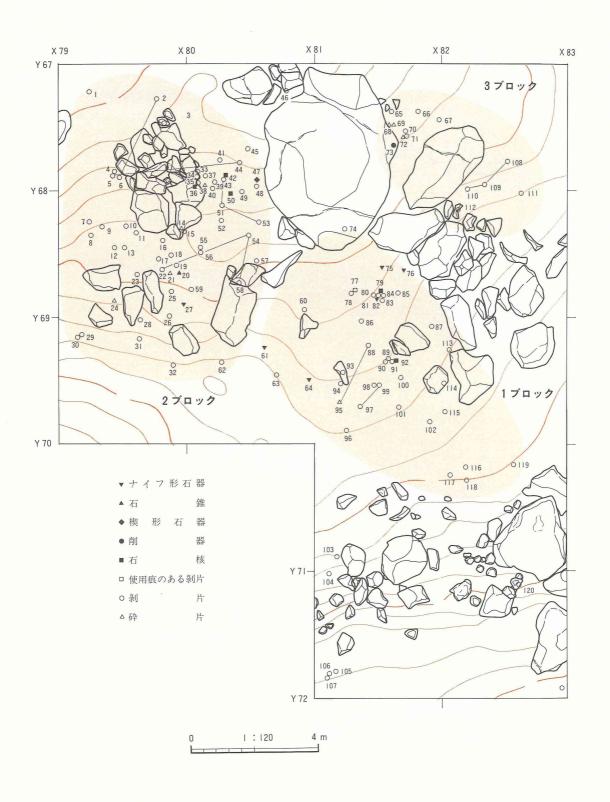


Fig. 8 旧石器器種別水平分布図

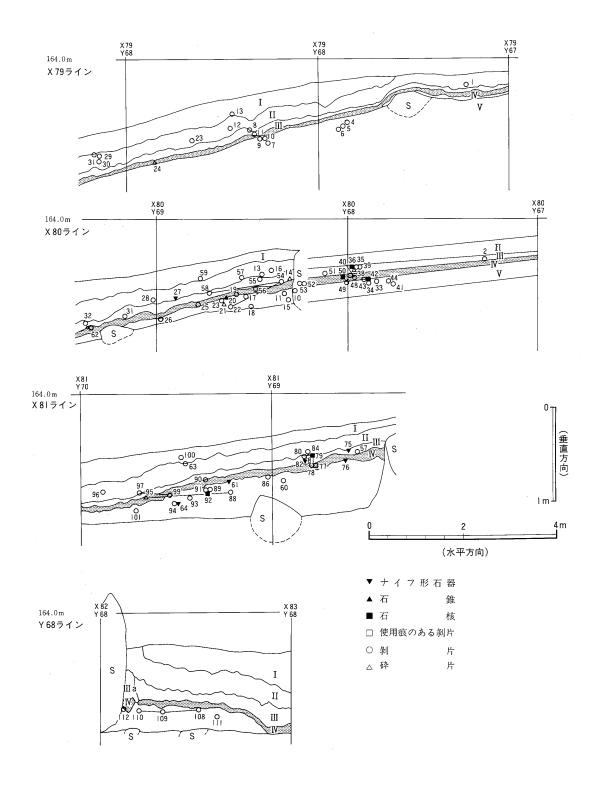


Fig. 9 旧石器器種別垂直分布図

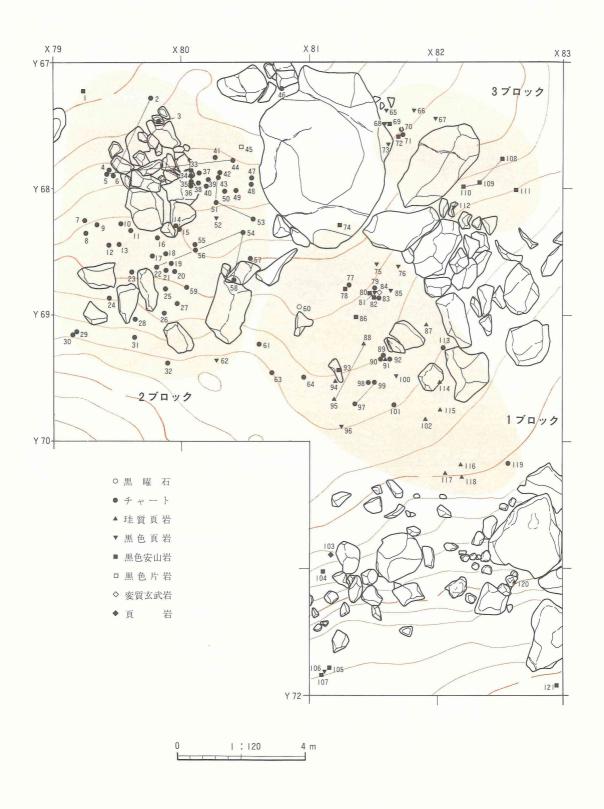


Fig. 10 旧石器石材別水平分布図

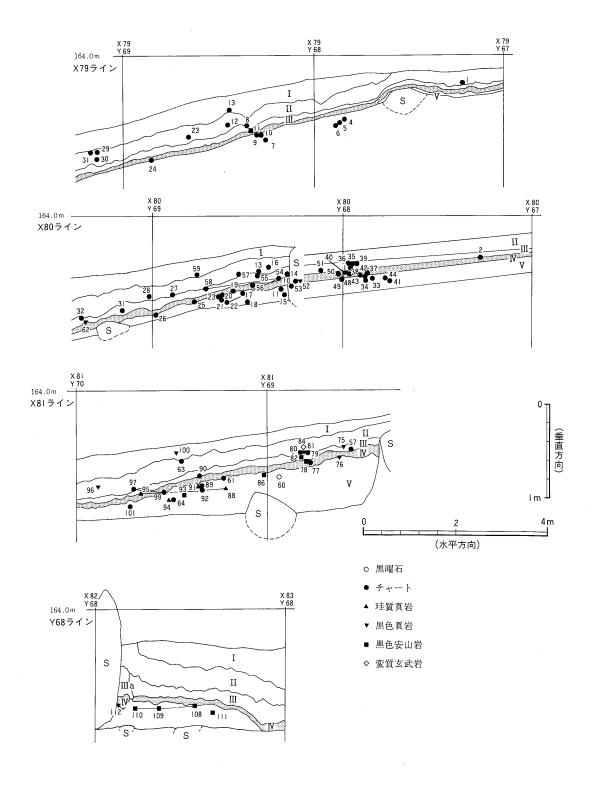


Fig. 11 旧石器石材別垂直分布図

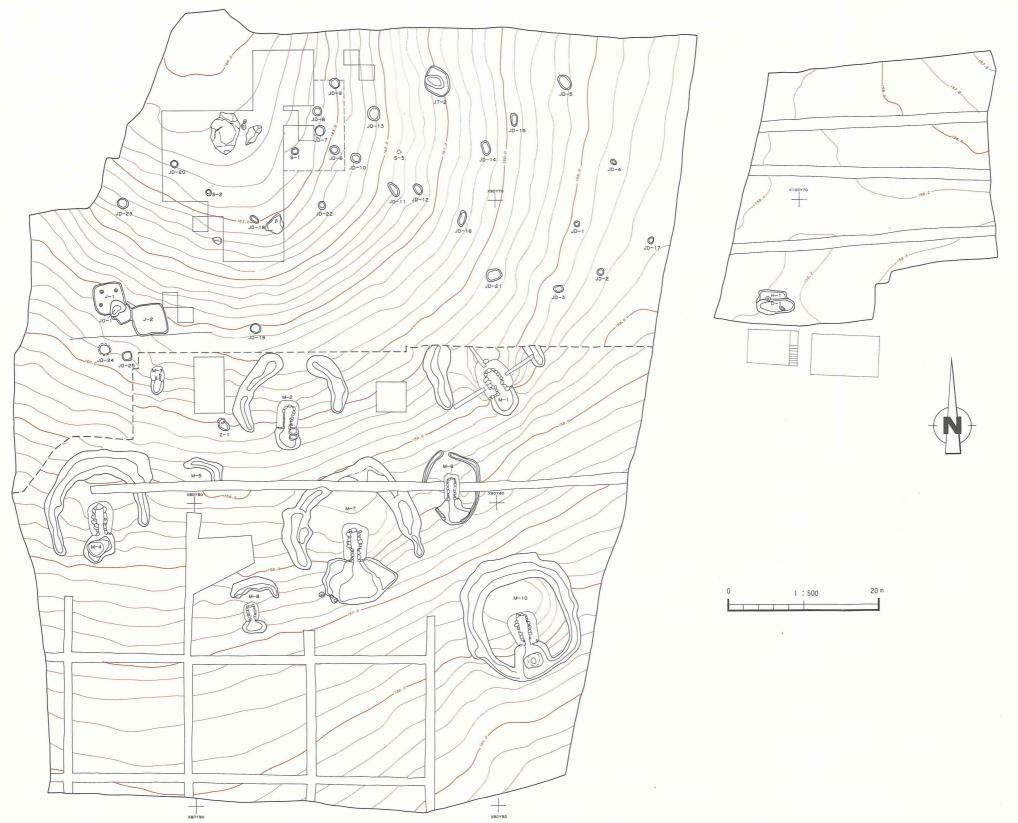


Fig. 12 熊の穴 II 遺跡繩文時代遺構全体図

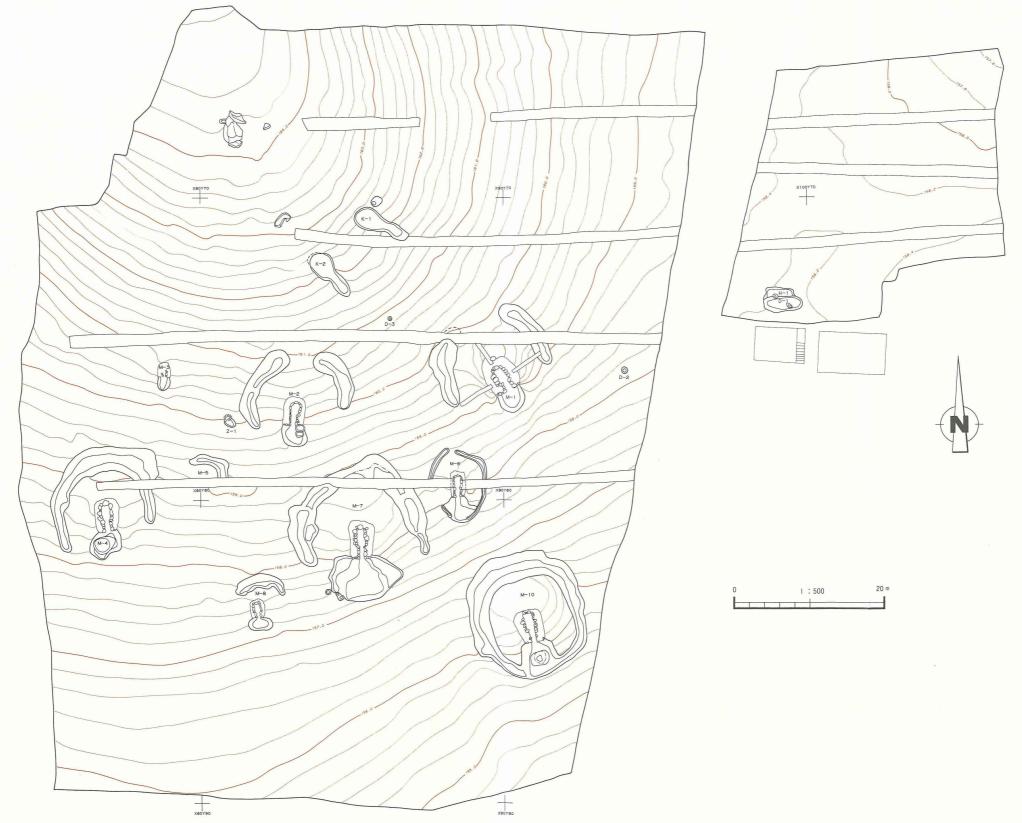
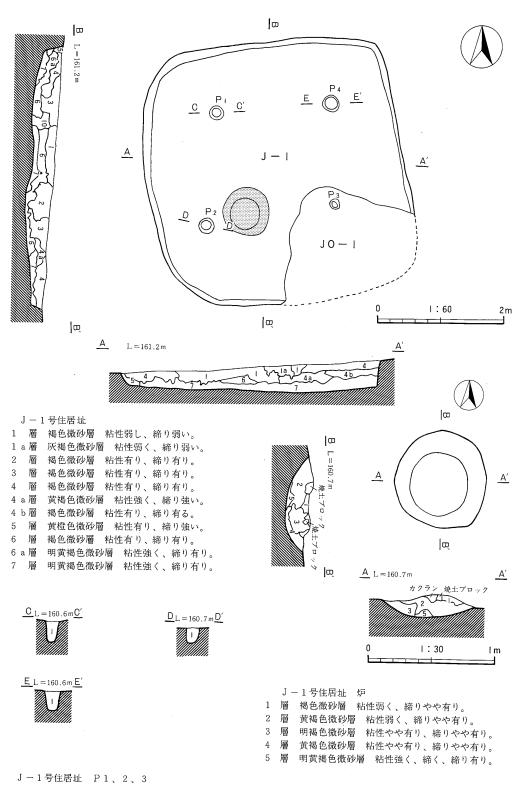


Fig. 13 熊の穴Ⅱ遺跡古墳~平安時代遺構全体図



1 層 黄褐色微砂層 粘性強く、締り固い。 Fig. 14 J-1号住居址

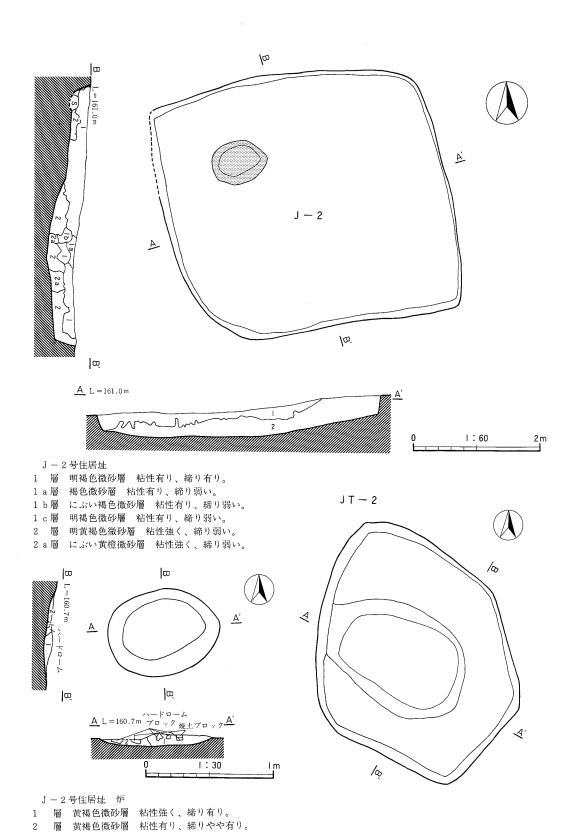


Fig. 15 J-2号住居址・JT-2号竪穴状遺構

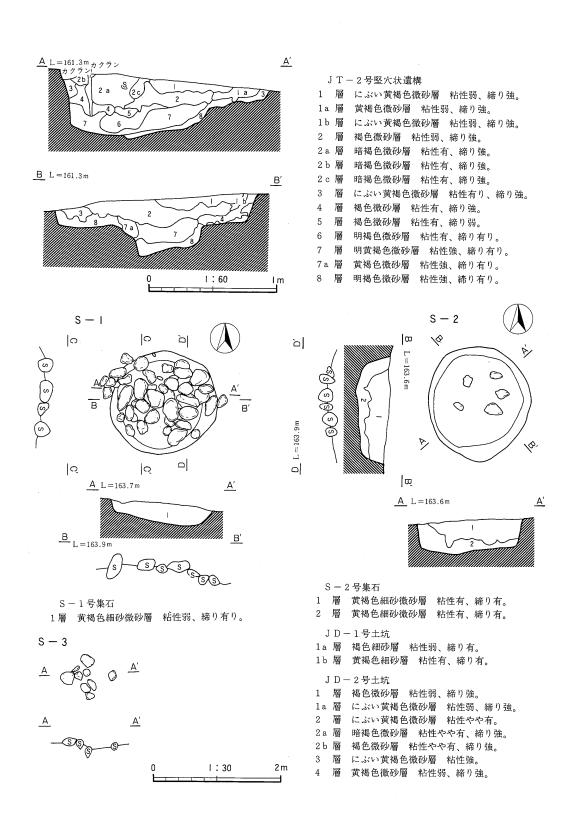


Fig. 16 縄文時代の竪穴状遺構・集石

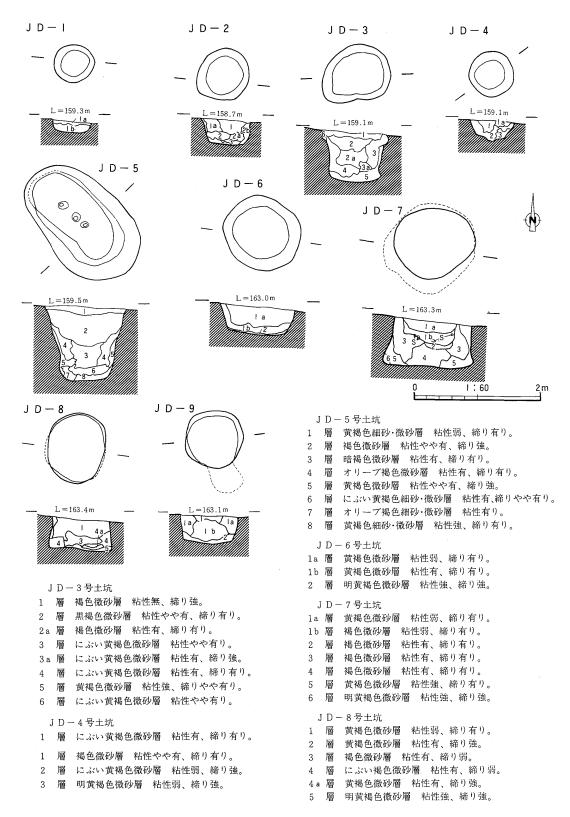
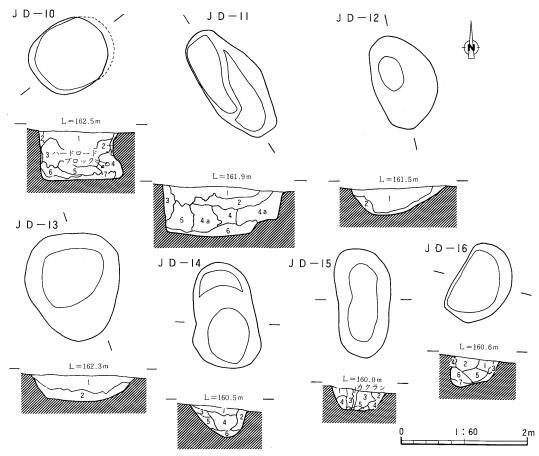


Fig. 17 縄文時代の土坑(1)



#### JD-9号土坑

- 1 層 明褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 1a層 明褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 1 b層 明褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 2 層 黄褐色微砂層 粘性強、締り強。

### J D-10号土坑

- 1 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 2 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 3 層 褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 4 層 褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 5 層 褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 6 層 黄褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 7 層 明黄褐色微砂層 粘性とくに強、締 り強。

### J D-11号土坑

- 1 層 褐色微砂層 粘性弱、締り有り。
- 2 層 黄褐色微砂層 粘性弱、締り有り。
- 3 層 明黄褐色 粘性有、締り有り。
- 4 層 にぶい黄褐色 粘性有、締り有り。
- 4a層 褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 5 層 褐色微砂層 粘性強、締り有り。
- 6 層 明褐色微砂層 粘性強、締り有り。

# J D-12号土坑

- 1 層 褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 2 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り有り。

#### J D-13号土坑

- 1 層 褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 2 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り有り。

#### J D-14号土坑

- 1 層 暗褐色微砂層 粘性無、締り強。
- 層 黄褐色微砂層 粘性無、締り強。
- 3 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性無、締り強。
  - 層 暗褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 5 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 6 層 明黄褐色微砂層 粘性有、締り有り。

#### J D-15号土坑

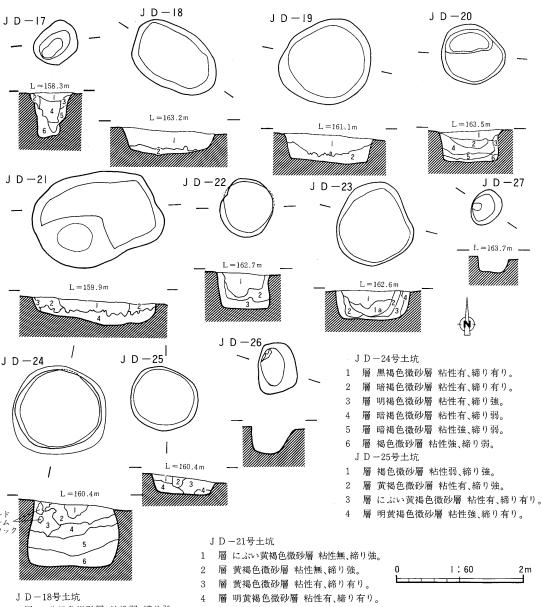
- 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性有、締り 弱。
- 2 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性有、締り 有り。
- 3 層 褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 4 層 明黄褐色 粘性有、締り強。
- 5 層 黄橙色 粘性強、締り有り。Fig. 18 縄文時代の土坑(2)

### J D-16号土坑

- 1 層 明褐色微砂層 粘性有、締り弱。
- 2 層 褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 3 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り弱。
- 4 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り強。
- 5 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性有、締り 強。
- 6 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 7 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り有り。

### JD-17号土坑

- 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性有、締り 有り。
- 2 層 明黄褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- B 層 にぶい黄橙色微砂層 粘性有、締り 強。
- 4 層 褐色微砂層 粘性有 締り弱。
- 5 層 明褐色微砂層 粘性強、締り弱。
- 6 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り強。



- 1 層 明黄褐色微砂層 粘性弱、締り強。
- 2 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り強。
  - J D-19号土坑
- 1 層 褐色微砂層 粘性ほとんど無し。
- 2 層 黄褐色微砂層 粘性強、締り弱。 J D-20号土坑
- 1 層 褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 2 層 黄褐色微砂層 粘性有、締りやや弱。
- 3 層 明黄褐色微砂層 粘性有、締り弱。
- 4 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り有り。
- 5 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り有り。
- 6 層 にぶい黄橙色微砂層 粘性強、締り弱。

- J D-22号土坑
- 1 層 にぶい黄褐色微砂層 粘性弱、締り強。
- 層 褐色微砂層 粘性有、締り強。
- 3 層 黄褐色微砂層 粘性強、締り弱。

#### J D-23号土坑

- 1 層 褐色微砂層 粘性有、締り弱い。
- a層 にぶい褐色微砂層 粘性有、締り弱。 1
- 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り弱。
- 層 黄褐色微砂層 粘性有、締り弱。
- 4 層 明黄褐色微砂層 粘性有、締り強。

Fig. 19 縄文時代の土坑(3)

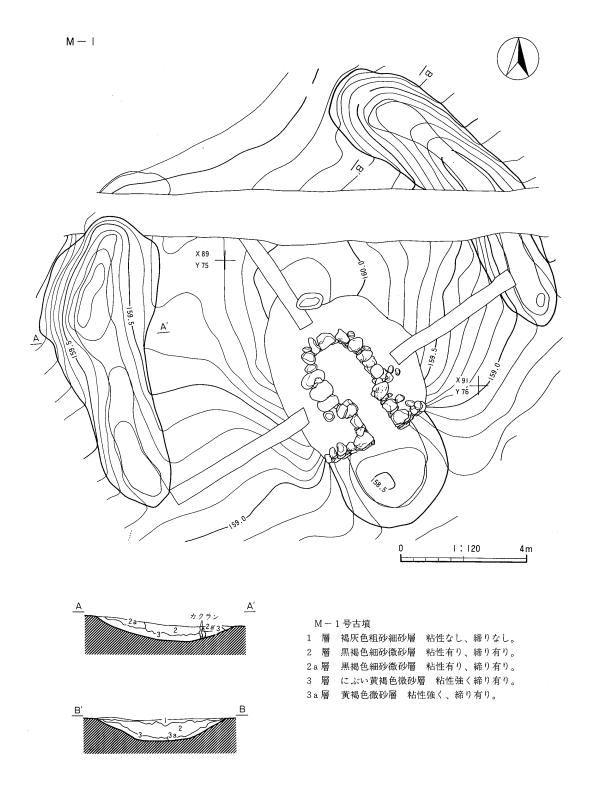


Fig. 20 M-1号墳墳丘図

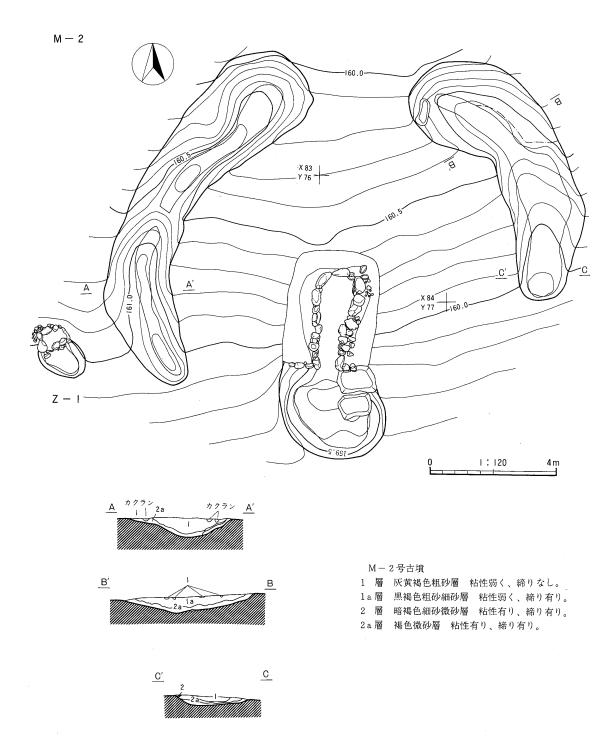


Fig. 21 M-2号墳墳丘図

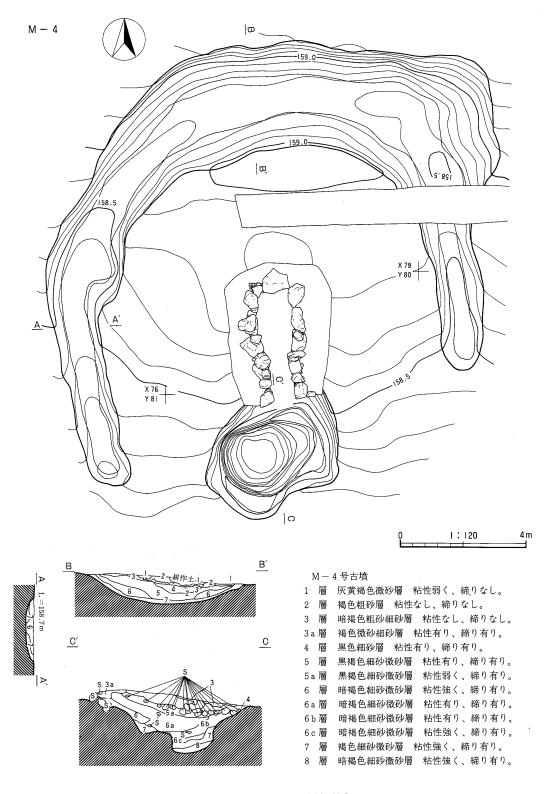


Fig. 22 M-4号墳墳丘図

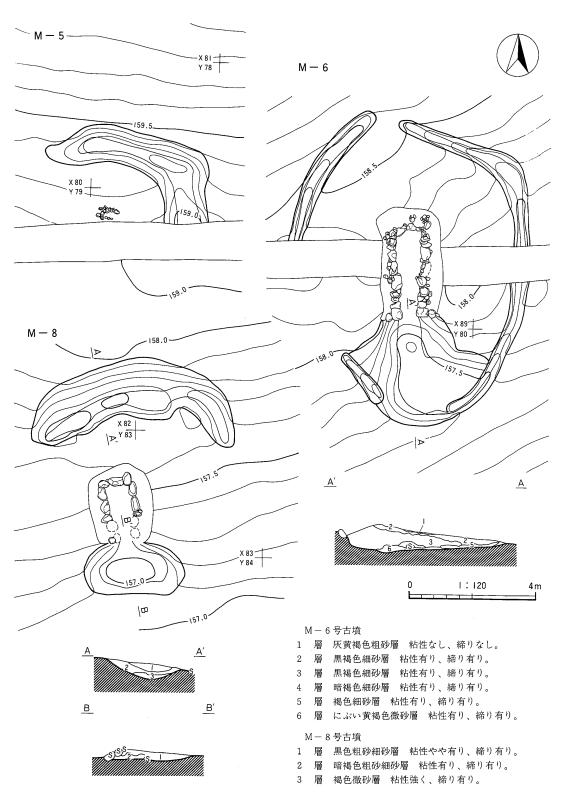


Fig. 23 M-5·6·8号墳墳丘図

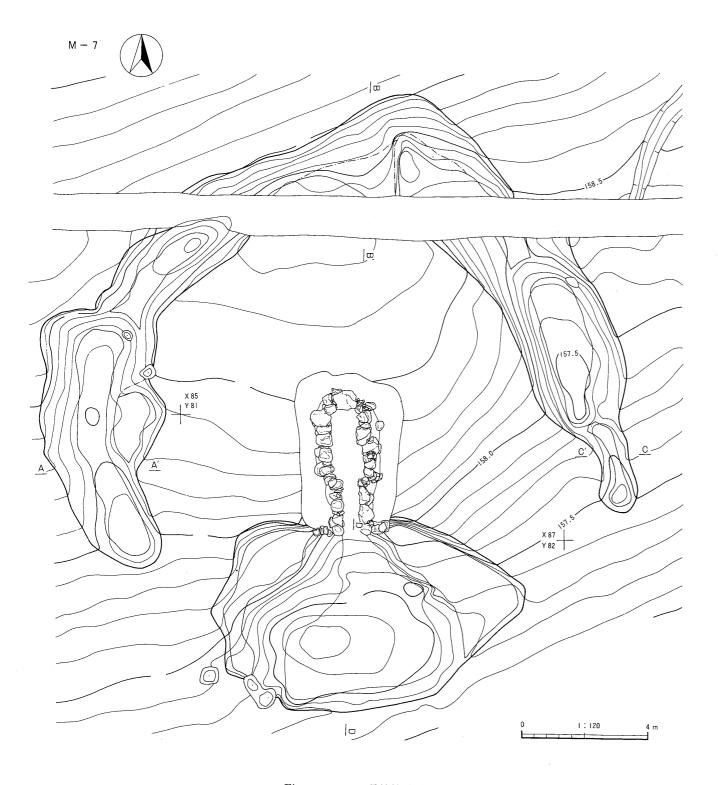
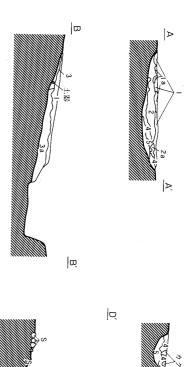
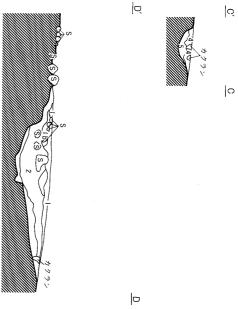


Fig. 24 M-7号墳墳丘図





# M-7号古墳

- 1 層 褐色粗砂細砂層 粘性なし、締り有り。
- 1a層 灰褐色粗砂細砂層 粘性なし、締りなし。
- 1b層 暗褐色粗砂細砂層 粘性なし、締り有り。
- 2 層 暗褐色細砂層 粘性弱く、締り弱い。
- 2a層 褐色細砂層 粘性弱く、締り弱い。
- 3 層 褐色細砂微砂層 粘性強く、締り有り。
- 4 層 にぶい黄褐色細砂微砂層 粘性有り、締り有り。
- 5 層 黄褐色微砂層 粘性強く、締り強い。

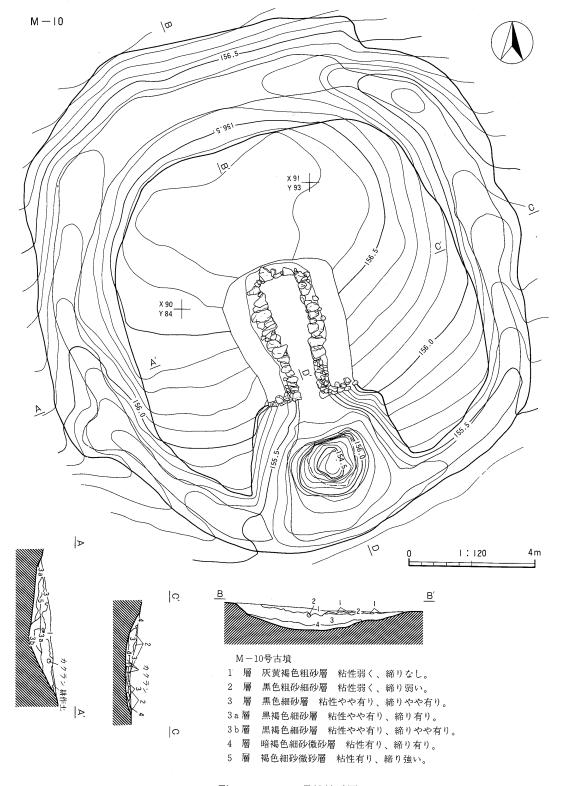


Fig. 25 M-10号墳墳丘図

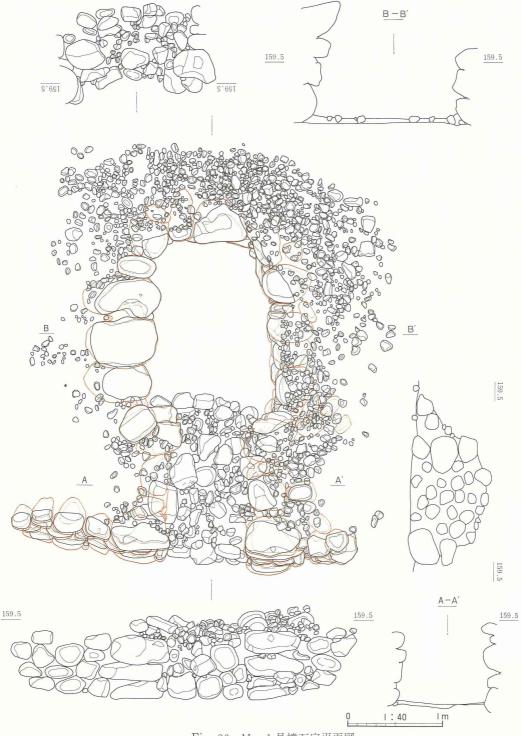
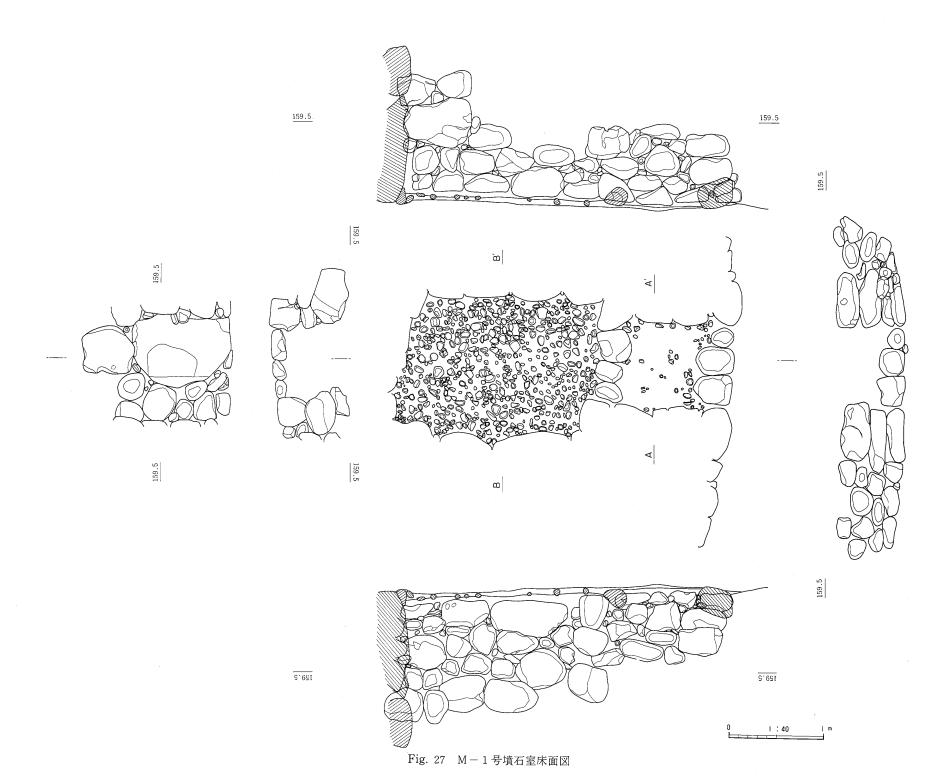


Fig. 26 M-1号墳石室平面図



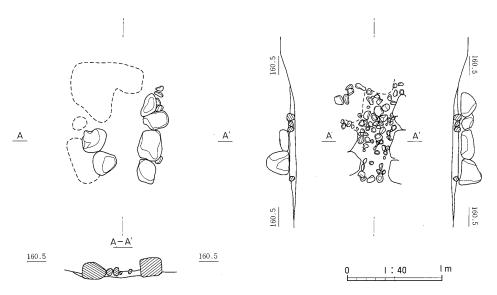


Fig. 28 M-3号墳石室平面図

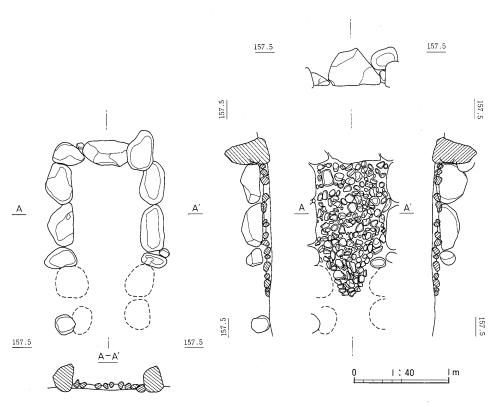


Fig. 29 M-8号墳石室平面·床面図

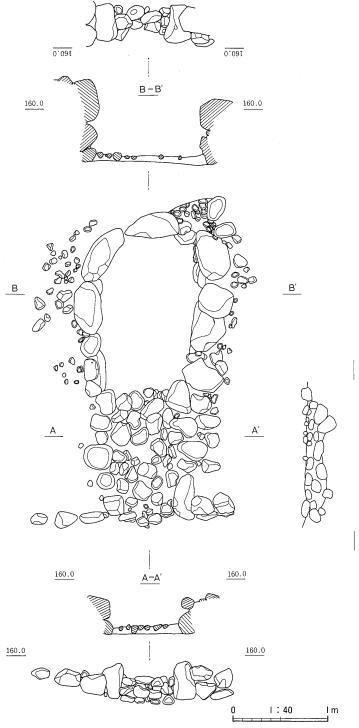


Fig. 30 M-2号墳石室平面図

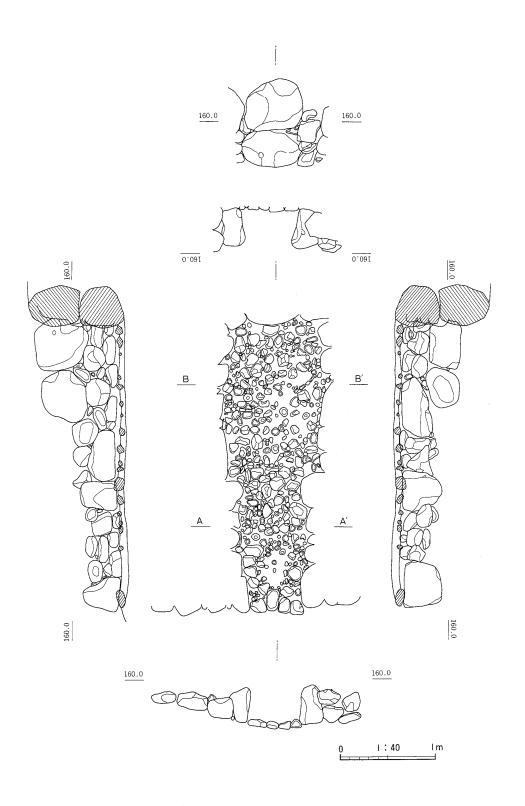


Fig. 31 M-2号墳石室床面図

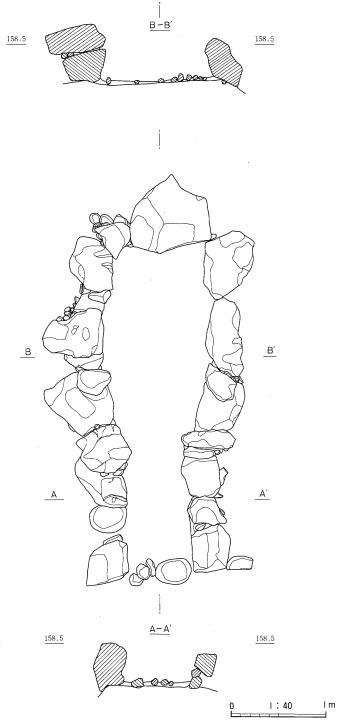


Fig. 32 M-4号墳石室平面図

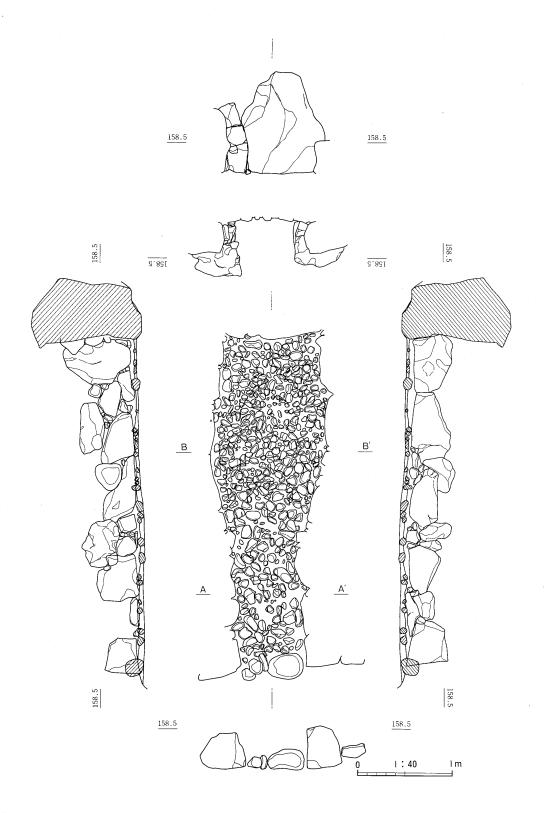


Fig. 33 M-4号墳石室床面図

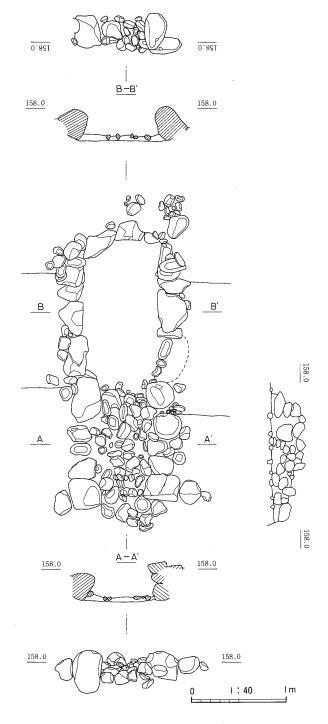


Fig. 34 M-6号墳石室平面図

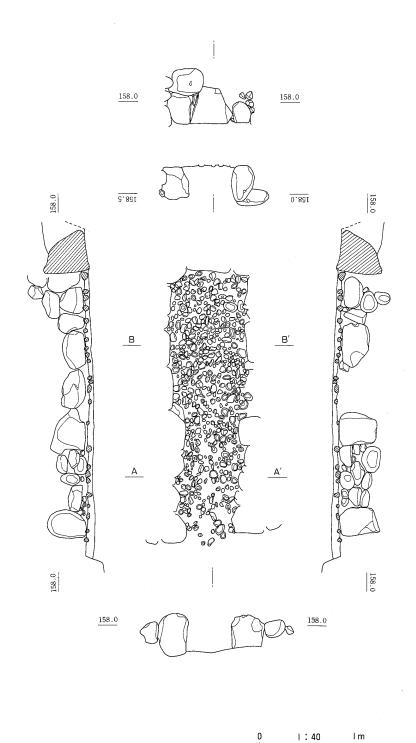
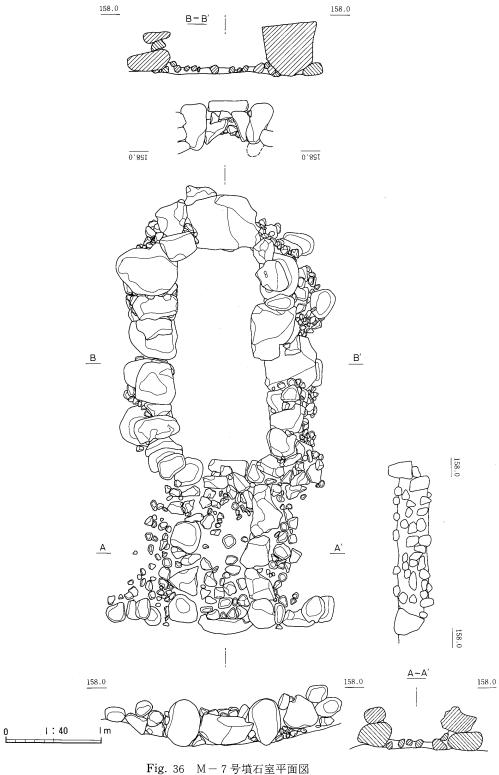


Fig. 35 M-6号墳石室床面図



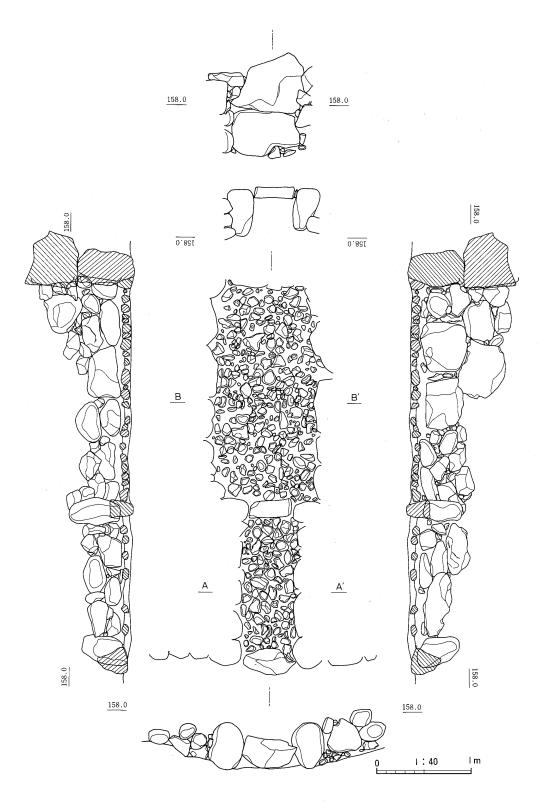


Fig. 37 M-7号墳石室床面図

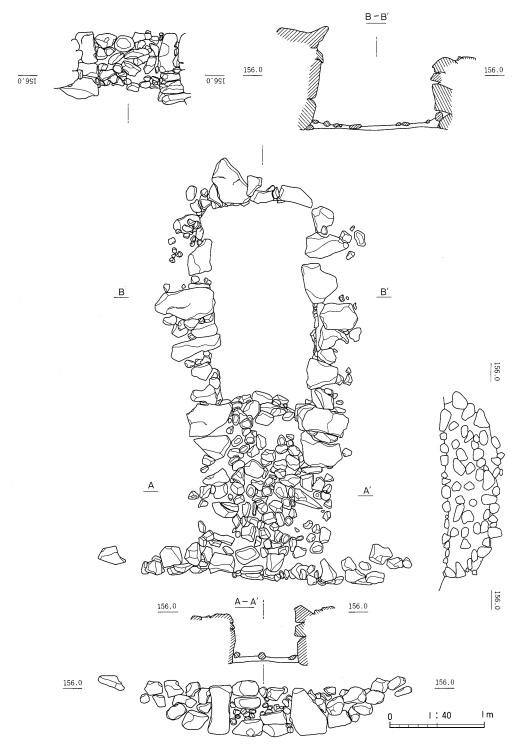


Fig. 38 M-10号墳石室平面図

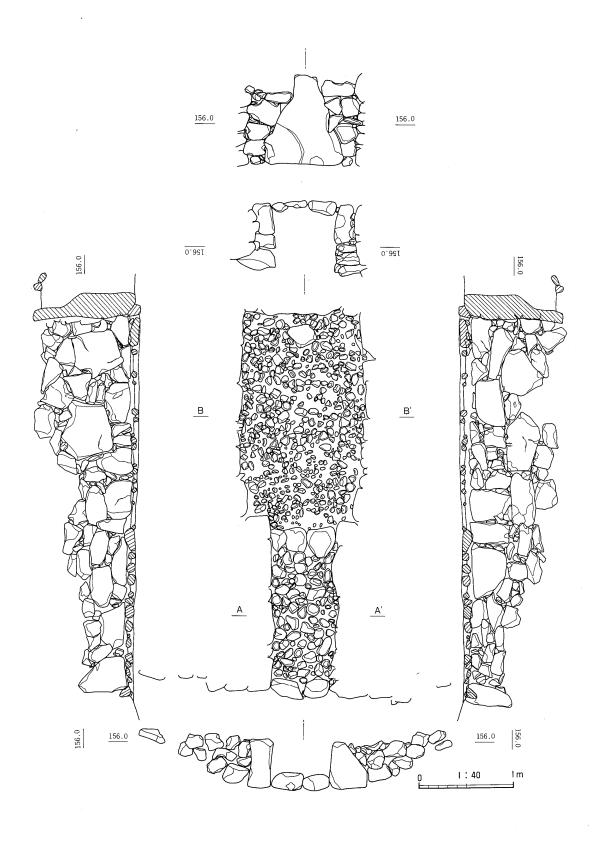


Fig. 39 M-10号墳石室床面図

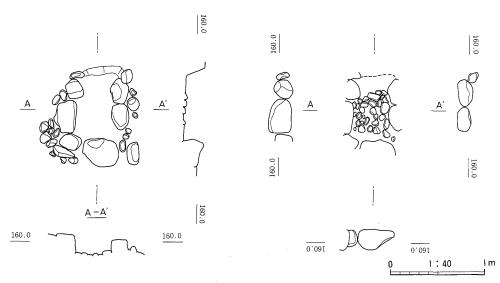


Fig. 40 Z-1号配石墓展開図

## **Z-1号配石墓**(Fig. 21・40)

位 置 X80・81、Y77グリッド 標 高 160.0m 方 位 N-60°-E

形 状 M-2 号墳の周掘の西側に墳丘や周掘をもたず平地に穴を掘り、石組みが存在するだけのものである。規模は長軸(1.07) m、短軸1.06mである。配石間の空間は長軸0.65m、短軸0.37m、深さは0.20mを測る。用途については不明であるが、今回の調査では配石墓と呼んだ。

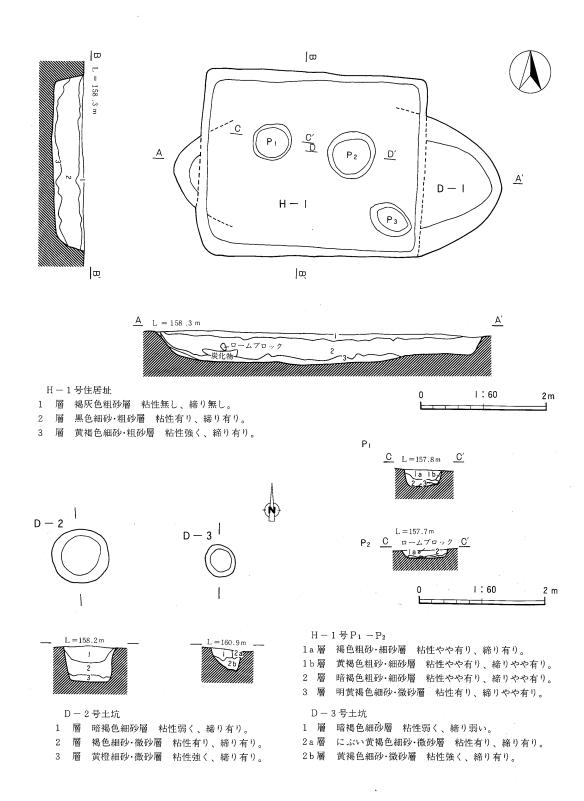


Fig. 41 平安時代の住居址・土坑

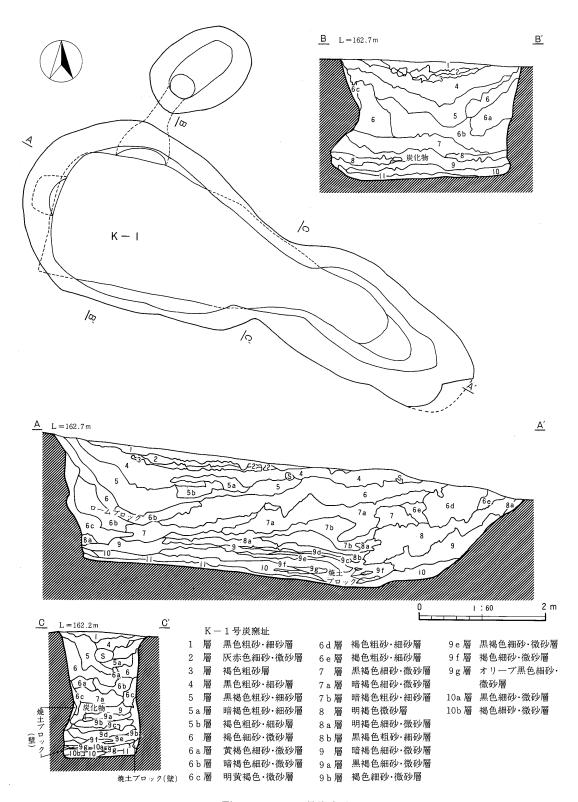
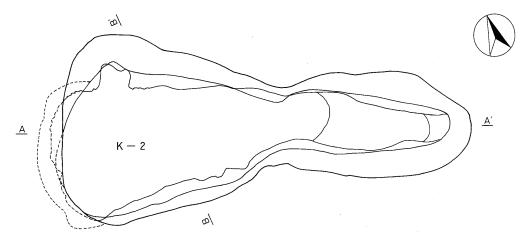
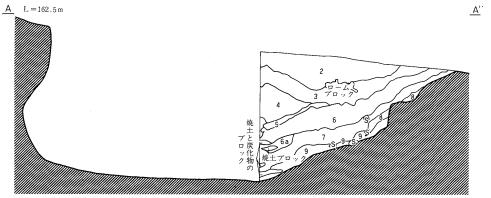


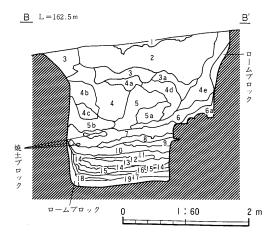
Fig. 42 K-1号炭窯址





## K-2号炭窯址

- 1 層 灰白色粗砂層 粘性無く、締り無し。
- 2 層 黒褐色細砂層 粘性無く、締り無し。
- 3 層 にぶい黄褐色細砂層 粘性無く、締り無し。
- 3 a層にぶい黄褐色細砂層 粘性無く、締り無し。
- 4 層 明黄褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 4 a 層 褐色細砂層 粘性有り、締り有り。
- 4 b層 黄橙細砂層 粘性有り、締り有り。
- 4 c層 黄橙細砂層 粘性有り、締り有り。
- 1. 原 共和方德科尼 北地大的 绒的大的
- 4 d層 黄褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 4 e層 褐色細砂層 粘性有り、締り有り。
- 5 層 明黄褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 5 a 層 明黄褐色微砂層 粘性無く、締り有り。
- 5 b層 黄褐色微砂層 粘性強く、締り有り。
- 6 層 褐色細砂層 粘性有り、締り有り。
- 6 a 層 暗褐色細砂層 粘性有り、締り有り。
- 7 層 橙色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 8 層暗赤褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 9 層 暗褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 10 層 明赤褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 11 層 明赤褐色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 12 層 黄褐色微砂層 粘性強く、締り有り。
- 13 層 橙色微砂層 粘性有り、締り有り。



- 14 層 黒色微砂層 粘性無く、締り無し。
- 15 層 橙色微砂層 粘性有り、締り有り。
- 16 層 黒色微砂層 粘性無く、締り無し。
- 17 層 明赤褐色微砂層 粘性有り、締り無し。
- 18 層 黄褐色微砂層 粘性強く、締り有り。

19 層 明赤褐色微砂層 粘性有り、締り有り。

Fig. 43 K-2号炭窯址

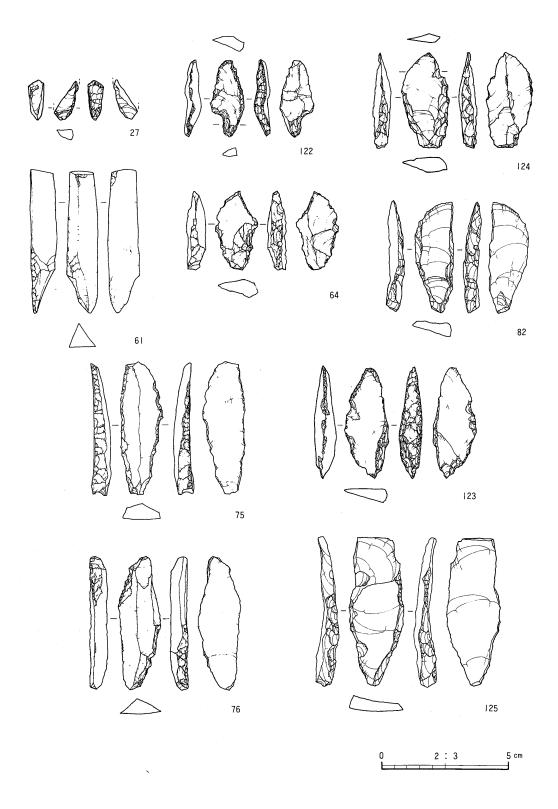


Fig. 44 旧石器時代の遺物(1)

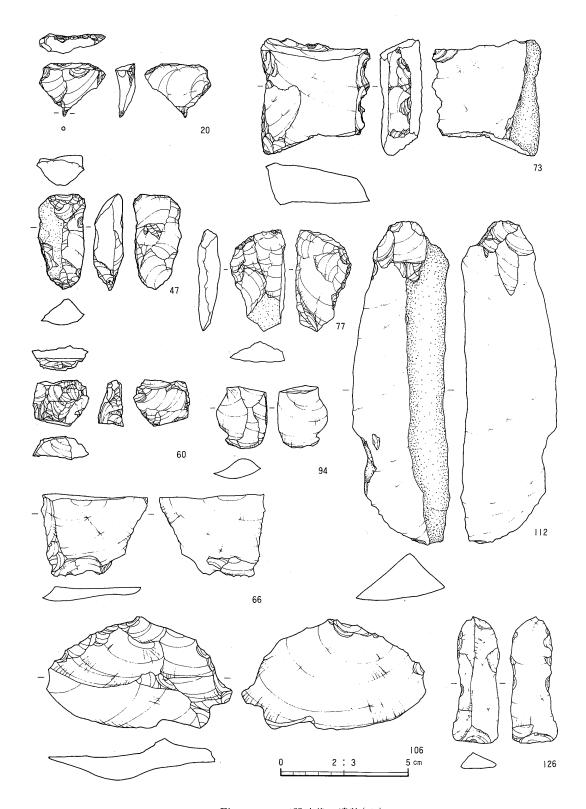


Fig. 45 旧石器時代の遺物(2)

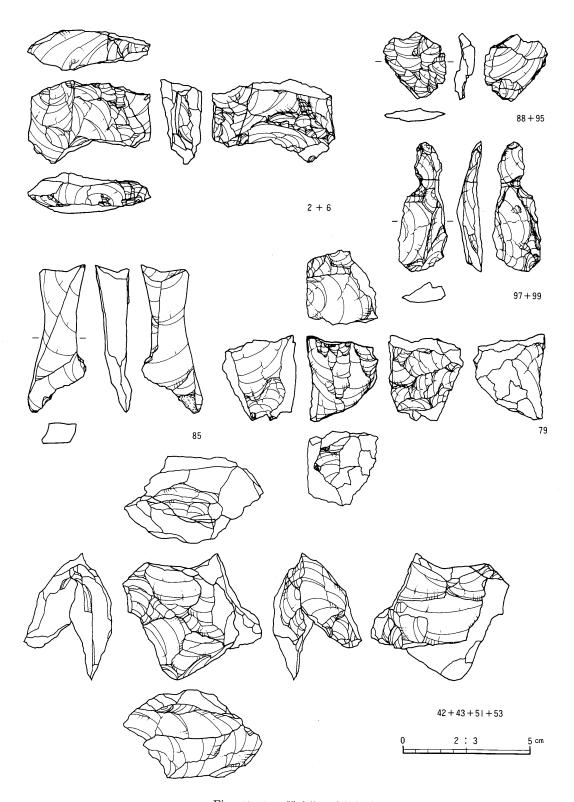


Fig. 46 旧石器時代の遺物(3)

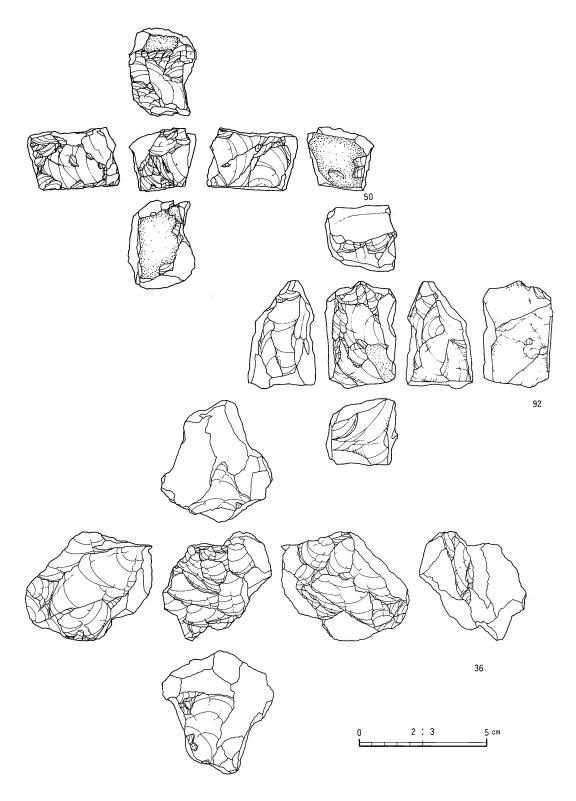


Fig. 47 旧石器時代の遺物(4)

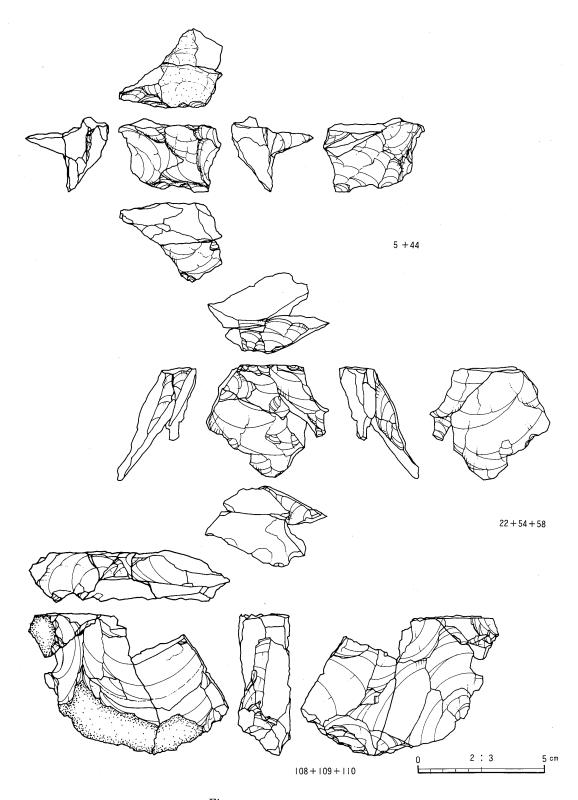
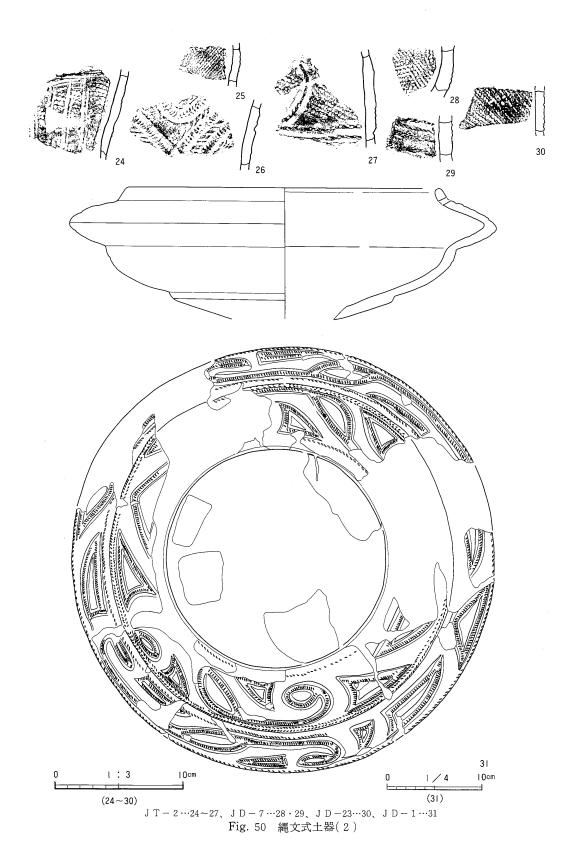


Fig. 48 旧石器時代の遺物(5)





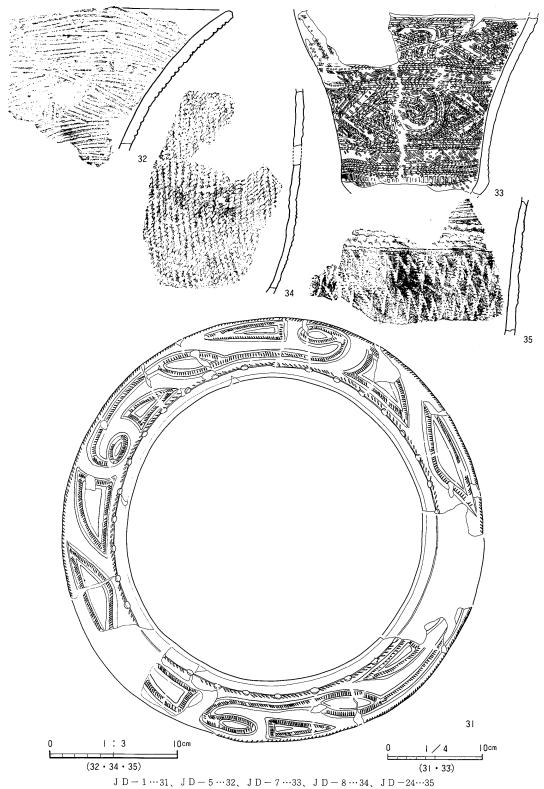


Fig. 51 縄文式土器(3)

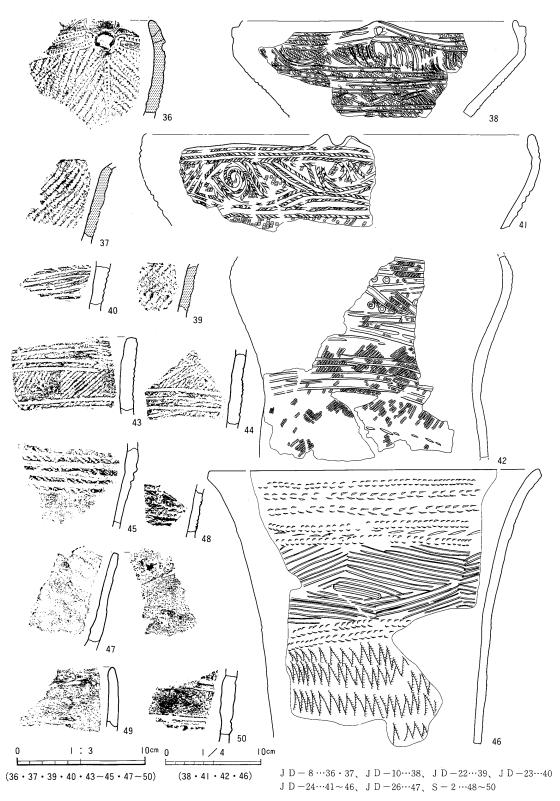


Fig. 52 縄文式土器(4)

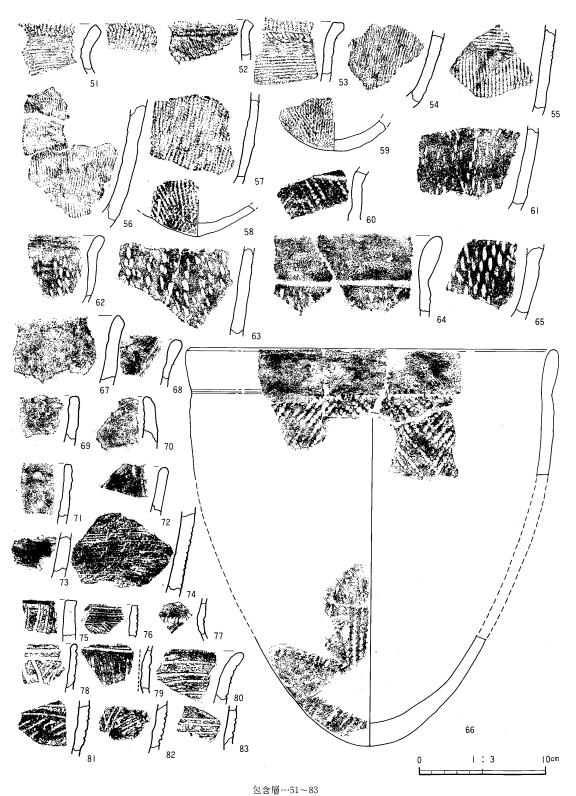


Fig. 53 縄文式土器(5)… I~Ⅲ群土器

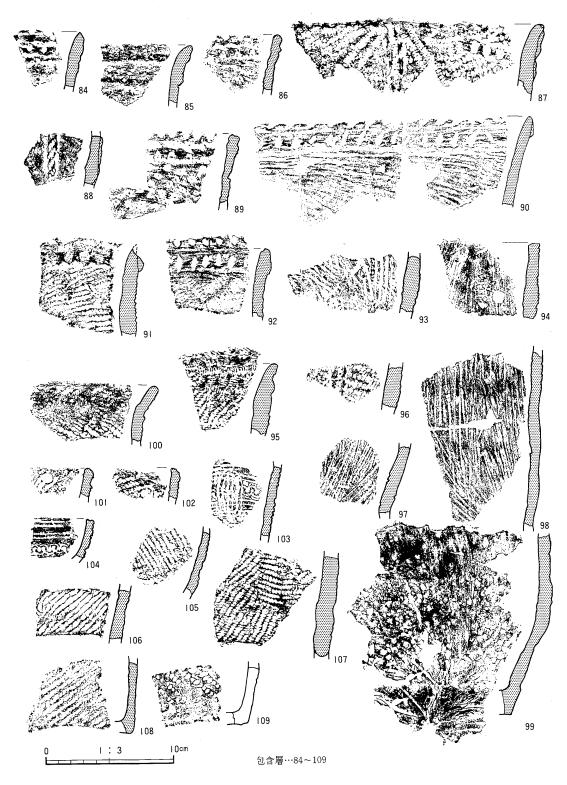


Fig. 54 縄文式土器(6)…Ⅳ·Ⅴ群土器

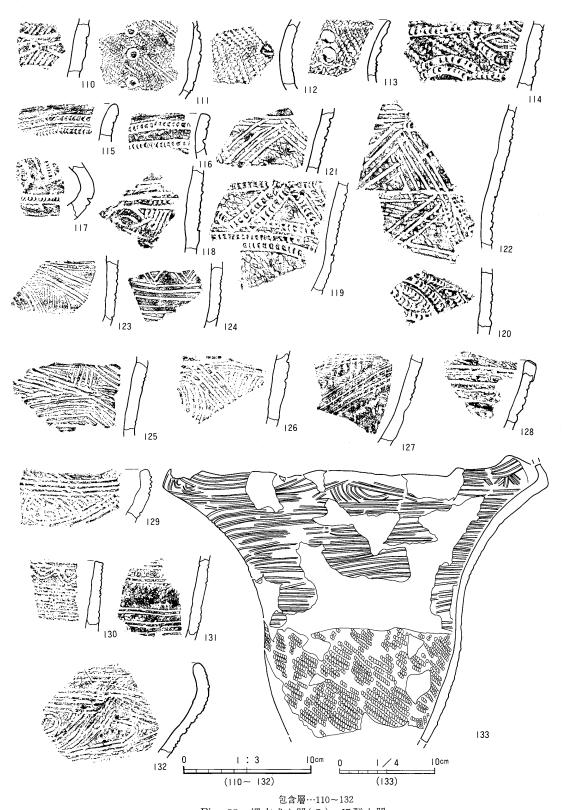


Fig. 55 縄文式土器(7)…VI群土器

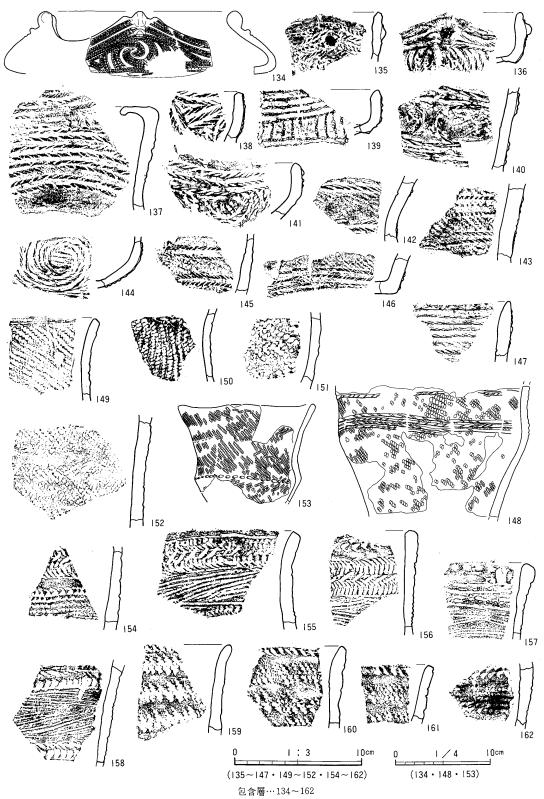
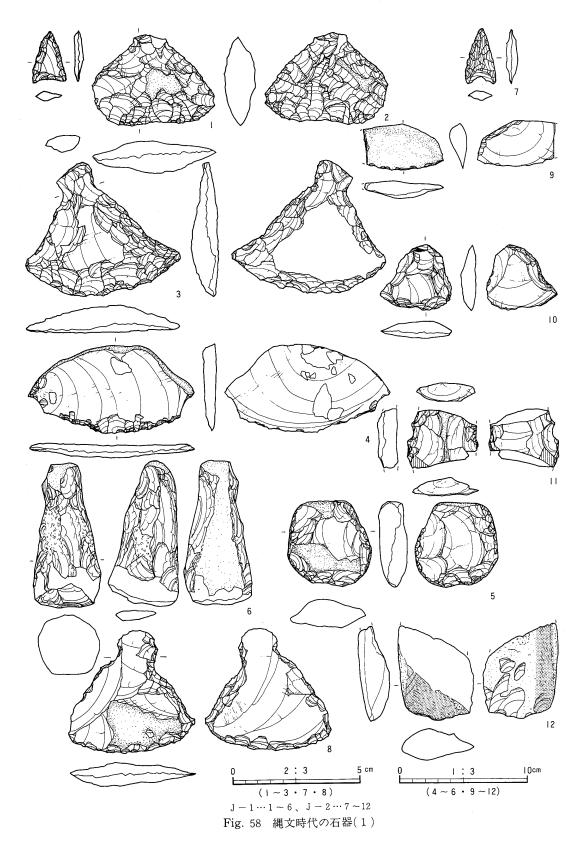
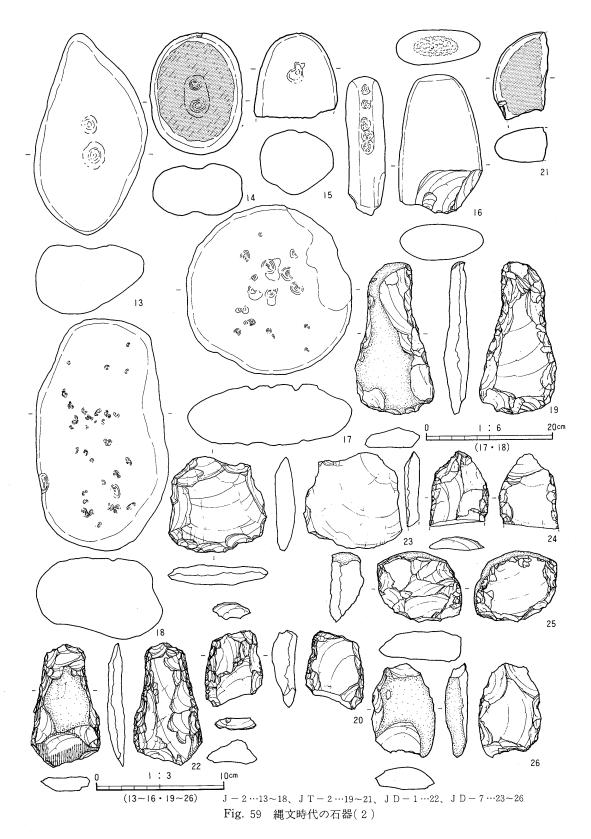


Fig. 56 縄文式土器(8)…VI群土器



Fig. 57 縄文式土器(9)…WI・WI群土器





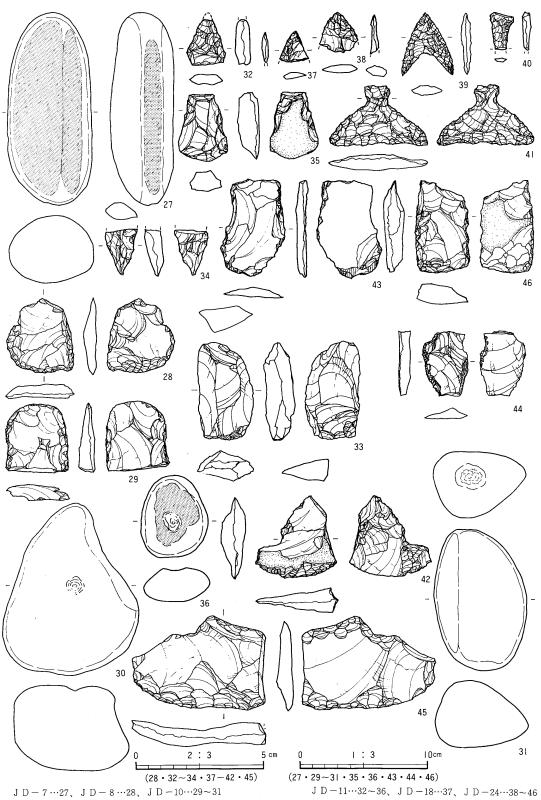


Fig. 60 縄文時代の石器(3)

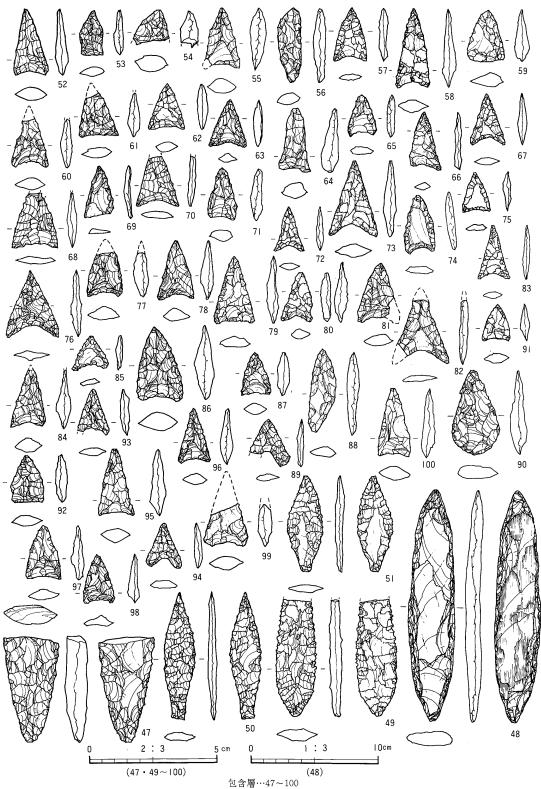


Fig. 61 縄文時代の石器(4)

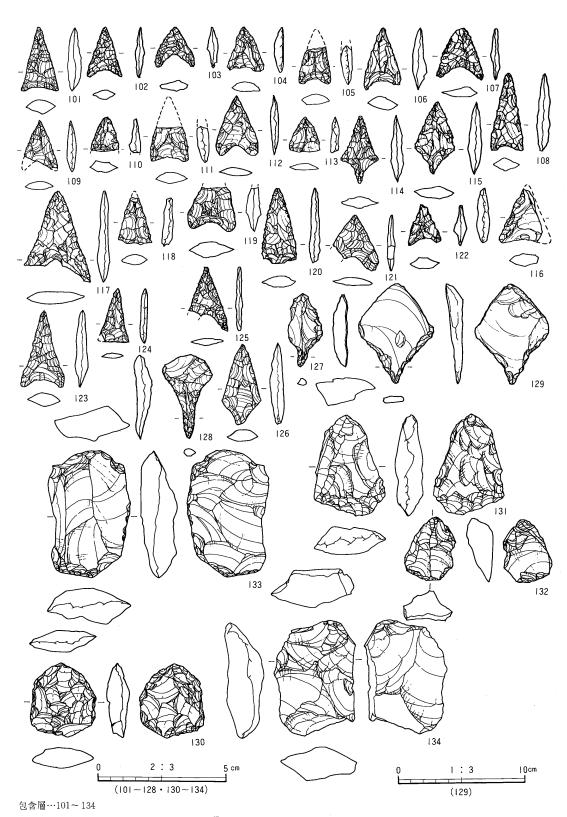
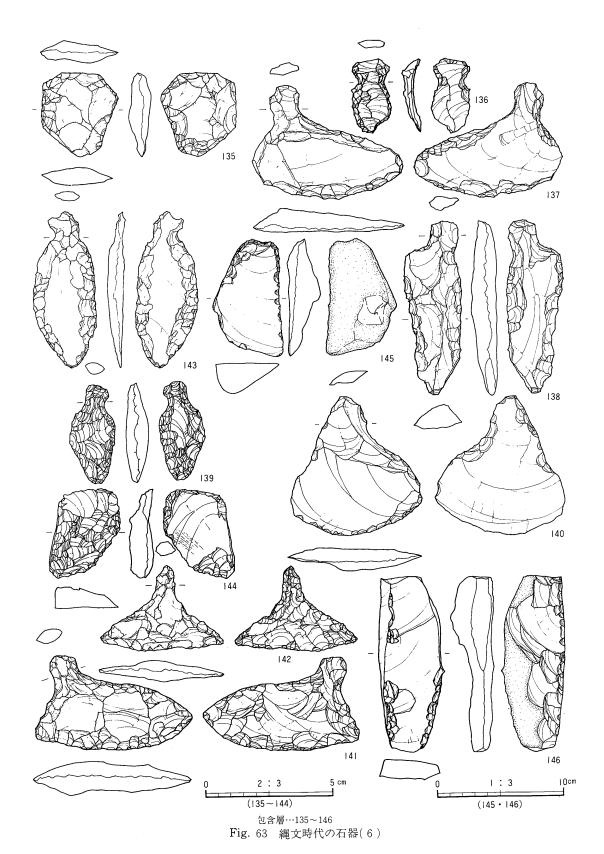
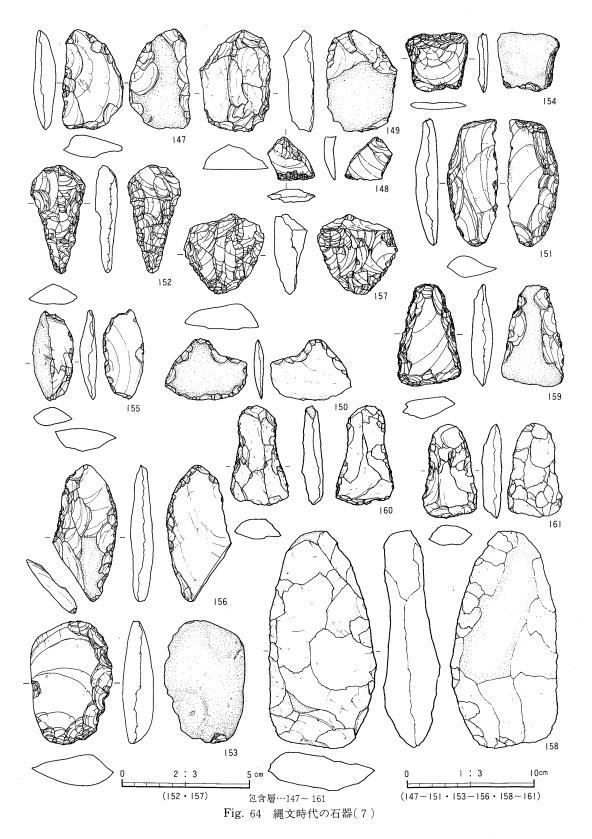
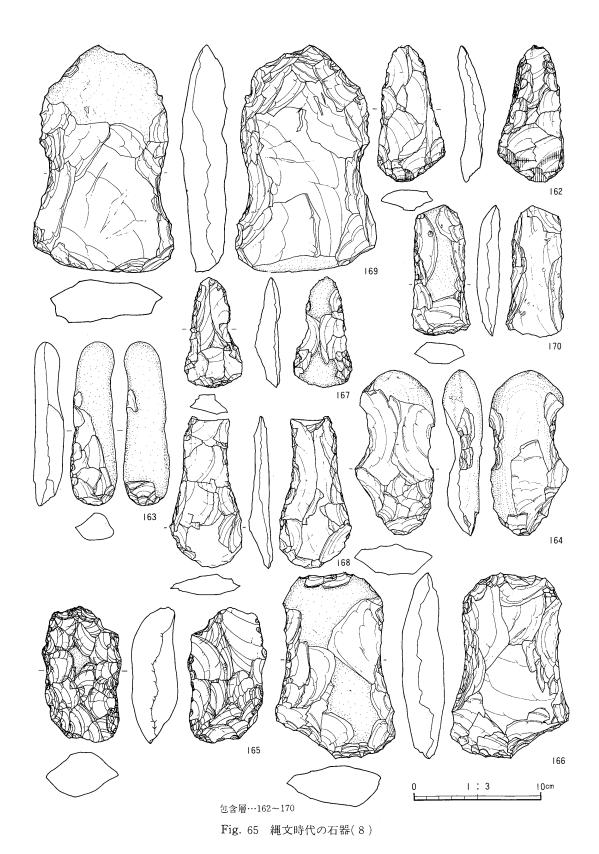


Fig. 62 縄文時代の石器(5)







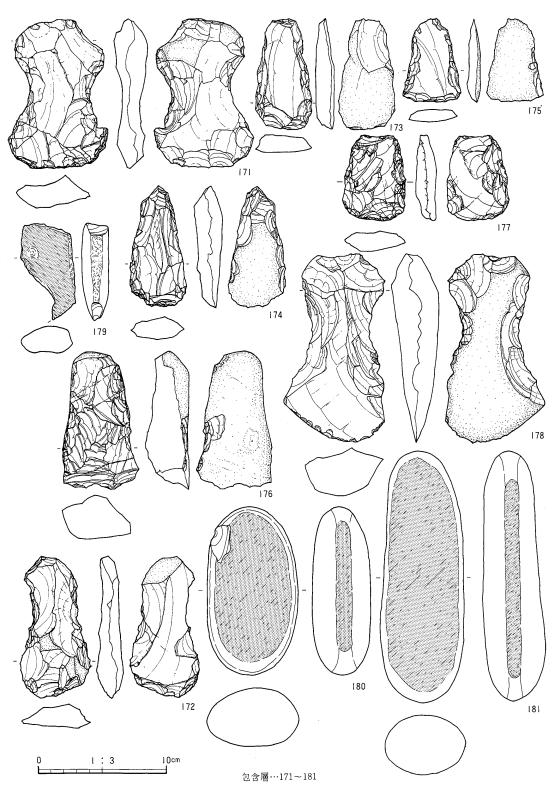


Fig. 66 縄文時代の石器(9)

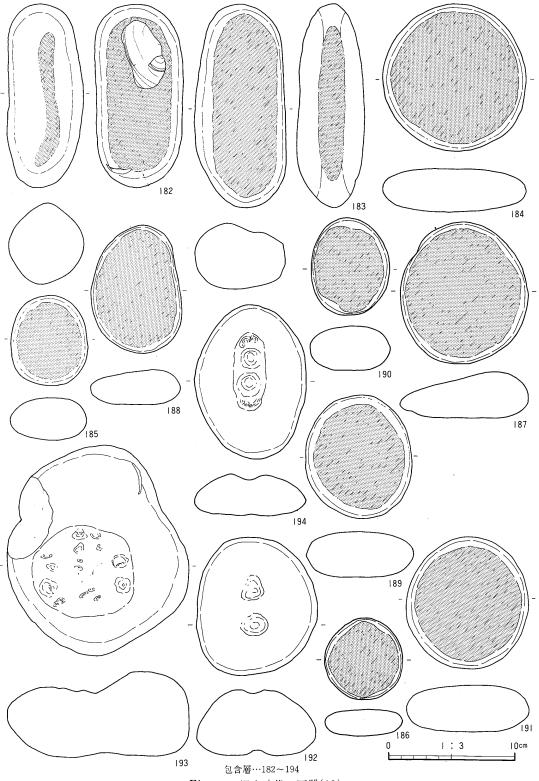
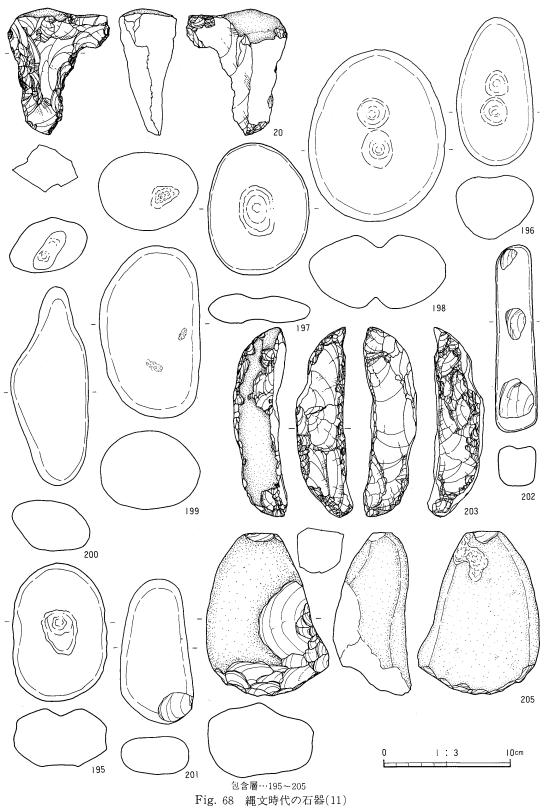


Fig. 67 縄文時代の石器(10)



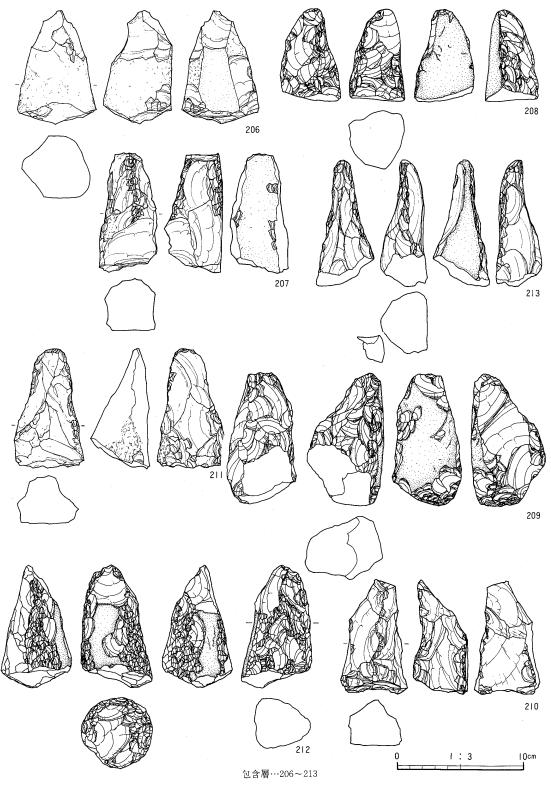


Fig. 69 縄文時代の石器(12)

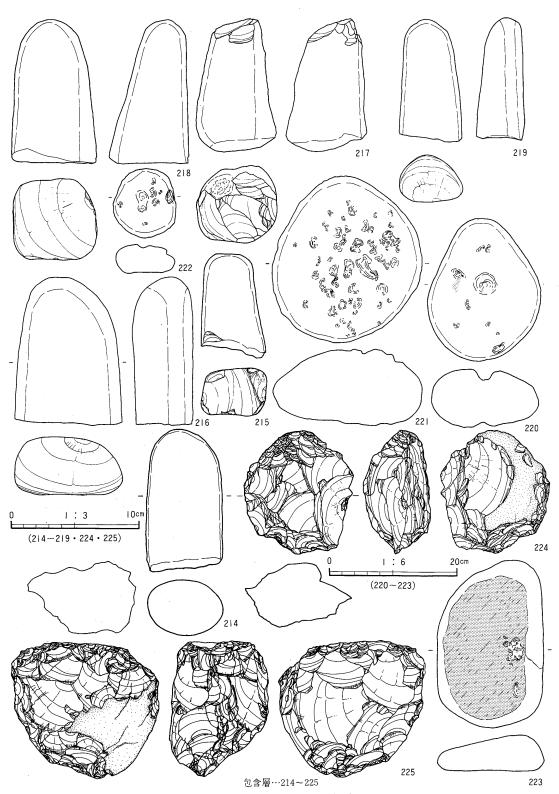


Fig. 70 縄文時代の石器(13)

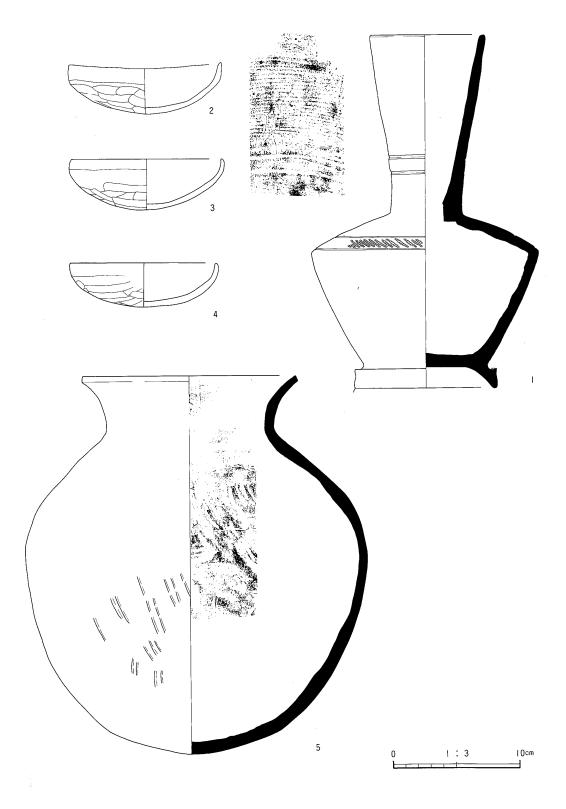


Fig. 71 古墳~平安時代の遺物(1)

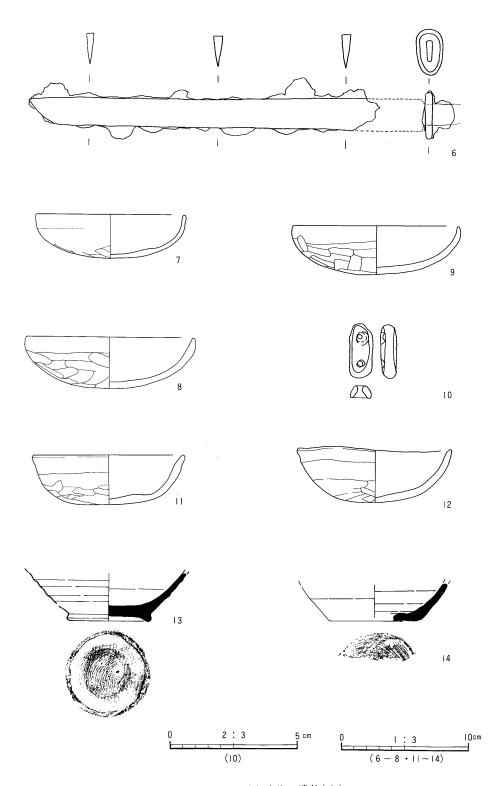


Fig. 72 古墳~平安時代の遺物(2)

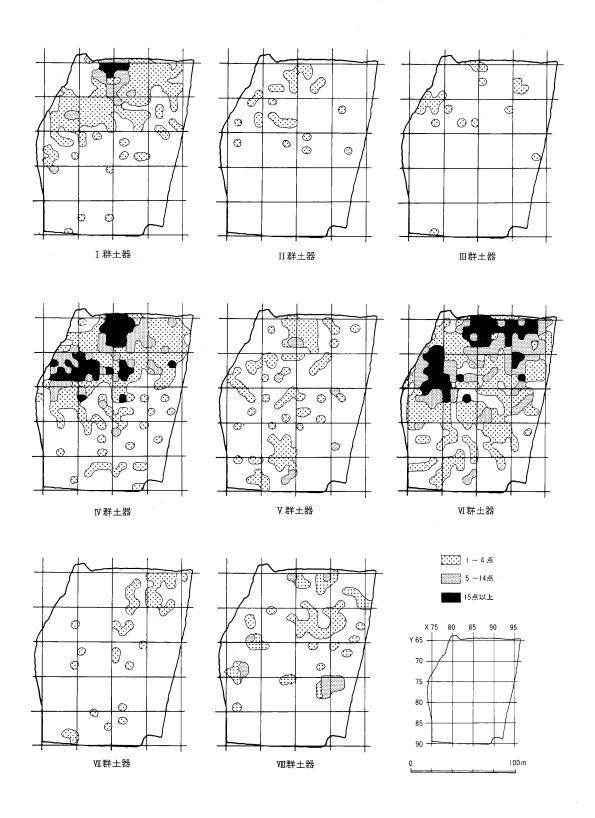


Fig. 73 縄文時代包含層の遺物分布(1)

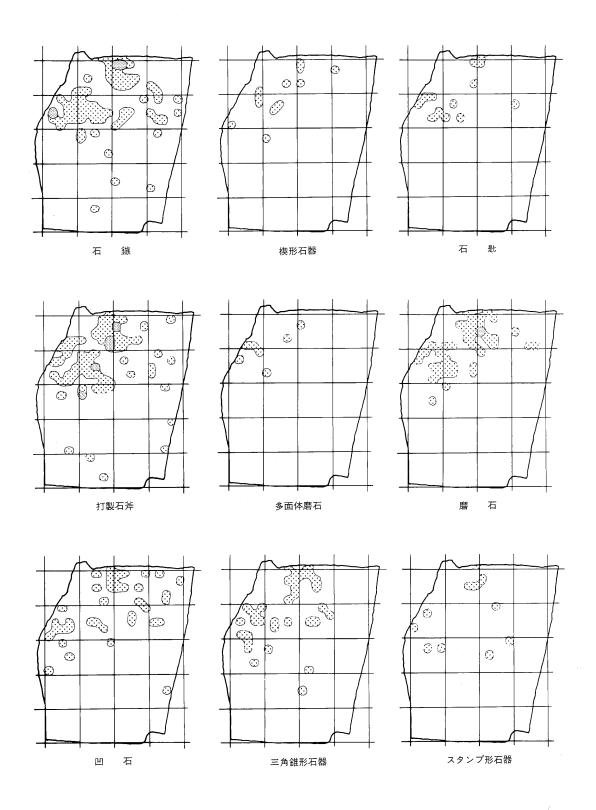
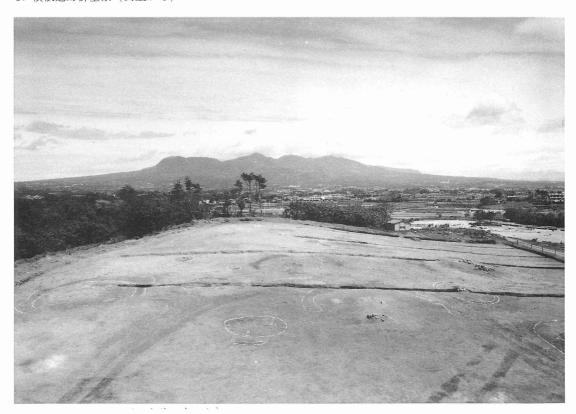


Fig. 74 縄文時代包含層の遺物分布(2)



1. 横俵遺跡群全景(真上から)





1. 熊の穴Ⅱ遺跡全景(南から)

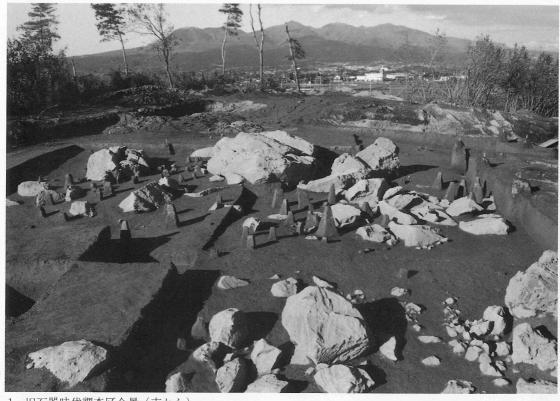


2. 深掘りセクション (南から) 4. B区全景 (南西から)



3. 山頂部深掘りセクション(北から)





1. 旧石器時代調査区全景(南から)

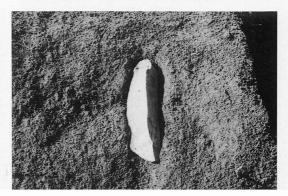


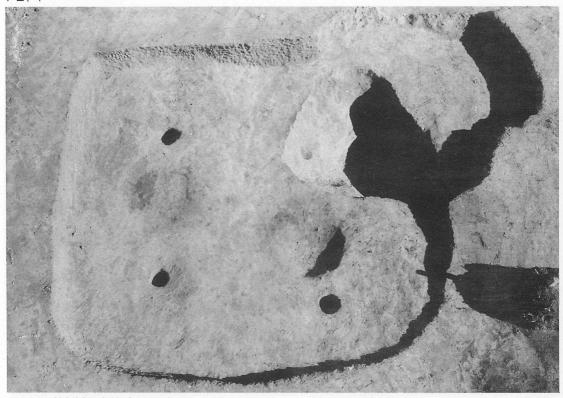
2. 旧石器出土状態(北西から)





3. 旧石器出土状態(北から)

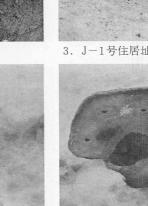




1. J-1号住居址全景(西から)

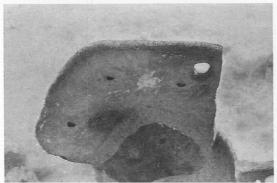


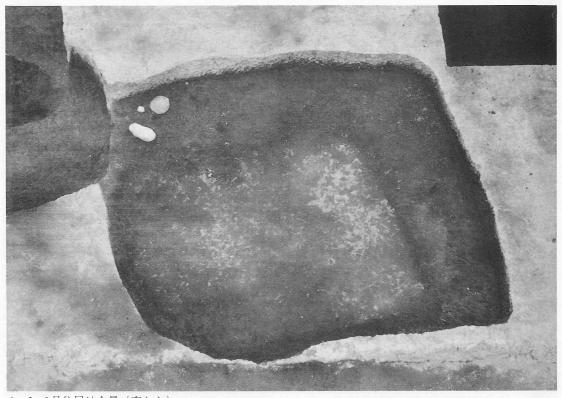
2. J-1号住居址遺物出土状態 (西から)



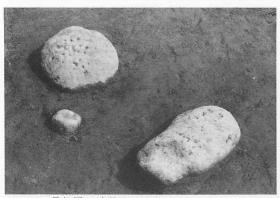


3. J-1号住居址遺物出土状態(西から)

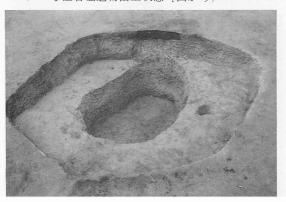




1. J-2号住居址全景(南から)



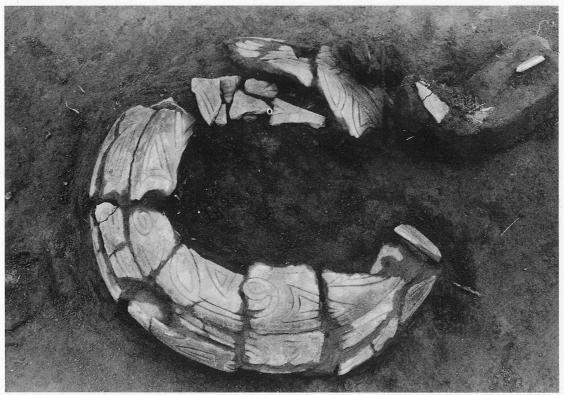
2. J-2号住居址遺物出土状態 (西から)



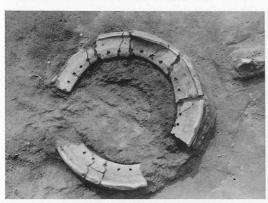


3. J-2号住居址遺物出土状態(南西から)

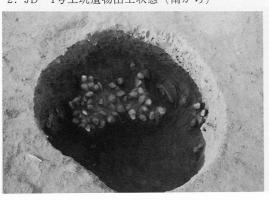


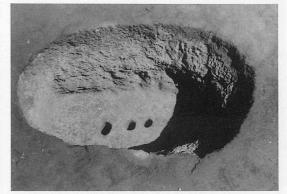


1. JD-1号土坑遺物出土状態(南から)

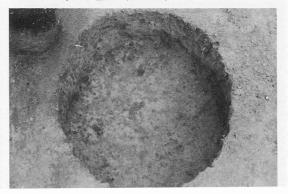


2. JD-1号土坑遺物出土状態(南から)



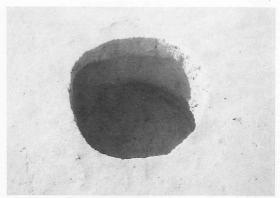


3. JD-5号土坑全景(西から)

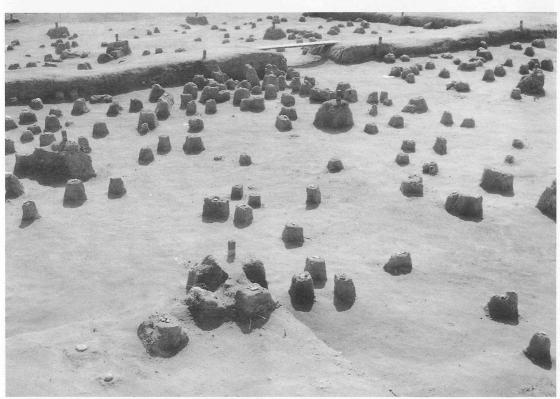




1. JD-10号土坑遺物出土状態(北から)



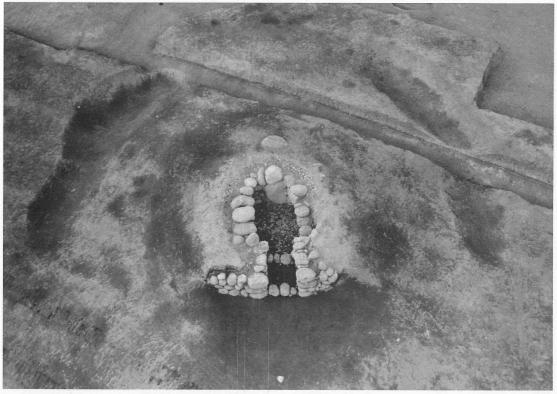
2. JD-24号土坑全景 (東から)



3. 縄文時代遺物包含層遺物出土状態(北西から)



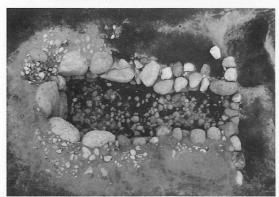




1. M-1号墳全景(南から)



2. M-1号墳全景 (調査前・南から)



4. M-2 号墳主体部全景(真上から)



3. M-1号墳全景 (南から)



5. M-4 号墳全景 (南から)



1. M-6号墳主体部全景(南から)



3. M-7号墳主体部全景(真上から)



5. M-8号墳遺物出土状態(南から)



7. M-10号墳全景 (南から)



2. M-7号墳主体部・前庭部(南から)



4. M-7号墳全景(南から)



6. M-8号墳主体部全景(南から)



8. M-10号墳主体部掘り方全景 (東から)

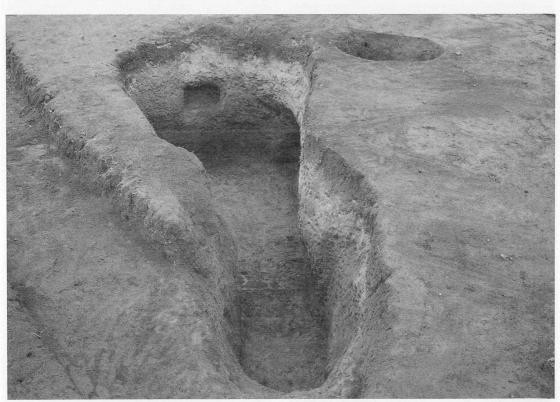
## PL.10



1. H-1号住居址全景(西から)



2. K-1号炭窯址煙道部(南から)



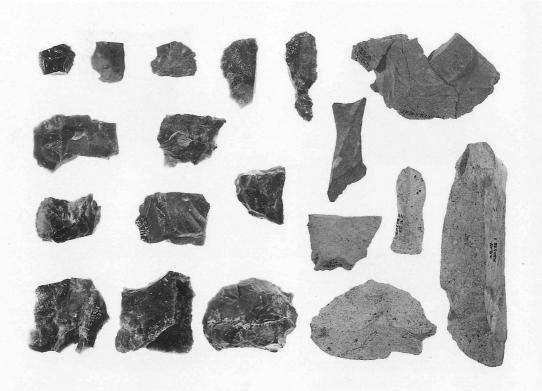
3. K-1号炭窯址全景(南東から)







1. 旧石器 (ナイフ形石器ほか)



2. 旧石器 (石核・剝片)

PL.12



1. J-1号住居址(6)

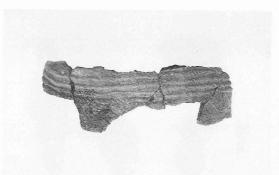


3. JT-2号竪穴遺構(21)



5. JD-7号土坑(33)

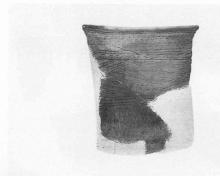




2. J-2号住居址(13)

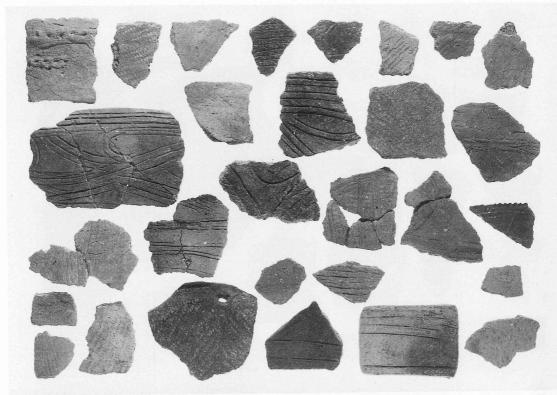


4. JD-1号土坑(31)

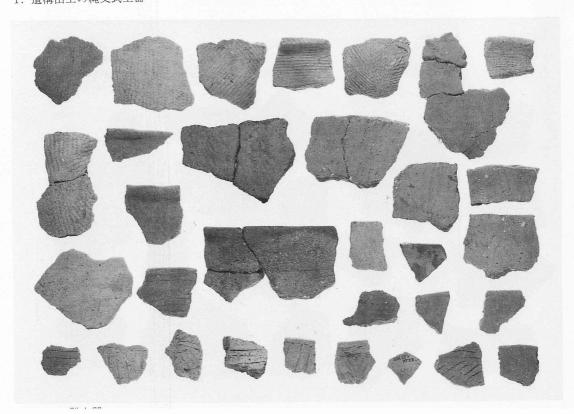


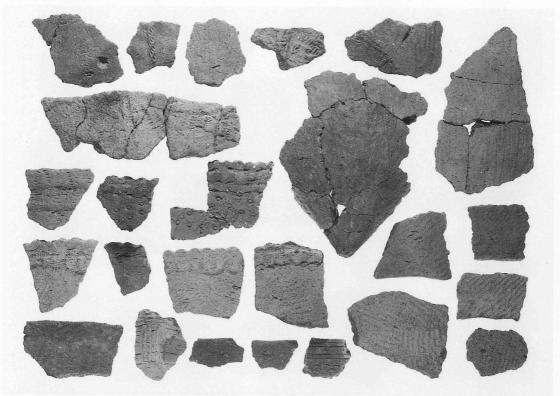
6. JD-24号土坑(46)



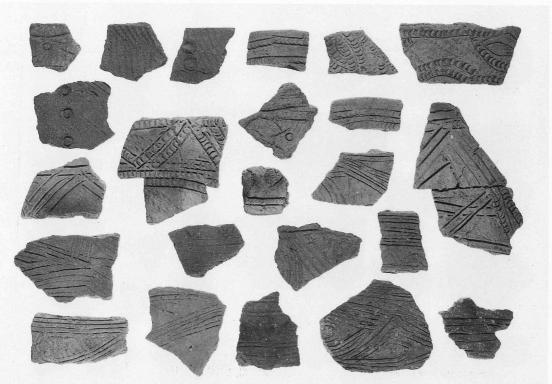


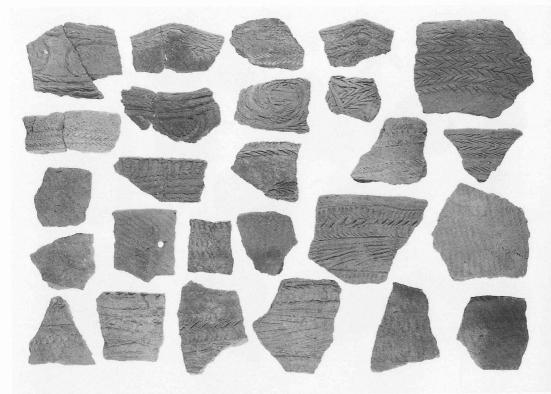
1. 遺構出土の縄文式土器



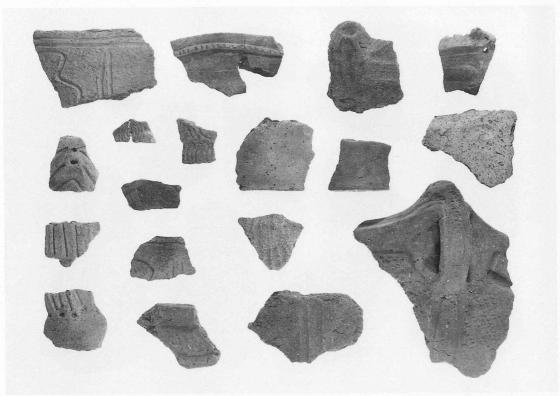


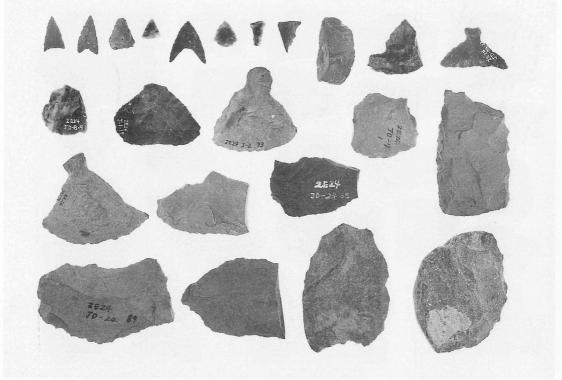
1. IV · V 群土器



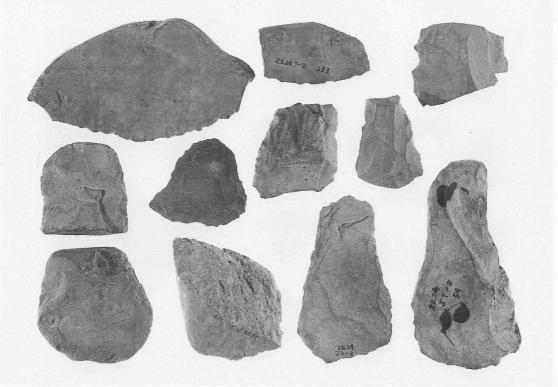


1. VI群土器





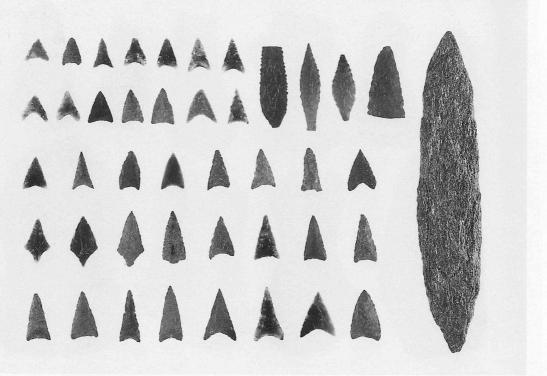
1. 遺構出土の石器(1)



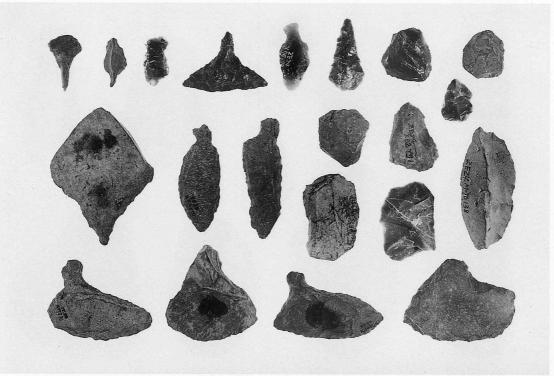
2. 遺構出土の石器(2)



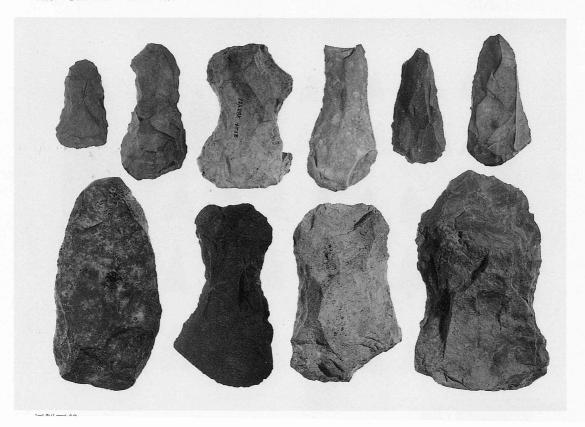
1. 遺構出土の石器(3)

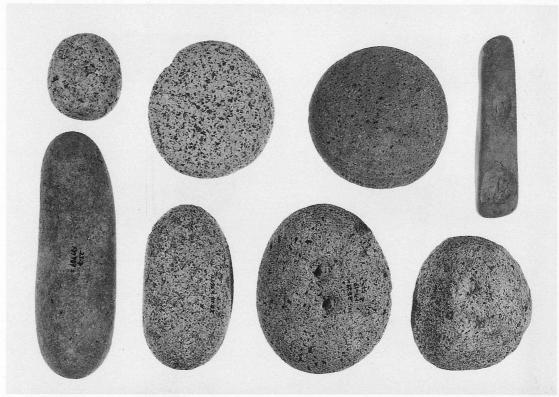


2. 石槍·有舌尖頭器·石鏃

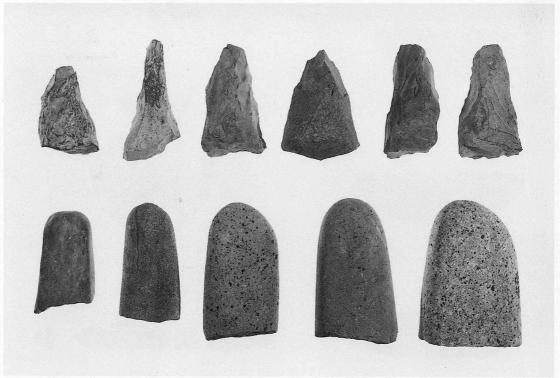


1. 石錐・楔形石器・石匙・削器





1. 多面体磨石・磨石・凹石・敲石



2. 三角錐形石器・スタンプ形石器



1. M−1号墳(2)



2. M-2号墳(3)



3. M-2号墳(4)



4. M-10号墳 (7)



5. M-10号墳(8)





7. H-1号住居址 (10)



8. H-1号住居址 (11)



9. M-1号墳(1)



10. M-7号墳(5)



## 調査要項

遺 跡 名 称 横俵遺跡群(よこだわらいせきぐん)・熊の穴II遺跡(くまのあなにいせき)

遺跡記号 2 E 24

遺跡所在地 群馬県前橋市西大室町16番地ほか

調 查 期 間 平成 2 年 5 月16日~平成 2 年11月30日

調査面積 10,000m²

開発面積 550,000m²

調 查 原 因 荒砥工業団地造成

調查依頼者 前橋工業団地造成組合管理者清水一郎

調查主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団 長 遠藤次也

事務局 事務局長 福田紀雄 事務局次長 遠藤和夫

財政係員 内田由治郎 藤岡龍弘 庶務担当 須田みずほ 田野真喜子

調查担当者 都所敬尚 狩野吉弘

調査参加者 阿部 こう 阿部シゲ子 飯島 いし 飯島民弥 石関秀男 江口よしの 大塚美智子

大野京子 小沢和代 落合高男 喜楽トヨ 桐谷秀子 久保田海-郎 小島勝雄 小沼豊子 小沼はつ 近藤三代子 斎藤まき子 柴崎まさ子 下飯有利子 鈴木民江 高橋正雄 田口桂子 多田啓子 戸丸澄江 長岡徳治 中沢敏雄 原島なか

福島逸司 松倉りつ 村山ふで 茂木 順 茂木孝江 山口きく枝

調 査 協 力 群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋工業団地造成組合

飯島静男 飯塚 誠 上野克巳 大山知久 柏瀬順一 加部二生 亀山幸弘 木村 浩 小島純一 鹿田雄三 杉山秀宏 関根吉晴 早田 勉 田口正美 西田健彦 羽鳥謙三 吉本千保 綿貫綾子 侑イズミトレス (侑古環境研究所 シン航空写真株式会社 スナガ環境測設

株式会社測設 大洋航空株式会社 たつみ写真スタジオ 株式会社パスコ

プラス株式会社

(五十音順 敬称略)

## 横 俵 遺 跡 群 Ⅲ

平成3年3月20日 印 刷

平成3年3月25日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町 664-4 TEL. 0272-31-9531

印 刷 上毎印刷工業株式会社

